

## KANAGAWA NO KOUKOGAKU

Vol.24

(Bulletin of KANAGAWA Archaeology Foundation)

## CONTENTS

Project Team for Paleolithic Studies:  
Reconsideration of Kanto loam layer classification at Hadano region -Current status  
and future issues in the western part of the Sagami River..... 1

Project Team for Jōmon Period Studies:  
Change of the Jōmon Culture in Kanagawa Prefecture (Ⅲ): An Example in the first  
part of Late Period. An Aspect of the Horinouchi-Type Pottery Period,Part5 ..... 7

Project Team Yayoi Period Studies:  
The Corpus of Yayoi pottery-Coffin in Kanagawa Prefecture (3)..... 27

Project Team for Kofun Period Studies:  
Track of Dr. Naotada Akaboshi, A Pioneer of Archaeological Research in Kanagawa  
Prefecture (16): A Report of Materials of the Kofun Period in the So-called  
"Akaboshi Note"..... 39

Project Team for Nara-Heian Period Studies:  
Hardware in the Nara and Heian Periods in Kanagawa Prefecture:  
The Corpus of iron manufacturing artifacts (2) ..... 47

Project Team for Medieval Age Studies:  
Remains of the medieval period in central Kanagawa (11)..... 65

Project Team for Early Modern Age Studies:  
The Corpus of Common Houses in the Early Modern Age (11)..... 77

Research-aid paper  
Sagara Hideki: Developments of an identification method for ancient fagaceous nuts... 87

March, 2019

KANAGAWA Archaeology Foundation

Yokohama, Japan

研究紀要 24

かながわの考古学

二〇一九

公益財団法人  
かながわ考古学財団

## かながわの考古学

2019.3

公益財団法人 かながわ考古学財団

# かながわの考古学

2019.3

公益財団法人 かながわ考古学財団

## はじめに

1990（平成2）年11月に神奈川県埋蔵文化財センターより刊行された『かながわの考古学』第1集から、1995（平成7年）刊行同第5集までを引き継いで、1996（平成8）年に神奈川県立埋蔵文化財センターと財団法人かながわ財団によって、新たに研究紀要Ⅰ「かながわの考古学」が刊行されました。2000（平成12）年の研究紀要5からは財団法人かながわ考古学財団によって単独で刊行することとなりました。2012（平成24）年に当財団は財団法人から公益財団法人に移行した後も、引き続き研究紀要の刊行を続け、本年度は財団設立25年を迎え、研究紀要は24号を数えることとなりました。

発刊以来続けている神奈川県内の考古学について各時代の研究プロジェクトによる研究成果に加え、本書では昨年度に続き当財団の研究助成制度による当財団職員の論文も掲載しております。

本書が考古学研究の一助となることを願うとともに、皆様のご高評、ご批判を賜りますようお願いしております。

2019（平成31）年3月

公益財団法人 かながわ考古学財団

## 目 次

再論 秦野地区の層序区分について	
－相模川以西のローム層序における現状と今後の課題－	
旧石器時代研究プロジェクトチーム	1
神奈川県における縄文時代文化の変遷Ⅷ	
－後期前葉期 堀之内式土器文化期の様相 その10－	
縄文時代研究プロジェクトチーム	7
弥生時代後期堅穴住居の研究（3）	
弥生時代研究プロジェクトチーム	27
考古学の先駆者 赤星直忠博士の軌跡（16）	
－通称「赤星ノート」の古墳時代資料紹介－	
古墳時代研究プロジェクトチーム	39
神奈川県における古代の仏教関連遺物（2）	
奈良・平安時代研究プロジェクトチーム	47
神奈川県 of 県央地域の中世遺跡（4）	
中世研究プロジェクトチーム	65
近世道状遺構の集成（4）	
近世研究プロジェクトチーム	77
研究助成論文	
ブナ科種子同定方法の開発	相良英樹 87

## 例 言

1. 本書は、公益財団法人かながわ考古学財団の職員で構成する研究プロジェクトチームが、時代ごとに共同研究を行った結果を掲載するものである。

また、公益財団法人かながわ考古学財団が平成28・29年度に研究助成を行った研究成果を掲載する。

2. 各研究プロジェクトチームの構成は以下のとおりである。

(五十音順・◎はプロジェクトリーダー、○はサブリーダーを示す)

・旧石器時代研究プロジェクトチーム

井関文明・大塚健一・○栗原伸好・鈴木次郎・◎畠中俊明・西井幸雄・三瓶裕司・  
脇 幸生

・縄文時代研究プロジェクトチーム

阿部友寿・天野賢一・井辺一徳・岡 稔・小川岳人・小島清一・粕谷 隆・  
◎野坂知広・村松 篤・山田仁和

・弥生時代研究プロジェクトチーム

飯塚美保・◎池田 治・○新開基史・戸羽康一・渡辺 外

・古墳時代研究プロジェクトチーム

◎植山英史・岡戸哲紀・○柏木善治・岸本泰緒子・新山保和・吉澤 健

・奈良・平安時代研究プロジェクトチーム

池田敏宏・◎加藤久美・川嶋実佳子・○相良英樹・諏訪間直子・高橋 香・  
西田真由子・宮井 香

・中世研究プロジェクトチーム

信田真美世・中村淳磯・◎松葉 崇・○宮坂淳一・山口正紀

・近世研究プロジェクトチーム

◎木村吉行・後藤信義・眞鍋早紀・○南出俊彦

# 再論 秦野地区の層序区分について

## －相模川以西のローム層序における現状と今後の課題－

旧石器時代研究プロジェクトチーム

### はじめに

近年、新東名高速道路や国道246号線厚木秦野道路建設事業など大規模道路開発に伴う発掘調査事例の増加に伴い、伊勢原・秦野市域等相模川以西における旧石器時代の調査事例が急増している。ところが、これまで当該期の調査事例が少なかった県西部においては、層位について相模川東岸の相模野台地の基本層序と対比して記述してきた。しかしながら、富士山からの距離も近く、火山噴出物が大量に降灰している相模川以西の県西部では、相模野台地の層序とは全く異なる様相を呈している。そのため、相模川以西における基本層序の共通認識が急務となっている。今年度は、秦野市内にて近年調査された遺跡の漸移層から上位ローム層について、現状と課題の抽出を試みる。

(高中俊明)

### 養毛小林遺跡

養毛小林遺跡は秦野盆地北東部に位置し、丹沢山地南側裾部に広がる扇状地の緩斜面上に立地する。標高は約200m前後である。以下、本稿では2018年度調査区のうちIX区南側（県道部分）の地層について記述するが、この地点で観察が可能であったのは漸移層からL1H層上部に相当する地層であった。いずれも富士・箱根系の火山砕屑物である風化スコリアを多く包含する。

地層の土色と包含された風化軟質スコリアの面積割合は『新版 標準土色帖 38版』（小山・竹原2016）、粒度区分は地質学分類、相模野ロームの分層区分とY-No. は上本進二・上杉陽（1996）による。なお、地層の柱状図は本財団年報（吉澤 2017・2018）を基に、旧石器プロジェクトメンバーによる観察所見を加えた概略図である。

**漸移層相当層：**本遺跡では漸移層の段階に相当する地層がロームとして上下2層（①・②）に細分された。①漸移層相当層上位：褐色（10YR4/6）細粒砂混じり粘土質シルト層で、土壌生成に伴う暗色化がわずかにみられる。地層のしまりがすこぶ強い。調査地付近で層厚は30～40cmあるが、下位層との層界は漸变的で不明瞭である。調査地がやや傾斜のある斜面地であることから、風積・斜面崩積の複合的な作用で厚く堆積したものと思われる。箱根系の降下テフラの可能性のある径1mm未満の白色粒子が10%、径3mmの橙色スコリアが30%、径5～10mmの黒褐色スコリアが20%包含される。いずれも風化と軟質化が著しい。白色粒子は本層の上部に集中する。

②漸移層相当層下位：褐色（7.5YR4/4）細粒砂混じり粘土質シルト層で、



第1図 柱状図

マトリックスは上位層の①と相似する。層厚は30cm前後である。下位層との層界は画然であり極めて明瞭である。径1～3mmの赤褐色スコリアが30%、径1～3mmの橙色スコリアが20%、径5mmの黒褐色スコリアが20%含まれる。スコリアの風化が進み細粒化と軟質化が著しい。

**L1S相当層**：本遺跡では降下テフラが厚く堆積した状態で認められ、以下の3層（③～⑤）に細分された。

③L1S相当層1層（降下テフラ）：Y-139とみられる降下テフラの純層で、フォールユニットの累積構成をよく残す。層厚は約15cmである。上部は黒褐色（10YR3/2）極粗粒砂～細礫の火山砂礫で、5～10mmの火山礫がわずかに混じる。下部が暗赤褐色（5YR3/6）粗粒～極粗粒火山砂で構成される。風食等の下方侵食により部分的に地層が分断され、ブロック状になった部分がある。下位層との層界は極めて明瞭である。

④L1S相当層2層（スコリア層）：褐色（7.5YR4/6）細礫を含む粘土混じりシルト質細粒～極粗粒砂の火山砕屑物からなる。Y-138テフラ群とみられる。層厚は約25cmでやや軟質のスコリアや軽石・凝灰岩質で未固結の砕屑物で構成され、地層のしまりがゆるい。砕屑物が混合しており淘汰は不良であるものの、それらの配列の一部に葉理構造がみられた。こうした構造が擾乱されずに残ったことから、本層の堆積期間は短かったと考えられる。下位層との層界は明瞭である。風化した径1～5mmの赤褐色スコリアが40%、径10mm前後の黒褐色スコリアが30%含まれ、黒褐色スコリアは上部により多く包含されている。また、下部を中心に暗赤褐色（5YR3/6）シルト質中粒～極粗粒火山砂がノジュール状の塊となって含まれる。もとは降下テフラの純層で風積・斜面崩積によって原位置を遊離した二次堆積物とみられる。

⑤L1S相当層3層：褐色（7.5YR4/6）粘土混じり細粒～中粒砂質シルト層で、層厚は15～20cmであった。下位層との層界はやや不明瞭である。径1～5mmの橙色・黄褐色スコリアを30%、径1～3mm黒褐色スコリアを20%含む。風化と土壌生成が進んでいるため、スコリアの軟質化が著しい。下部では橙色スコリアとともににぶい赤褐色（5YR4/4）粘土混じりシルト質細粒～粗粒火山砂がノジュール状の塊となって含まれる。

**BBO相当層**：本遺跡では淡い暗色帯として認められた。上下2層（⑥・⑦）に細分された。

⑥BBO相当層1層（暗色帯）：暗褐色（7.5YR3/4）極細粒砂混じりシルト質粘土層で、風化と土壌生成に伴う粘土化が進行し淡い暗色帯を形成している。層厚は約25cmで、下位層との層界は不明瞭である。径1～2mmの赤褐色スコリアを10%、径5mm前後の黒褐色スコリアを10%含む。スコリアは風化がよく進んでおり、細粒化と軟質化が著しい。なお、本層の上部10cmほどは、やや明るい褐色（7.5YR4/6）の細粒～中粒砂混じり粘土質シルトで、上位の⑤L1S相当層3層の土壌生成に伴う下方擾乱の影響がみられる。L1S層に由来する径1～3mmの橙色・赤褐色スコリアが混在した状態で20%ほど含まれる。

⑦BBO相当層2層（暗色土）：わずかに細礫を含む暗褐色（7.5YR3/4）細粒砂混じりシルト質粘土層で、上位層と同様に淡い暗色帯を形成している。層厚は15～20cmで、下位層との層界はやや不明瞭である。径1～2mmの赤褐色スコリアを10%含む。径5mm前後の黒褐色スコリアも認められるが、上位層より少ない。スコリアは風化がよく進んでおり、細粒化と軟質化が著しい。

**L1H相当層**：本遺跡では掘削深度の都合で上部の⑤のみ確認することができた。

⑤L1H相当層1層（降下テフラを含むローム層）：Y-137-3とみられる降下テフラの層準である。褐色（7.5YR4/6）細粒砂混じり粘土質シルト層で、上位層に比べて土層のしまりが強まる。層厚は15cm前後である。径1～3mmの赤褐色スコリアを20%含む。層中に暗赤褐色（5YR3/6）粗粒～極粗粒火山砂+硬質スコリアがノジュール状の塊となって含まれるが、一部は風化が進み、単に赤褐色スコリアが斑紋状に濃集した部分も認められた。

年代について：養毛小林遺跡では、2017年度調査でVI区においてLIS相当層3層の最下部から槍先形尖頭器と珪質頁岩製掘器・削器などからなる神子柴段階の石器群が出土した。

神奈川県下では、隆起線土器が出土した大和市月見野上野遺跡第2地点で15020-14280cal BP、LIS層上位から無文土器と槍先形尖頭器が出土した清川村宮ヶ瀬北原遺跡で15970-15290cal BPの年代が得られている。細石刃石器群では、最も古い代官山型細石核は綾瀬市吉岡遺跡群B区においてLIH層上部で20750-19290cal BP、BBO層下部で野岳・休場型細石核が出土した相模原市当麻遺跡第1地点では20190-19140cal BPで、BBO層最下部の年代は概ね20000cal BPであろう（中村2014）。

北方系削片系細石核石器群は、新潟県荒屋遺跡においてUG火山灰（As-YP・浅間板鼻黄色：16990-15620cal BP）と同じ噴火輪廻のAs-K（浅間草津）テフラ下位から石器群が出土しており、17650-16690cal BP、17440-15790cal BPの年代が得られている。なお、UG（As-YP）火山灰は相模原市田名向原遺跡でBBO層上部、当麻遺跡でLIS層中において検出されている。こうしたことから、船野型細石核および北方系細石刃石器群が出現するBBO層中部からLIS層最下部は、概ね17500-16000cal BPとみられる（中村ibid.）。

（絹川一徳）

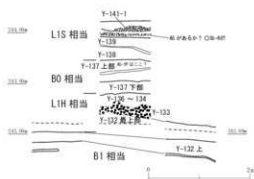
### 横野山王原遺跡と菖蒲平台遺跡

横野山王原遺跡（以下横野）は、秦野市北部の秦野市横野216-1外に位置し、唐沢川と矢坪沢に挟まれた緩斜面上に立地し、標高230～250mを測る。また、菖蒲平台遺跡（以下菖蒲）は、秦野市北西部の秦野市菖蒲外に位置し、東西が急斜面や崖面で画されたやせ尾根上に立地し、標高は約220mである。

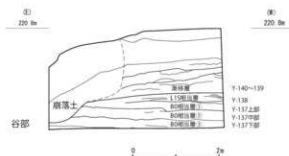
両遺跡は、テフラ供給源の富士山からは直線距離でおよそ40km内外に位置する。菖蒲はやや富士山に近いものの、尾根上地形のため、ローム層より上位は横野と比べて層厚が極めて薄い。両遺跡とも都留文科大学の上杉先生に分析頂き、富士火山噴出物に火山活動の順番を示したYナンバーを付与している（畠中2018）。

**漸移層相当層**：横野では、地点によってばらつきが大きいですが、概ね40～80cmの層厚で暗黄褐色を呈し上下2枚に分層できる。1～10mm径の橙色スコリアを多量に含み1～5mm径の灰色または黒色スコリアを含み極めて堅くしまっている。菖蒲では、約40cmの層厚で横野同様に1～5mm径の橙色スコリアと灰色スコリアをやや多く含む。因みに菖蒲では、Y-141～139に該当する。

**LIS相当層**：横野では、橙褐色または黄褐色を呈し、概ね上下2層に分層できる。層厚は約80cmを測り、上部には幅約20cmの青灰色スコリア帯（Y141-1）が堆積し、その上下でスベリ面がみられる。菖蒲では層厚約



第2図 横野山王原遺跡のローム層断面図



第3図 菖蒲平台遺跡の土層断面図



20～60 cmの黄褐色土である。ここでも青灰色のスコーリア塊を認め、スベリ面が顕著であるが、本層位にはY-140～139層およびY-138層が該当する。

**B80相当層**：横野では、暗黄褐色を呈し、粘性がかなり強く、締まりはローム層にはあまり強くない。概ね上下2枚に分層されることが多く、下層はヒスコリア質である。大粒（約10 mm径）の橙色スコーリアを多量に含む。Y-137-1～4・5～12も含まれる。また、本層位の上部に浅間火山起源のガラス片As-YPが散見された。菖蒲では、層厚およそ60 cmを測り、上①・中②・下③の3枚に分層され、①・②は暗黄褐色土、③は木付きの黄灰褐色土となる。横野同様Y-137群で、上部の①②には、As-YPが含まれていた。本層位の下部②③からは、ガラス質流紋岩を主体とする細石刃石器群が発見され、石器群に伴い炭化物が出土している。

石器群に伴った炭化物について放射性炭素14 C年代測定を実施した結果、暦年較正年代値で、17,580～17,404cal BP、17,819～17,629cal BP、17,789～17,591cal BP（IAAA-170352～170354）と測定された。

**L1H相当層**：横野では、中央に大粒（約10 mm径）の黒色スコーリア帯約20 cmを含む黄褐色土で、スコーリア帯を挟んで上下に分層可能である。層厚は約60 cmである。菖蒲では、中央や下部に大粒（5～10 mm径）の黒色スコーリア帯が約15 cm堆積し、直下に幅約10 cmほどの赤色スコーリア密集帯がみられる。暗黄褐色土で層厚は約80 cmである。黒色スコーリア帯はY-133?・132-4・3を含む。

以上、横野と菖蒲における漸層層からL1H相当層までを比較してきた。考古層位では、スコーリア以外に色調や粘性、しまりといった土質を手がかりに分層を試みている。今回、L1S相当層中でみられた、青灰色の大粒スコーリアの発泡した軽石が多くみられるスコーリア帯は、Y141-1またはY-139と確認されている。それぞれ、頻繁なスベリ面をもつ特徴的な地層のため、考古層位では同一層（L1S相当層）と解釈している。

また、B80相当層は、横野、菖蒲両遺跡とも概ね一致しており、菖蒲の炭化物から概ね17,500～17,800年前と捉えられた。考古層位においてL1H相当層を捉えるメルクマールとする大粒の黒色スコーリア帯は、横野ではY-133のみだが、菖蒲ではY-133・Y-132-4・3と細かく分層されている。概ね一致しているものの、考古層位と地質によるスコーリアの分層は、視点の違いなどから齟齬を生じる場合もあると考えられる。（高中）

## 戸川諏訪丸遺跡

遺跡は奈野盆地扇頂部にあり、東側には葛葉川へと合流する矢坪沢と西側の水無川に挟まれた標高270 m～260 mの南東向きの緩斜面にある。段丘面はBCVA（Y-94）を載せるオガ戸面に相当する（上杉2018）。

現地形は平坦な緩斜面に繼段状の陥没地形を呈し、陥し穴状土坑列群や集石群の検出から狩猟・野営地であった。人類の痕跡は漸移層上部の厚手爪形土器の1個体出土に遡る（砂田2018）。

層序説明は遺跡北西側の9・10 C区のNo. 21グリッド北面の深度3 mの分層からL1H層までを記載する。

層序の番号、呼称、テフラ番号（Y-n-n）（上杉1983、上杉ほか1987）、スコーリア・パミスの固結度、色調、AMS年代（測定番号、σ 2（95.4%）calBP中央平均値）（中村前掲書）、層序全体の所見等を記載した。各層厚は25 cm未満で、分層間では層滑り面、断層、亀裂、湧水、シルト化、酸化、グライ化等を記録している。

分層は、遺跡の地形面全体と分層面の立地と傾斜の認識が大前提である。分層線は第一次堆積後の第二次的要因による層序変性、亀裂、断層、裂罅、樹根痕跡等を記す。次にYNo.に対応するスコーリア密集層の分層、スコーリア分散層範囲の記載し、各スコーリア密集・分散層に挟まれた各層間を分層する。それ以外はスコーリア粒の大きさ、色調、形態、密集度、土壌化の多寡によって分層する。層滑り面は屢々上下層に極端な層相差を生じるなど、亀裂面、断層面、湧水面を起源として発生している。層滑りの厚さは粘質化した5ミリ前後

から同一層序内で極度に硬化した30ミリ前後の層厚を示している。

漸移層は4層に分層し、暗茶褐色で固結度が強く、Y-141群に相当する。爪形土器を出した上部は12,610cal.BP(本遺跡4区:IAAA-170432~170434)、1:粒径1-3mmの赤褐色スコリア、粒径5mm前後の黒灰色スコリアを含む。2:粒径5-10mmの黒褐色スコリアが密集、橙色スコリア2mm前後をやや含む。3:第2層スコリアが分散し、1-2mmの橙色スコリアが密集している。4:第3層が脱色した状態を示す(以下略述)。

LIS層への漸移層で、5:下位層を基層として非常に硬化する暗橙褐色層である。13,620 cal.BP(神成松遺跡第5地点:IAAA-133042~133044・133046)(パリオ・サーヴェイ 金井2014)。

LIS層は8分層、Y-139群。6層が最も硬化し、7~11層が硬く、12・13層やや軟層。6:暗赤褐色、暗赤褐色1-2mm、黒灰色±2mm、黄灰色1-3mm。15,620 cal.BP(大平山元I遺跡:NUTA-6506・6507・6509・6510・6515)(谷口・川口2001、川口2018)、15,630cal.BP(北原遺跡:Beta-150398・105400~105403)(パレオ・ラボ 1998)。十和田八戸火砕流(To-H)の石英赤色熱ルミネッセンス測定値は15,706±226ab2k(鈴木2018)。

7:橙褐色、橙色±3・灰色±2密集、8:灰橙褐色、赤褐色±2・灰色±2密集、層滑り、9:灰褐色、7層を基層、黒灰±1含む、10:灰褐色、灰褐色10-15散在、橙±5密集、11:暗黄灰褐色、10層が暗色化、12:黄赤褐色、橙色1-3密集、灰褐色±5・茶褐色3-5密集、13:暗赤褐色、暗赤褐色2-5密集、黄白色±3含む。

BBO層は3層に分層し軟質化が著しいが最下底で硬化。Y-138群に相当。上面は16,300cal.BP(養毛小林遺跡)。14:暗赤褐色、暗赤褐色±5密集、黒灰3-5、下位に層滑り。15:橙褐色、橙褐色1-2密集、黒灰±10・橙色1-5分散、17,290 cal.BP(福井洞窟9層:PLD21437-21439・22345-22346)。16:暗茶褐色、15層が暗色化、17,600cal.BP(菰蒲平台遺跡:IAAA-170352~4)(晶中2018)。17:BBO層からLH層への漸移層、茶褐色層。

LH層は7層に細分した。Y-137群に相当するが、最下底はY-137-2>1。18:暗茶褐色、スコリア密集:黒灰5-10・橙褐色3-10密集、白色パミス。20,020calBP(吉岡遺跡群B区:Tka-11599・11613)(吉田ほか1999)。19:茶褐色、灰黒2-10・橙茶3-5散在、3-6層ほぼ同一。20:暗灰褐色、暗灰褐色5-10密集、橙3-10発泡穴、黒灰±2やや含む。Y-137:LH黒褐色3-10密集、赤褐色1-3密集。21:茶褐色、層滑り、19層土。22:茶褐色、橙褐色2-5密集、黒灰5-20混在。23:暗茶褐色、23層類似、黒褐色大形スコリア部分密集。24:暗茶褐色、黒褐色5-10散在、橙褐色±2散在、白色散在。21,370calBP(養毛小林遺跡:考古学財団編)。

(砂田佳弘)

## おわりに

今回は栗野盆地東部に位置する養毛小林遺跡、同じく西部の扇頂部に位置する横野山王原遺跡、西側対岸の戸川諏訪丸遺跡、瘦尾根地形の菰蒲平台遺跡の三遺跡の層序分層を表記したが、表記法は不統一である。

土色標のマンセル表示系は色相・明度・彩度の三属性による表記法であり、16項目の「注意事項を忠実にまもるよう心掛け」(小山・竹原 前掲書20版 12頁)が必要である。褐色(7.5YR4/6)標記であっても、天候、光の入射角、土層含水率、個人色覚等の差異によって、同じ色相の明褐色5/6・4/4・暗褐色3/4、異なる色相の赤褐色5YR~赤褐色2.5YR等の判定差を生ずることを常に念頭に容れる必要がある。

層序名である漸移層、LIS層、BBO層、LH層等の呼称は相模野台地における関東ローム層の固有名称として半世紀以上の研究史があり(神奈川県考古会編2019)、相模川以西の基本層序名もこれらの呼称に準拠している。ただし、戸川諏訪丸遺跡ではA Tまで表土下20mを測り、軟質、硬質、明色、暗色といった区分

に地域テフラの当該スコリアに共通したY-Naを設定することで各遺跡を横断した層序対比が可能となるものの今後のさらなる課題である。次回は伊勢原・秦野・山北地区のローム層序の整合性を目途とする。(砂田)

【引用参考文献】

- 上杉陽 1983「テフラからみた関東平野。最終氷期以降の関東平野」Urban KUBOTA 21 2-17頁 株式会社クボタ
- 上杉陽 20180322「秦野盆地戸川諏訪丸遺跡～横野山王原遺跡間の矢沢尻南岸切通のテフラ層序：その1～」1-10頁 公益財団法人かながわ考古学財団
- 上杉陽・堀内 真・宮地直道・古屋隆夫 1987「新富士火山最新期のテフラその細分と年代」第四紀研究26-1 59-68頁
- 上本達二・上杉陽 1996「神奈川県テフラ層と遺跡層序考古学のためのY-No.・S-No.分層マニュアル」関東の四紀20号3-24頁 関東第四紀研究会
- 小山正忠・竹原秀雄 2016『新版 標準土色帖38版』農林水産省農林水産技術会議事務局監修 1-13頁 富士工業
- 神奈川県教育委員会編 2017『平成29年度第3回考古学講座 神奈川県発掘調査成果発表会2017』1-19頁
- 神奈川県考古学会編 1996『考古学講座かながわの縄文文化の起源を探る』1-52頁
- 神奈川県考古学会編 2019『考古学講座月見野遺跡群発掘調査から50年』1-84頁
- 川口潤 2018「長者久保遺跡と大平山元1遺跡における放射性炭素年代の研究史的意義」東北日本の旧石器時代63-70頁 東北日本の旧石器文化を語る会
- 旧石器時代研究プロジェクトチーム 2017「神奈川県伊勢原・秦野地域の関東ロームの層序について」研究紀要22 かながわの考古学 1-12頁 公益財団法人かながわ考古学財団
- 公益財団法人かながわ考古学財団編 2017『新東名高速道路(秦野市役毛地区)建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査 養毛小林遺跡発掘作業見学会資料』1-4頁
- 佐保市教育委員会編 2016『佐保市文化財調査報告書第14集 史跡福井洞窟発掘調査報告書』1-426頁
- 鈴木義彦 2018「テフラ研究に関する国内外における最近の現状と動向―同定法、噴火年代決定、古気候変動研究への応用、分布の広域性、標準試料整備を中心に―」第四紀研究57-5 131-142頁 日本第四紀学会
- 砂田直弘 2018「戸川諏訪丸遺跡」平成30年度発掘調査成果発表会 81-84頁 公益財団法人かながわ考古学財団
- 谷口康浩・川口潤 2001「長者久保・神子柴文化期における土器出現の14C年代・較正暦年代」第四紀研究40-6 485-498頁 日本第四紀学会
- 中村雄紀 2014「関東地方における旧石器時代の年代と編年」旧石器研究10 167-127頁 日本旧石器学会
- 新潟県教育委員会編 2019『新潟県埋蔵文化財調査報告書第284集 本ノ木・田沢遺跡群地括報告書』1-77頁
- 橋本真紀夫 2012「縄文時代草創期の地形環境-武蔵野台地神田川周辺遺跡の立地から-」国立歴史民俗博物館研究報告第172集 171-188頁
- 島中俊明 2017「横野山王原遺跡」公益法人かながわ考古学財団年報23 公益法人かながわ考古学財団 85-88頁
- 島中俊明 2018「横野山王原遺跡」公益法人かながわ考古学財団年報24 公益法人かながわ考古学財団 94-97頁
- 島中俊明 2018「葛籠平台遺跡」公益法人かながわ考古学財団年報24 公益法人かながわ考古学財団 98頁
- 島中俊明 2018「秦野市葛籠平台遺跡」第42回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨 3-6頁 神奈川県考古学会
- パリーノ・サーヴェイ 金井慎司 2014「神成松遺跡第5地点の放射性炭素年代測定」神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書23神成松遺跡
- 第5地点県道603号(上船屋厚木)道路改良工事に伴う発掘調査200-202頁 株式会社バスコ
- パレオ・ラボ 1996「北原(No.10・11北)遺跡 縄文時代初期第I文化層採取資料の放射性炭素年代測定」かながわ考古学財団調査報告41
- 宮ヶ瀬遺跡群XV 北原(No.10・11北)遺跡 宮ヶ瀬ダム建設にともなう発掘調査 364頁
- 細野衛・佐瀬隆 2015「黒ボク土層の生成史：人為生態系の観点からの試論」第四紀研究54-5 323-339頁
- 吉川昌伸 2015「更新世末から完新世初頭における東北日本の環境」日本旧石器学会第13回研究発表・シンポジウム予稿集 更新世末の東北日本における環境変動と人類活動 45-48頁 日本旧石器学会
- 吉田邦夫ほか 1999「吉岡遺跡群から出土した炭化物の放射性炭素年代」かながわ考古学財団調査報告49 吉岡遺跡群IX 考察編・自然科学分析編 続瀬浄水場建設にともなう発掘調査 319-336頁
- 吉澤 健 2017「養毛小林遺跡」公益法人かながわ考古学財団年報23 公益法人かながわ考古学財団 81-84頁
- 吉澤 健 2018「養毛小林遺跡」公益法人かながわ考古学財団年報24 公益法人かながわ考古学財団 80-83頁

# 神奈川における縄文時代文化の変遷Ⅷ

## －後期前葉期 堀之内式土器文化期の様相 その10－

縄文時代研究プロジェクトチーム

### I. はじめに

縄文時代研究プロジェクトチームは、平成21年度より後期前葉期堀之内式土器文化期の様相について研究を行っており、今年度で10年次目を迎える。過去には、遺跡のデータベース作成、研究略史の整理と主要遺跡地名表・参考文献リストの作成、住居址検出遺跡を中心とした主要遺跡の集成、土器編年案構築に向けた一括出土事例や貝塚等の層位的出土事例の検討、堀之内1式土器、堀之内2式土器の編年案の作成、主要遺跡の分布図の作成を行い、基礎資料を整備した。平成26年度以降は、具体的な遺構の検討に入り、主要な住居址形態を抽出した集成図を作成するとともに、平成27年度は、住居址検出遺跡の分布状況、住居址の平面形態・張出部形態、平面規模、支柱穴配置・壁下構造・建替え、拡張、炉址、埋壘・その他付帯施設等の各要素を抽出し、検討を加えている。平成29年度は、住居址以外の遺構の様相について扱い、堀之内式期の遺構の特徴を掴もうと試みたところである。

今年度は、これら各遺構の検討を踏まえて集落構造・集落分布の分析を行う。ただし、集落構造を把握するためには、ある程度遺跡全体を調査していることや、遺構の遺存状態が良好で帰属時期が明らかにできる出土遺物に恵まれるなど、条件的な制約が多く、集落全体の話となると一定の傾向を抽出することさえ困難であることが多い。そのため、今回は堀之内式期に属する遺跡のうち、ある程度遺跡の全体または主体的な部分が把握できたと考えられる事例を任意で選択し、それら遺跡の集落構造を概観することにした。取り上げた遺跡は、県東部では横浜市小丸遺跡、華蔵台遺跡、山田大塚遺跡、川和向原遺跡、原出口遺跡、県央部・県西部では平塚市王子ノ台遺跡、真田・北金目遺跡、伊勢原市下北原遺跡、秦野市曾屋吹上遺跡の9遺跡に絞っている。同時に、集落遺跡の分布についても分析している。

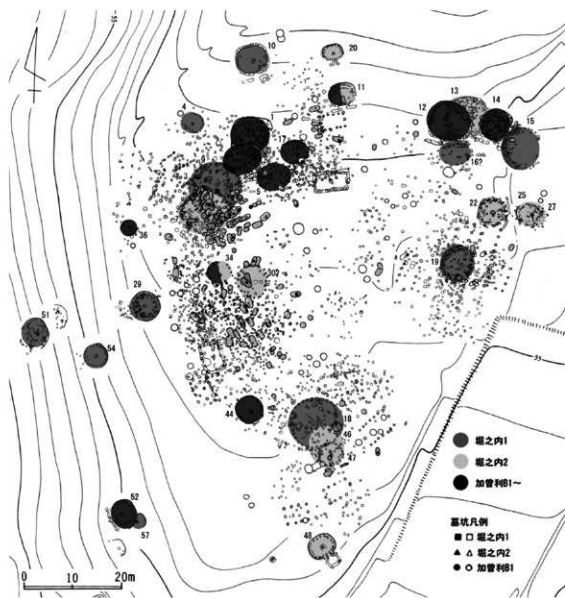
また、昨年度（住居址以外の遺構）の補遺として当該期の貯蔵穴について概観する。土器以外の遺物についても、石器・土製品・石製品・骨角製品を集成し、検討を加えている。（野坂）

### II. 集落構造

#### 小丸遺跡

遺跡は横浜市都筑区大丸11に所在し、鶴見川の支流である早瀬川と谷本川にはさまれた台地上に位置する。当該期の遺構は標高52m～62m付近に分布する。後期の住居址33軒（堀之内1式期12軒、堀之内2式期12軒）、時期不明を含め掘立柱建物址40棟、墓坑110基、貯蔵穴52基などが発見された。

住居址の分布をみると、大きく四つに分けられる。尾根状台地の北側に東と西の各一群、尾根の南側の一群、さらに西側の斜面部に散漫な分布が確認できる。堀之内1式期の住居址として、北西部に3号、4号、9号、10号住居址が、北東部に16号、15号、19号住居址が、南部にて18号住居址が、西側斜面に28号、51号、54号、57号住居址がそれぞれ群をなす。堀之内2式期になると西斜面の住居はなくなり三つにまとまり、北西部に



第1図 横浜市小丸遺跡後期遺構配置図 (S=1/800)

住居が集中するようになる。北西部に7号、22号、20号、30号、34号住居址が、北東部に13号、22号、25号、27号住居址が、南部にて46号、47号、48号住居址がそれぞれまとまる。

特筆すべき点として、貯蔵穴の分布もこれらの住居址群と重なる(石井1999, p. 373)。一方、掘立柱建物も、北西部や北東部住居址群の南に集中する傾向がある。これらのなかの7基に炉址の共伴が認められ、37号掘立柱建物址が堀之内2式期の22号住居址に切られることから、他の掘立柱建物址もこの時期のものとする、堀之内2式期に住居の集中する北東部と北西部に対峙するような位置にある(石井1999, p. 376)。堀之内1式期の墓坑は3基のみであるため分布の傾向が認められないが、堀之内2式期は、希薄であるが住居に隣接して広く集落全体に分布する。とくに30号、34号住居址に位置する墓坑は10号~13号、29号~33号掘立柱建物址と重複する位置にある。(阿部)

### 華藏台遺跡

遺跡は横浜市区筑区窪田南5丁目10付近に所在し、鶴見川の支流早瀬川と谷本川にはさまれた台地上に位置する。該期の遺構は38m～48m付近に分布する。縄文時代後晩期の住居址49軒からなる集落が発見され、堀之内1式期の住居址14軒、堀之内2式期の住居址11軒を数え、後期の掘立柱建物址は12棟、貯蔵穴はその可能性のあるものも含め31基、墓坑は甕棺や埋設土器を含め69基がある。

住居址の分布をみると、該期の住居は大きく北、中央、南の三つに分けられ、中央と南はさらに東西に分けられることから計5つの群からなる。堀之内1式期の北部は36号、37号、38号、41号住居址からなり、中央東斜面部に11号、45号、47号住居址、中央西部に2号住居址、南西部に24号、26号住居址、南東部に17号、19号、20号、21号住居址が位置する。堀之内2式期では、北部に34号、35号、37号住居址が、中央東斜面に44号、48号住居址、中央西部に2号住居址、南東部に28号、30号、31号住居址、南西部に16号、43号住居址が位置する。住居の分布に対応するように掘立柱建物址が展開し、北部に2号、3号、10号掘立柱建物址が、中央東部に掘立柱建物址であった可能性のあるピット群（12号掘立柱建物址）が存在し、中央西部に1号、4号、5号、6号掘立柱建物址、南東部と南西部の間に7号、8号、9号、11号掘立柱建物址がある。

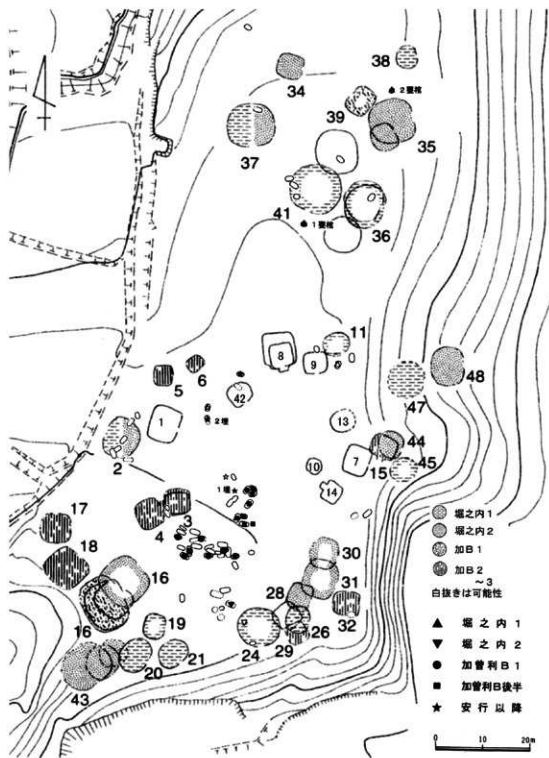
貯蔵穴も住居のまとまりと重なり、北部の一群と南部の一群に分布する。墓坑の多くは堀之内2式～加曽利B1式期の16号住居址の前面もしくは中央広場に集中する。該期の墓坑として、堀之内1式期では、東斜面の11号住居址の前面に54号土壇が、住居が集中する北群にて2基の埋甕がある。堀之内2式では、南東部と南西部の中間の位置に堀之内2式期の可能性のある墓坑が2基確認された。（阿部）

### 山田大塚遺跡

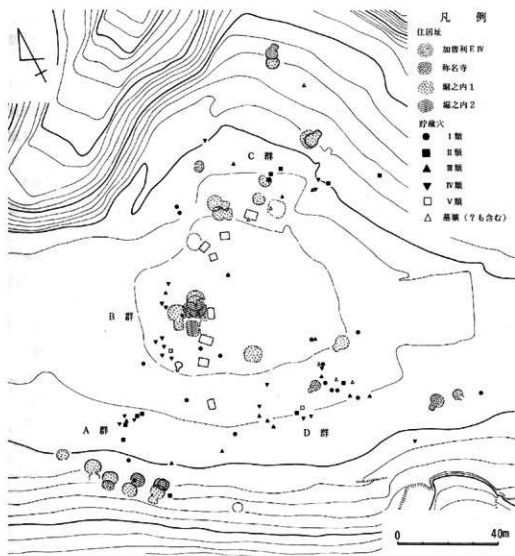
遺跡は横浜市港北区東山田町2015番地ほかに所在し、有間川と早瀬川とはさまれた台地上に位置する。遺構は標高40m～47m付近に分布する。堀之内式期の住居址は27軒が検出されており、堀之内1式期が18軒、堀之内2式期が5軒、1式または2式のものが2軒であり、堀之内1式が主体的である。また住居址の重複分も1軒と勘案するならば住居址数は39軒に及ぶ。他の遺構としては時期不明を含め掘立柱建物址8棟、墓坑3基、貯蔵穴66基などが確認されている。また墓坑に関してはこれとは別に2軒の住居址内から住居に伴うと考えられるものが検出されている。

住居址の分布は住居址群としていくつかのブロックに分けて捉えることができる。台地の南側の谷に面して列をなして検出された一群（A群）、台地の中央で検出された一群（B群）、北側の緩斜面で検出された一群（C群）である。各住居址群にはそれに対応すると考えられる貯蔵穴群が近隣から確認されている。

貯蔵穴群はA群では背後の斜面上方の平坦面に、B群では西側に近接した位置にまとまりが存在するが、C群では周囲に散在したあたりを示す。また、遺跡中央やや南よりに集中した貯蔵穴の一群があるが、周囲にその数に対応するだけの住居址数がなく、他の貯蔵穴群と比較して特異なあり方を示しており、集落全体での管轄を疑わせる一群といえる。掘立柱建物址は8棟検出されており、いずれも堀之内式期の所見が得られている。掘立柱建物址は台地平坦面に立地しており、住居址B、C群に近接した位置にそれぞれ配されている。（粕谷）



第2図 横浜市華蔵台遺跡後期遺構配置図 (1/800)



第3図 横浜市山田大塚遺跡後期遺構配置図 (1/1500)

### 川和向原遺跡

谷本川と思田川合流地点付近の北側台地上に位置し、原出口遺跡の北側に隣接する。原出口遺跡と比して標高は約4m低位であること、集落は台地斜面部に形成されていることなどが挙げられる。分布検出された遺構は、後期初頭から前葉住居址20基・同時期と推定される土坑52基、掘立柱建物19基、ピット群・時期の判明しない集石などがある。住居址の主体は堀之内1式期後半から堀之内2式前半期が主体となり、一部後期初頭称名寺式期最終末から堀之内1式初頭段階ものもみられる。住居は称名寺式最終末期に発生し、堀之内1式段階では複数の住居が一定のまとまりをもって構築され、堀之内1式終末まで継続する。堀之内2段階では2ブロックに別れて分布している。また川和向原遺跡・原出口遺跡では焼失家屋が多く、社会的背景を探る必要性を指摘している。掘立柱建物の種数は原出口遺跡と比して、川和向原遺跡が圧倒しており、他の遺構も含めて2つの遺跡はそれぞれ単独ではなく、両者併せた集落形態を把握する必要性を求めている。

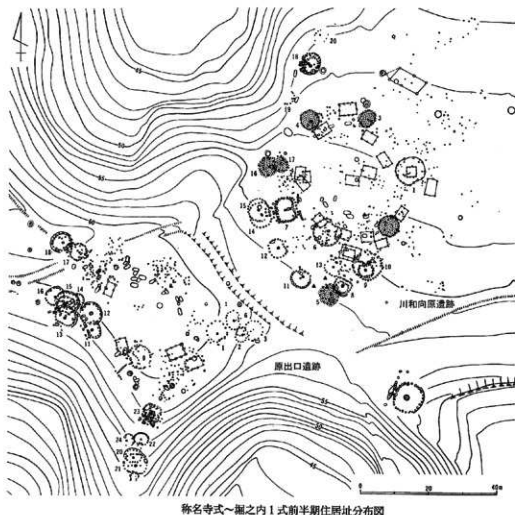
(天野)



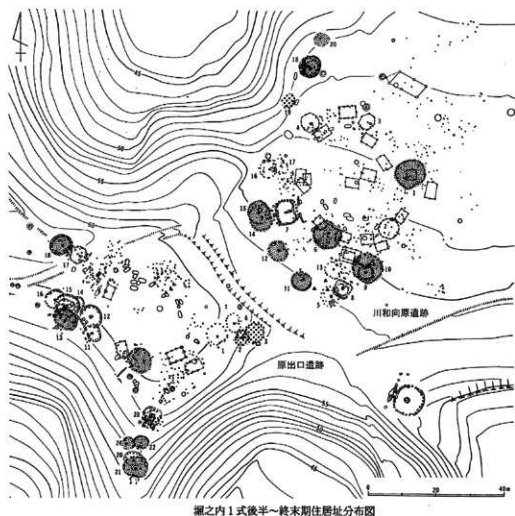
## 原出口遺跡

谷本川と思田川の合流地点付近の北側台地上に位置する。遺構は標高54～61m付近で検出されている。同一台地上の北東部の標高のやや下がった地点に、近接してほぼ同時期の集落址である川和向原遺跡が形成されている。検出された遺構は堀之内1式後半から2式期の住居址18基、同時期と推定される土坑13基、墓坑31基、掘立柱建物址4基、ピット群がある。堀之内1式終末期の住居址群は、台地西側斜面部の住居群とこの北側の一群、および南側に張り出す尾根状斜面の住居址群（「住居址ブロック」）に分けられるが、出土遺物がなく時期判定の困難な東側の住居群も同時期の可能性が推定されている。この住居址群のブロックは堀之内2式期にも引き継がれるが、各ブロック毎の住居址群は、出土遺物からの時期比定、平面的な位置関係、重複関係の分析から住居1軒を基本とし時間的積み重ねにより形成された可能性が高いと推察されている。墓坑は集落の北～東側に集中する一群と住居址に近接するものがある。掘立柱建物址の検出数については堅穴住居と数量的な不均衡があり、同一地点に繰り返して構築される堅穴住居との関係が注目されている。

(山田)



第4図 横浜市川和向原遺跡および原出口遺跡後期（称名寺式～堀之内1式前半期）遺構配置図（1/1111）



第5図 横浜市川和向原遺跡および原出口遺跡後期（堀之内1式後半～堀之内2式期）遺構配置図（1/1111）

#### 王子ノ台遺跡

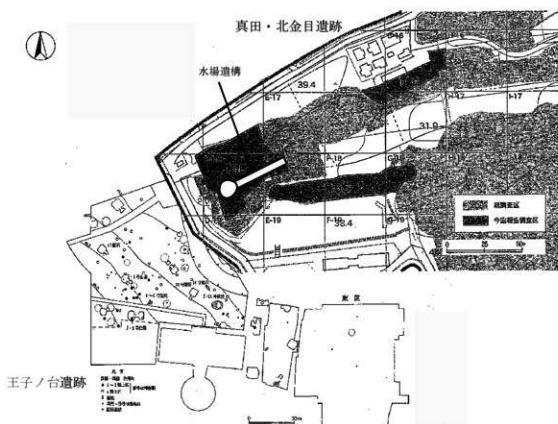
後期前葉～中葉の集落で、住居10数軒と配石遺構2基、墓坑6基が発見されている。調査で配石遺構としたものは住居と考えられる。なお、本報告が刊行されていないため詳細は不明である。鈴川と金目川に挟まれた北金目台地に立地しており、標高は約43mである。住居と配石遺構は堀之内1式～加曾利B2式期までの時間幅がある。墓坑6基のうち4基は土器を伴っており、時期は加曾利B1式期である。

#### 真田・北金目遺跡

後期前葉～中葉の低地遺跡で、平成14年に水場遺構4基、礎敷き水場遺構2基が発見され、神奈川県内で初の事例となった。15E区より発見されたこれらの遺構は、谷斜面の自然湧水を利用した一連の水場遺構群である。礎敷き水場遺構の時期は堀之内1・2式期主体で、加曾利B1式期まで継続する可能性がある。遺物は土器・石器の他、水場遺構に特徴的なスタンプ形石器が出土している。注口土器が多く出土していることから、水場祭祀の可能性が指摘できるであろう。植物遺体はトチノキが主体で、他にクリ・オニグルミ・カヤが出土している。動物遺体はイノシシ・ニホンジカの他、外洋性のコブダイが出土しており、交易によ

て持ち込まれたか、相模湾に出て漁労を行っていた可能性が指摘できる。

真田・北金目遺跡の水場遺構は、王子ノ台遺跡の集落域から東へ20mの位置にあり、両遺跡は一体のものと考えられる。水場遺構は入谷戸と呼ばれる谷の谷頭に立地しており、標高は約35mで集落域との比高差は約8mである。(古谷)



第6図 平塚市王子ノ台遺跡および真田・北金目遺跡後期遺構配置図 (1/2500)

#### 下北原遺跡

遺跡は伊勢原市日向字下北原1272-2ほかに所在する。遺跡の北方を南東流する玉川と遺跡の南方を東流する日向川に挟まれた丹沢山地東麓の日向丘陵上に立地しており、遺構の標高は108m～113mを測る。1972年から1973年に実施された発掘調査により、敷石住居址21軒、環状方形配石遺構3基、配石墓2群、環状組石遺構1基、配石遺構群2群などの遺構群が発見され、縄文時代中期後葉から後期中葉に亘る集落遺跡であることが認識されている(第7図)。

発見された敷石住居址21軒の時期別の内訳は、加曾利EIV式期のものが3軒(第15・18・28号敷石住居址)、堀之内1式期のものが8軒(第2・11～13・16・17・19・21号敷石住居址)、堀之内2式期のものが2軒(第1・10号敷石住居址)、加曾利B1式期のものが3軒(第14・23・24号敷石住居址)、時期不明のものが5軒(第



第7図 伊勢原市下北原遺跡遺構配置図 (1/600)



種別	番号	形状	面積	面積率	年代
加蓋掘土式	13	A	3-47.0 <sup>2</sup> -38	1	1
	18	A	3-47.0 <sup>2</sup> -38		
	20	無	3-46.0 <sup>2</sup> -31		
溝ノ内式	2	B	3-45.0 <sup>2</sup> -38	1	1
	17	B	3-26.0 <sup>2</sup> -37		
	19	A	3-46.0 <sup>2</sup> -38		
	22	ナ	3-7.0 <sup>2</sup> -38		
	23	ナ	3-11.0 <sup>2</sup> -38		
	24	B	3-16.0 <sup>2</sup> -37		
溝ノ内式	10	C	3-33.0 <sup>2</sup> -37	1	1
	11	D	3-23.0 <sup>2</sup> -38		
	20	D	3-25.0 <sup>2</sup> -38		
加蓋掘土式	14	B	3-26.0 <sup>2</sup> -37	2	1
	16	C	3-27.0 <sup>2</sup> -37		
	24	C	3-45.0 <sup>2</sup> -31		
平	20	A	ナ	2	1
	22	ナ	3-4.0 <sup>2</sup> -38		
	23	ナ	3-16.0 <sup>2</sup> -31		
	25	G	3-45.0 <sup>2</sup> -31		
合計					33

第8図 下北原遺跡の性格別地域図及び敷石住居址時期別一覧

20・22・25～27号敷石住居址)となっている。この他、配石墓群の時期は堀之内2式期～加曾利B1式期、環状組石遺構の時期は堀之内1式、配石遺構群の時期は堀之内1式期～加曾利B1式期、環状方形配石遺構が加曾利B1式期とされている。

これら遺構群の時期別の変遷は、まず、加曾利EIV式期以降、敷石住居址を中心に馬蹄形状に集落が展開し、堀之内1式期に至り、開放した北西部の空間が配石遺構群や環状組石遺構などで構成される祭祀空間として確立する。その後、堀之内2式期に遺跡の中心部に配石墓が造営され、墓域として営まれていくこととなる。このように、性格の異なる遺構群が遺跡中で占地域を違えながら展開していることが本遺跡の特筆すべき点としてあげられ(第8図)、調査を担当し、本遺跡を精力的に分析された鈴木保彦氏は、縄文時代におけるセトルメント・パターンのひとつとして、「下北原パターン」を提唱されている。(井辺)

#### 曾屋吹上遺跡

遺跡は栗野市富士見町および曾屋字浄屋地内に所在し、水無川左岸の南西に面した台地緩斜面上に占地する。該期の遺構は標高140m～145m付近に分布する。昭和49年度(7403地点)の調査では、後期中葉～中葉の敷石住居12軒および積石状列石、立石・集礎などと呼称された多数の配石遺構が検出されている(第9図)。特に、敷石住居はほぼ同一等高線上(標高143.5m前後)に連なる積石状列石に沿うように分布しており、調査区北西部の4軒、調査区東半部の6軒は一定のまとまりを示している。列石との切り合い関係から、ある程度の新旧関係は把握されているが、住居址1軒1軒の詳細な時期は不明である。ただし、住居主体部が方形プランとなる5号敷石住居および6号敷石住居、環状方形配石遺構を伴う10号敷石住居は後期中葉(加曾利B2式期)である可能性が高い。積石状列石は、直線的な西側積石状列石、敷石住居間を縫うように分布する東側積石状列石に大別されるが、ほぼ一体のものであろう。基本的には敷石住居を切るように構築されているが、住居張出部が明瞭に残る2号敷石住居、10号敷石住居、6号敷石住居とは接続するように見える。特に、10号敷石住居の西側部分では住居周堤礎と一体となり、折れ曲がっていることから、積石状列石の構築時期は、集落内でも比較的新しい時期である後期中葉に比定できるかもしれない。

また、西側積石状列石の東南側(斜面下側)には、立石6基が集中する立石群があり、さらに西側へ約10m離れた場所には、破砕礫が集中する集礎が認められる。かかる立石は、下部から長楕円形の掘り込みが検出されたものが4基あり、配石墓群の可能性が指摘されている。

平成13年度(200102地点)の調査では、敷石住居5軒、組石4基、配石3基、焼土跡1基が検出されているが、敷石住居は部分的なものであり、全容は詳らかでない。特徴的な組石遺構は、縦石と横石を交互に組み合わせる列石状に配置したものであるが、やはり部分的な検出のせいもあり、その性格は不明とされている。構築時期も不明であるが、3号敷石住居(加曾利B1式期)に前後して構築されたとの見解が示されていることから、やはり列石は後期中葉に比定できるかもしれない。(野坂)



第9図 秦野市曾屋吹上遺跡後期遺構配置図 (1/500)

## II. 集落分布

ここでは神奈川県内における後期前葉の主要な集落遺跡の分布を概観する。第10図は、『研究紀要23』に住居址検出遺跡として取り上げた、該期の主だった集落址をプロットしたもので、今回は本文で取り上げた集落址を特にマーキングしている。主な集落址の176遺跡のうち堅穴住居址が発掘調査されたものは68遺跡である。市町村別に見ると、横浜市が23遺跡と卓越し、全体の1/3を占める。以下、相模原市が8遺跡、清川村が6遺跡、伊勢原市が5遺跡とつづく。

多摩川・鶴見川水系に挟まれた区域には、多摩丘陵とその南東縁に派生した下末吉台地が展開している。かかる地域の遺跡密度は極めて高く、28の集落址が確認されている。また、横浜市帷子峯遺跡、華蔵台遺跡、川和向原遺跡、小丸遺跡、矢崎山西遺跡、華蔵台南遺跡、山田大塚遺跡、原出口遺跡で堅穴住居址が10軒以上発見され、この時期の規模の大きな集落址が集中することも特筆され、該期の県内における中核的な地域といえよう。

相模川水系周辺では、20遺跡で見つかり、相模原市の田名塩田・西山遺跡、はじめ沢下遺跡などの左岸域に展開する相模野台地上に立地する数軒の堅穴住居址からなる集落址が分布する。中でも大江山麓に位置する伊勢原市下北原遺跡では、中期後葉から後期後半まで連続する大規模集落が見つかっており、この地域の中心的集落として注目される。また、宮が瀬ダム関連で調査された清川村ナラナス遺跡や馬場遺跡などが発見され、丹沢山塊を取り巻く丘陵上にも遺跡が分布する。

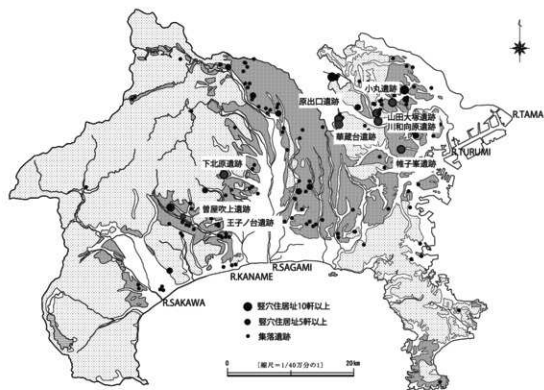
平塚市・秦野市・伊勢原市を中心とする金目川水系周辺域では、11遺跡が見つかり、秦野市曾屋吹上遺跡・太岳院遺跡、伊勢原市市易・大坪遺跡などで、配石を伴う集落址が発見され注目された。また、伊勢原台地とその北縁に広がる上粕屋弱状地や秦野盆地の丘陵上で、近年の大規模道路建設に伴い、配石や敷居住居址の集落址の新たな発見が続いており、関東西南部の中核地として注目されている。

酒匂川水系周辺域は、これまでの調査例は少ないが、森戸川流域の小田原市曾我谷津岩本遺跡などで敷居住居址で構成される遺跡が見つかり、今後早川流域の御組長屋遺跡などととも、箱根山地東縁に展開する丘陵一帯から中核地となるべき集落址の発見も期待される。(村松)

第1表 神奈川県内の後期前葉の集落址の動向（%は水系別の推移）

（単位：遺跡）

	多摩川・鶴見川水系	相模川水系	金目川水系	酒匂川水系	その他	合計
堀之内期	28	20	11	2	7	68
合計	28 (41%)	20 (30%)	11 (16%)	2 (3%)	7 (10%)	68 (100%)



第10図 今回取り上げた主な集落遺跡位置図（後期前葉）

### Ⅲ. 住居址以外の遺構（補遺）

#### 貯蔵穴

縄文時代の遺構で、平面が円形を呈し、口径に比してある程度の深さがあり比較的大きな容積を有する土坑を「貯蔵穴」と呼称し、機能としても堅果類を中心とした貯蔵に用いられたと想定している。

神奈川県内で後期段階の貯蔵穴が認められる遺跡は、管見の限り15遺跡、212基にのぼった。しかしながら所屬時期の特定は遺構出土の土器に頼らざるを得ず、これらのうち厳密に当該段階と判断される遺構は82基で、他は出土遺物が認められずおおまかに後期と把握されるもの、あるいは先行する称名寺段階に所屬するものとなる。（※貯蔵穴の認定および所屬時期について、記載のあるものは基本的に報告書に拠っている。記載のないものについては形状・出土遺物から執筆者が判断した。この点、数的な異同が生じるが、大まかな傾向に変わりはないものと考える。）また基本的に集積した貯蔵穴15遺跡、212基のうち11遺跡206基（堀之内段階のもの82基中76基）は横浜市と川崎市域のもので、発見された当該期貯蔵穴の圧倒

の多数は東京湾西岸寄りに分布することとなる。これらの地域が横浜市港北ニュータウンを筆頭にして開発とこれに伴う調査事例の集積が著しく進んだ地域であることを念頭に置いて、住居跡などの遺構に比して、他地域の貯蔵穴検出事例が僅少であるとの指摘は可能だろう。また横浜市の小丸遺跡50基（21基、以下括弧内が堀之内1式期）、同じく川和向原・原出口遺跡37基（15基）、山田大塚遺跡68基（24基）など、多数の貯蔵穴を伴うのが当該地域の集落遺跡の一つの特徴となる。ただし、膨大な数の貯蔵穴が群集することが群集することが知られる前期の東北地方、中期の東京湾東岸域に比較し、数的には及ばず、また住居跡群に付帯するような分布状況を示すことは先学（石井1990・1999、坂口2003）の指摘するところである。

検出された貯蔵穴には、開口部に対し大きな底面を有し断面がフラスコ状を呈するもの（Ⅰ類）、底面が平らではなく断面が袋状を呈するもの（Ⅱ類）、開口部と底面の差が小さく断面が円筒状を呈するもので口径よりも深度が大きいもの（Ⅲ類）、開口部と底面の差が小さく断面が円筒状を呈するもので深度よりも口径が大きく、いわゆるクライ型を呈するもの（Ⅳ類）がある。断面は円筒形であるがⅢ類やⅣ類には、壁面がやや内傾するものがあるなど、実際にはⅠ～Ⅳ類の形態上の違いは漸進的ではある。またⅠ～Ⅳ類に加え、一見柱穴状を呈するが、規模が大きくまた口径よりも内径が大きい袋状を呈し、また覆土の状況から通常の柱穴とは見なされないもの（Ⅴ類）をここで上げておきたい。ただし本遺構については貯蔵穴ではない可能性もある。またⅠ類からⅢ類はさらに、底面にビットを有するⅠa類・Ⅱa類・Ⅲa類と、底面にビットを有しないⅠb類・Ⅱb類・Ⅲb類に分けることができるだろう。なおクライ状を呈するⅣ類にはこのビットが認められず、穴の形状とビットが関わっていた可能性が指摘出来るかもしれない。

集成した事例の内、Ⅰa類は小丸遺跡（6基）、川和向原・原出口遺跡（6基）、山田大塚遺跡（4基）、帷子峯遺跡（2基）、稲ヶ原遺跡A地点（1基）、岡上丸山遺跡（1基）の6遺跡20例、Ⅰb類が小丸遺跡（3基）、川和向原・原出口遺跡（2基）、山田大塚遺跡（3基）、篠原大塚遺跡（2基）、帷子峯遺跡（1基）、華蔵台南遺跡（1基）の6遺跡12例あり、Ⅰa・Ⅰb類ともに堀之内1式期の所産であった。

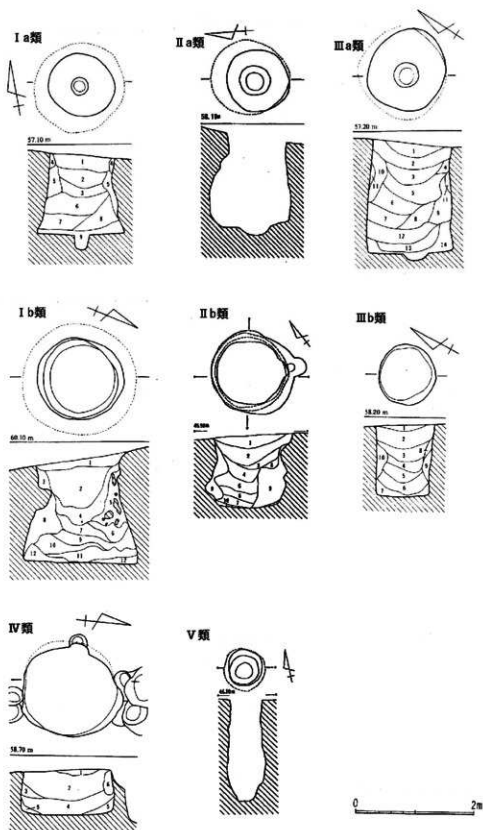
Ⅱa類は川和向原・原出口遺跡（2基）、西富岡・向畑遺跡（1基）の2遺跡2例、Ⅱb類が小丸遺跡（1基）、山田大塚遺跡（2基）、華蔵台南遺跡（1基）の3遺跡4例で、やはりⅡa・Ⅱb類ともに堀之内1式期の所産である。

Ⅲa類は小丸遺跡（2基）、山田大塚遺跡（1基）、帷子峯遺跡（1基）、相原八幡前遺跡（1基）の4遺跡5例、Ⅲb類は小丸遺跡（2基）、山田大塚遺跡（6基）、帷子峯遺跡（1基）、篠原大塚遺跡（3基）、西富岡・向畑遺跡（1基）の5遺跡13例ある。Ⅲa・Ⅲb類ともに大半は堀之内1式期の所産であるが、篠原大塚遺跡のⅢb類1例が堀之内2式期末であるほか、小丸遺跡Ⅲb類1例にも堀之内2式期と考えられる1例がある。

Ⅳ類は小丸遺跡（6基）、川和向原・原出口遺跡（3基）、山田大塚遺跡（3基）、牛ヶ谷遺跡（1基）、篠原大塚遺跡（3基）、帷子峯遺跡（1基）、稲ヶ原遺跡A地点（5基）、県営岡田団地内遺跡（2基）、宮ヶ瀬遺跡群馬場No.6遺跡（1基）、の9遺跡26例がある。Ⅳ類には堀之内1式期と2式期のものがあり、小丸遺跡の2基、山田大塚遺跡の3基、稲ヶ原遺跡A地点2基が2式期の所産である他、県営岡田団地内遺跡の2基、宮ヶ瀬遺跡群馬場No.6遺跡の事例も2式期の事例となる。

Ⅴ類は川和向原・原出口遺跡（2基）、山田大塚遺跡（1基）、篠原大塚遺跡（2基）、稲ヶ原遺跡A地点（1基）の4遺跡6例があり、ともに堀之内1式あるいは堀之内1式と見られる土器が出土している。堀之内2式は認められずの堀之内1式の所産としてよいだろう。





第11図 貯蔵穴 I a類：小丸125号 I b類：小丸92号 II a類：原出口53号 II b類：山田大塚22号  
 III a類：小丸124号 III b類：小丸191号 IV類：小丸104号 V類：山田大塚12号

各形態を通視すると、Ia・Ib類、IIa類、IIIa・IIIb類、そしてV類は堀之内1式期でのみ認められ、IIb類とIV類が堀之内2式まで存続することとなる。また小丸遺跡でIa・Ib・IIb・IIIa・IIIb・IV類、川和向原・原出口遺跡でIa・Ib・IIa・IV・V類、山田大塚遺跡でIa・Ib・IIb・IIIa・IIIb・IV・V類が、堀之内1式期の同一遺跡内に認められることから、I～Vの各類型は、形態上のバリエーションとして共存し、用途や貯蔵物の量によって使い分けられていたと考えられる。これらが堀之内2式期に向け、少数のIIb類を除けばタライ型のIV類に収斂していく時間的変遷をあわせて指摘できる。

既に当該プロジェクトによるこれまでの集積で明らかのように、神奈川県域において遺構としての貯蔵穴は、前期や中期において顕著な存在ではない。当該地域において貯蔵穴が顕著な存在となるのは、縄文時代後期の初頭から前葉である。加えて貯蔵穴は、上述したように県域全体に万遍なく認められるものではなく、東京湾東岸周辺にのみ顕著な分布傾向を示すものとなっている。前期の東北あるいは中期の東関東・東北地方の集落遺跡において貯蔵穴は、群集し膨大な数が発見されているが、神奈川県域（より限定的に東京湾東岸域）に貯蔵穴が作られる後期前半、これらの東北・東関東穴がほとんど認められないのである。かつ東京湾西岸地域の貯蔵穴が数的に限定的に群集することがないのも、すでに見てきたとおりである。

縄文時代の貯蔵穴については、中期における貯蔵穴と打製石斧出土量の多寡との数量的な比較を通じ、生業活動の地域的な差異を抽出した今村啓爾による優れた論考がある（今村1989）。しかしながら神奈川県域や周辺地域における貯蔵穴の分布上の偏在とその消長は、単純に植生や生業活動の面からだけでは説明しきれない内容を持つ。縄文時代後期初頭から後期前葉に、それまでの中期的な社会あるいは生業から後期的なそれへの変換点にあって、当該地域に貯蔵穴が受容されたことは現象面として間違いない。分布状の偏在や消長といった問題は、低地の貯蔵穴あるいは地上式の貯蔵施設を含めた貯蔵施設全般との比較検討、また貯蔵物の管理や分配といった社会経済的な側面から多角的に検討されていくべき事項であろう。

（小川）

#### IV. 土器以外の遺物

##### 1. 石器

ここでは堀之内式期の石器について述べる。第12図は代表的石器資料である。掲載遺物は、堀之内1式期・堀之内2式期と考えられる遺構出土資料から構成されるようにした。当該期の各遺跡、各遺構出土石器資料の出土量や存在比率は提示する必要があったが、各資料の掲載内容にばらつきがあると思われたため、今回は提示しなかった。

**石鏃**（1～5） 各時期を通じて基本的に凹基無茎鏃（1・4・5）がほとんどである。平面形は正三角形に近いもの・二等辺三角形をなすもの、エッジ部分も直線的・やや膨らむもの・軽凹むものなどがある。平基無茎鏃（2）・平基有茎鏃（3）は少量である。石材は黒曜石が多く、他はチャート等が少量ある程度である。

**石錘**（6～8） 扁平・楕円形の礫を素材とし、礫の長軸あるいは短軸方向の縁辺に紐掛け用の打ち欠きを施したものである。打ち欠きは2箇所ものものが多く、4箇所ものは少ない。また、礫の表面に紐を固定する為と考えられる溝状の切り込みが施されたものもある。用途については魚網錘と考えられているが編み物石という説もある。

狩猟具	漁 勞 具	植 物 加 工 具	土 掘 り ・ 伐 採 具	伐 採 具	加 工 具
石鏃 1 甲賀古津原水 1 位 2 上野原・船山上 12 位 3 船山大塚 35 上土 4 大田原 99-1 船山 21 船石 5 北野原 99-2 船山 21 船石 77 上土	石鏃 6 中野 31 上土 7 船の船敷 31 上土 8 大田原 99-2 船山 21 船石 9 上野原・船山上 12 位 10 北野原 99-2 船山 12 船石 11 船敷 31 船石 12 北野原 99-2 船山 21 上土	磨石・蔵石・凹石・石皿類 13 山田大塚 35 位 14 大田原 99-2 船山 11 位 15 船山 8-6 位 16 大田原 99-1 12 船石 17 大田原 99-1 11 船石 18 大田原 99-1 11・12 船石 19 船山 8-6 位 20 大田原 99-1 12 船石	打製石斧 21 大田原 99-1 12 船石 22 大田原 99-1 12 船石 23 上野原・船山上 12 位 24 上野原・船山上 12 位 25 山田大塚 35 船石 26 船の船敷 19 船石 27 大田原 99-1 11 船石 28 大田原 99-1 12 船石 29 大田原 99-1 12 船石 30 大田原 99-1 12 船石	磨製石斧 31 上野原・船山上 12 位 32 上野原・船山上 12 位 33 山田大塚 35 位 34 船の船敷 19 船石 35 大田原 99-1 11 船石 36 大田原 99-1 12 船石 37 大田原 99-1 12 船石 38 大田原 99-1 12 船石 39 大田原 99-1 12 船石 40 大田原 99-1 12 船石	石砦・石鏃他 41 甲賀古津原水 1 位 42 上野原・船山上 12 位 43 山田大塚 35 位 44 船の船敷 19 船石 45 大田原 99-1 11 船石 46 大田原 99-1 12 船石 47 大田原 99-1 12 船石
縄文内式前期			縄文内式前期		

第12図 縄文内式期の石器 (S=1/5)

**敲石・磨石・凹石** (9~13) 片手で握れる大きさの円礫を用い、その表面あるいは側面に敲打痕を有するものを敲石(9・12)、摩耗痕を有するものを磨石と呼ぶが、敲打痕と摩耗痕を有する資料(10・11)も多く出土する。また、礫の表面が敲打により凹んだものを凹石(13)と呼ぶ。出土量は各遺跡で多く出土し、用途としては植物などの食料加工に使用されたと考えられる。

**石皿・台石** (14) 大形で扁平な礫を素材としたものに石皿・台石がある。礫の表面には使用による摩耗痕が明瞭なものを石皿、明瞭でないものを台石と呼ぶ。石皿の中でも摩耗の顕著なものは、表面の中央部が皿状に凹むものもある。また、摩耗痕と共に敲打による凹みがあるものも存在する。敲打による凹みの多いものは多孔石に分類されることがある。石材は安山岩・凝灰岩・閃緑岩などがある。用途としては植物などの食料加工に使用されたと考えられる。

**打製石斧** (15~20) 器種としての出土数は相対的に多い。平面形は側縁が平行する短冊形(15・17・20)、側縁が刃部に向かって広がる楔形(16・20)、側縁中央部に抉りをもち両端に広がる分銅形(18・19)などがある。石材はホルンフェルス・凝灰岩・砂岩が多い。用途は土掘り具・伐採具と考えられる。

**磨製石斧** (21~28) 磨製石斧は器厚が厚手の乳棒状磨製石斧(21・22)と、薄手の定角式磨製石斧(23~28)に分けられる。乳棒状磨製石斧は断面形が円形・楕円形を呈するものが多い。よく磨かれたもの(22)もあるが、表裏面・側縁に敲打痕や剥離痕が残るもの(21)もある。定角式磨製石斧は扁平な礫などを素材とし、研磨を全面的に施し、側縁も平坦に面取りされている。石材は凝灰岩・輝緑岩・蛇紋岩・はれい岩などが多い。用途は木材の伐採具と考えられる。

**石匙・スクレイパー** (29・30) 剥片に抉りを入れつまみ部を作り出した石匙は、本時期では横形のものが多い(30)。小形の石匙と、大形の石匙があり、小形のものは剥離が細かく、黒曜石製が多い。大形のものはやや粗雑な剥離で、黒曜石以外の石材で作られることも多い。この他にもスクレイパー(29)も出土するが、これらの石器の出土数は相対的に多くはない。

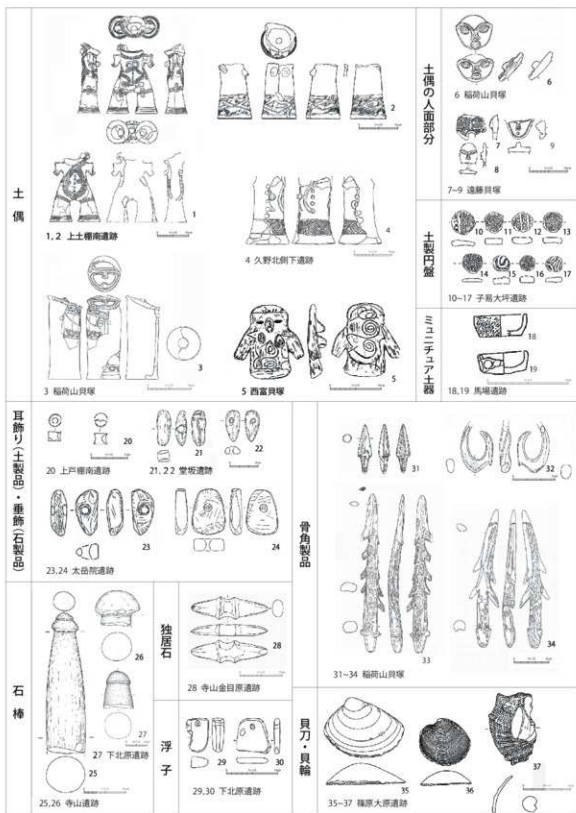
**石錘** (31) 剥片の先端部に剥離を加え、先端部を作り出したもの。つまみ部と棒状の先端部をもつもの、細い棒状のもの、不定形な剥片の端部にノッチ状の加工を加え先端部を作り出したもの(31)などのバリエーションが存在する。石材は黒曜石が多い。

**楔形石器・石核** 上記の器種の他に、楔形石器や石核などが存在する。 (図)

## 2. 土製品・石製品・骨角製品

ここでは土製品・石製品・貝製品の主な出土遺物を取り上げる(第13図)。土製品では土偶や土製円盤、ミニチュア土器を、石製品では石棒や垂飾、浮子を、そして骨角・貝製品では銚や釣り針、貝刃などを取り上げる。なお、ここで取り扱う遺物の時期設定については、住居跡や土坑など遺構に伴うものが少なく、堀之内式土器におけるⅠ・Ⅱ式の区分や堀之内Ⅱ式から加曾利B1式にかかる区分など移行期的なものがあることを記しておきたい。

**土偶** (1~9) この時期の土偶としては筒形土偶が作られる。1は、綾瀬市に所在する上土欄南遺跡から出土している中空の有脚土偶で、両脚の表現は断面円形で力強く立ち上げ、胴部及び頭部に至る。両脚は小さく表現され取り付けられている。成形として脚部から胴部にかけて約2~3cm程度の細い粘土紐を積み上げており、輪積み痕が残る。文様は、数本の沈線で文様を描き、単節縄文LRを充填している。底面には網代痕も見られる。2は、同様な土偶であるが脚部を作らない土偶で、頭部を欠損する。同遺跡内からは破片



第13図 堀之内式期の土製品・石製品・骨角製品(縮尺不同)

も含めると13点が出土し報告されている。なお、ここで取り上げることができないが、1の筒形土偶と同様な事例では新東名高速道路の建設に伴う調査として秦野市内の菩提横手遺跡から同じような事例の土偶が検出され話題を呼んだが、調査報告書の刊行が待たれるところである。このような筒形の中空土偶の検出例には、長野県茅野市に所在する中ツ原遺跡から出土した国宝「土偶」(仮面女神)などとの関連性が取り上げられるところである。3は稲荷山貝塚から、4は久野北側下遺跡から出土したもので、胴部と顔の表現はあるものの、2と同様に腕及び脚部の表現はない。5は藤沢市に所在する西富貝塚から出土した側面が扁平な土版状のもので、それに土偶の形態を付加している。脚部を欠損するが、顔の表現があり、体部には乳房を表している。現存高で13cmの大きさである。なお、6・7・8・9は藤沢市遠藤貝塚から出土したもので、筒形土偶から剥落した顔面部の破片である。

**土製円盤 (10~17)・ミニチュア土器 (18・19) 耳飾り (20)** 10~17は伊勢原市市易大坪遺跡から出土しており、他の遺跡からも楕円・長楕円形に刻み目を施した簡素な造りの土製円盤である。18・19は、馬場遺跡から出土したミニチュア土器である。20は、上土棚南遺跡出土の土製耳飾りである。

**垂飾・石製耳飾 (21~24)** 21~24は石製のいわゆるペンダントで、21は瑪瑙製、22は翡翠の大珠、23は玉髓製、24は蛇紋岩製であり、いずれも貫通孔を有する。

**石棒・独鈷石・浮子 (25~30)** 25・26は秦野市寺山遺跡、27は伊勢原市下北原遺跡から出土している断面円形の大型石棒の先端に作られた瘤状部分である。石質は、25・26が安山岩製、27は凝灰岩製である。敲打による成形と磨きが加えられるものである。28は秦野市寺山金目原遺跡から出土した砂岩製の独鈷石で全体に研磨が施されている。29・30は伊勢原市下北原遺跡から出土した軽石製の浮子である。下北原遺跡からは全部で12点出土しており、うち3点については、孔が圍けられ貫通している。

**骨角製品 (31~34)** 骨あるいは鹿の角を素材としたもので、31は横浜市南区稲荷山貝塚から出土した円錐状の体部をもち細身の茎を作り出した鹿角性の鏃である。32は、針部先端が内湾する単式の鹿角製釣針で、アグは1個付けられている。33・34は、両側縁に逆刺を作り出す鹿角製の鈎頭である。素材の制約があり体部の軸自体が曲がっている。

**貝刃 (35~37)** 横浜市港北区にある藤原大原遺跡の貝製品貝を素材とし端部に刃を付した製品で、ハマグリやカガミガイが利用される。35は、ハマグリ製、36はカガミガイ製の貝刃で、37は貝輪未成品でアカニシ製、殻頂部が除去されているが、孔が小さいことから未完成品であろうか。他の出土例では、二枚貝であるイタボガキ、ハマグリやバンケイガイが利用される。巻貝では、アカニシ製のものが出土している。

(小島)

【引用・参考文献】

- 石井 寛1999『小丸道跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告25、財団法人横浜市ふるさと歴史財団
- 石井 寛2008『華蔵台道跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告41、財団法人横浜市ふるさと歴史財団
- 石井 寛1990『山田大塚道跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告11、横浜市埋蔵文化財センター
- 石井 寛1995『川和向原道跡・原出口道跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告19、財団法人横浜市ふるさと歴史財団
- 秋田かな子ほか1991「王子ノ台道跡西区」『東海大学校地内遺跡調査団報告』2 東海大学校地内遺跡調査団
- 秋田かな子ほか1992「王子ノ台道跡西区補足調査」『東海大学校地内遺跡調査団報告』3 東海大学校地内遺跡調査団
- 秋田かな子ほか1993「王子ノ台道跡・真田大原道跡隣接地」『東海大学校地内遺跡調査団報告』4 東海大学校地内遺跡調査団
- 若林勝司ほか2011『平塚市真田・北金目道跡群発掘調査報告書8』真田・北金目道跡調査会
- 鈴木保彦1977『下北原道跡』神奈川県立埋蔵文化財調査報告14 神奈川県教育委員会
- 鈴木保彦1978「伊勢原市下北原におけるセトルメント・パターン」『日本大学史学科五十周年記念歴史学論文集』日本大学史学会
- 高山純・佐々木博昭1975『曾屋吹上一配石遺構発掘調査報告書—<図録編>』
- 北原實徳・今泉克巳2002『曾屋吹上道跡—200102地点—』曾屋吹上道跡発掘調査団
- 今村啓爾1989「群集貯蔵穴と打製石斧」『考古学と民族誌』渡辺仁古希記念論文集
- 坂口 隆2003『縄文時代貯蔵穴の研究』未完成考古学叢書5

# 弥生時代後期竪穴住居の研究（3）

弥生時代研究プロジェクトチーム

## はじめに

前回の報告では川崎市内における竪穴住居の集成を行い、住居の属性について、分析・検討を行った。今回は横浜市内における竪穴住居の集成と分析を行い、特徴の把握を行うこととする。今回の執筆・編集はプロジェクトメンバーによる検討結果に基づき、戸羽が行い、分布図の作成は新聞が行った。

## 横浜市内における竪穴住居跡の特徴

### 帰属時期別住居軒数

**帰属時期：**今回集成した竪穴住居跡711軒の帰属時期は後期：542軒、庄内併行期：117軒、後期～庄内併行期：16軒、不明：36軒である。今回、分析の対象とした竪穴住居は確認件数の大半を占める、後期および庄内併行期に帰属するものとした。

### 住居形態など

**平面形態：**後期の711軒中、最も多いのは平面形態が隅丸(長)方形362軒で、以下楕円形45軒、(長)方形25軒、円形6軒となる。平面形態不明としたものは104軒である。庄内併行期では117軒中、隅丸(長)方形が104軒、楕円形5軒、(長)方形が2軒となる。平面形態不明としたものは6軒である。後期・庄内併行期ともに、短軸方向上に伊跡が存在する住居(短軸住居)が散見される。

**長短率：**長短率は住居の長軸の数値を短軸の数値で除し、それに100を乗じたものである。値が大きくなれば、長軸短軸の差が大きくなり長方形に、小さくなれば正方形に近づき、最低の値は100となる(弥生時代研究プロジェクトチーム1995)。後期で算出できたのは242軒で、基本統計量は最大149.1、最小61.1、平均112.6、中央値111.5という値を示した。庄内併行期で算出できたのは74軒で、基本統計量は最大140.0、最小81.3、平均109.4、中央値108.9という値を示した。

**方形指数：**方形指数を算出可能な住居跡を対象とした。後期は230軒が該当し、方形指数20～30未満が53軒と最も多く、次いで40～50未満の42軒、30～40未満の40軒と続く。以下60～70未満が25軒、50～60未満が23軒、10～20未満・70～80未満が16軒、0～10未満が9軒、80～90未満は5軒、90～100未満は1軒である。庄内併行期では73軒が該当し、方形指数50～60未満が22軒、と最も多く、40～50未満が18件、60～70軒が11軒と続く。以下、20～30未満が7軒、30～40未満が6軒、70～80未満が5軒、10～20未満・80～90未満がそれぞれ2軒である。

**主軸方位：**主軸を計測可能な住居跡を対象とした。北東方向(N-O°-E)または北西方向(N-O°-W)を0～90°の間で角度を計測し、10°ごとに集計を行い、グラフ化した。結果は第6図に示す。円が角度を、軒数を各角度の軸で示している。後期で北東方向を主軸とする住居跡は77軒あり、その内訳は、0°以上～10°未満が12軒、10～20°未満が11軒、20～30°未満が10軒、30～40°未満が8軒、40～50°未満が6軒、50～60°未満が9軒、60～70°未満が3軒、70～80°未満が6軒、80～90°未満が12軒である。北西方向を主軸とする住居跡は311軒あり、0°以上～10°未満が11軒、10～20°未満が24軒、20～30°未満が39軒、30～40°未満が45軒、



40～50°未満44軒、50～60°未満が53軒、60～70°未満が43軒、70～80°未満が32軒、80～90°未満が20軒である。また、真北(0°)を主軸とする住居跡は3軒、南東方向を主軸とする住居跡は50～60°未満が1軒、60～70°未満が1軒確認されている。庄内併行期で北東方向を主軸とする住居跡は12軒で、0°以上～10°未満が1軒、10～20°未満が1軒、20～30°未満が3軒、50～60°未満が1軒、60～70°未満が3軒、70～80°未満が1軒、80～90°未満が2軒である。北西方向を主軸とする住居跡は91軒で、20～30°未満が5軒、30～40°未満が7軒、40～50°未満20軒、50～60°未満が20軒、60～70°未満が22軒、70～80°未満が13軒、80～90°未満が4軒である。**主柱穴**：住居の主柱穴本数が確認できた遺構について集計した。なお、軒数には柱穴配置により、本数が推定可能な遺構を含んでいる。後期では278軒中、主柱穴4本のものが275軒とほぼ99%の割合を占めている。庄内併行期では109軒中、主柱穴4本のものが103軒と約95%の割合を占める。

#### 地形と立地

**分布する地形面**：後期、庄内併行期ともに台地もしくは丘陵に分布する。

**水系**：後期では住居跡114軒中、鶴見川水系に286軒、帷子川水系に68軒、芦谷川水系に34軒、柏尾川水系に26軒分布する。庄内併行期では住居跡112軒中、鶴見川水系に77軒、埴川水系に20軒、帷子川水系に12軒、柏尾川水系に2軒、帷子川・大岡川水系に1軒分布する。

#### 住居付帯施設

**炉跡**：後期では542軒中362軒で確認されている。その内訳は地床炉338軒、枕石炉16軒、枕粘土炉7軒、粘土板炉1軒である。1つの住居跡に炉が2基以上存在する住居は77軒ある。庄内併行期では117軒中93軒で確認されており、その内訳は地床炉84軒、枕石炉8軒、その他1軒である。1つの住居跡に炉が2基以上存在する住居は11軒である。

**入口穴・梯子穴**：後期では124軒で入口穴が、41軒で梯子穴が確認されている。庄内併行期では61軒で入口穴が、2軒で梯子穴が確認されている。

**貯蔵穴**：後期では268軒で確認されている。そのうち周堤を有するものは54軒、複数基あるものは32軒である。庄内併行期では72軒で確認されており、そのうち周堤を有するものは54軒、複数基あるものは32軒である。**周溝**：後期では、全周するものが170軒(34.9%)部分的に存在するものが114軒(23.4%)、存在しないものが203軒(41.7%)、不明が224軒である。庄内併行期では117軒中、全周するものが7軒(6.0%)、部分的に存在するものが10軒(8.5%)、存在しないものが56軒(47.9%)、不明が44軒(37.6%)である。

#### 住居廃絶など

**拡張**：後期では63軒で確認され、そのうち2回以上拡張されているものは9軒ある。庄内併行期では、24件で確認され、そのうち2回以上拡張されているものは2軒である。

**焼失**：後期では44軒で確認されており、そのうち炭化物や焼土などが検出されているのは27軒である。明神台北遺跡、E5遺跡、北川貝塚、Na17遺跡、八幡山遺跡、北側表の上遺跡では一つの遺跡から2～9軒見つかっている。庄内併行期では24軒で確認されており、そのうち炭化物や焼土などが検出されているのは22軒である。北側表の上遺跡では52軒中、22軒が焼失住居である。

**埋没過程**：大半が自然作用による埋没であるが、後期で人為的に埋め戻されている住居が10軒、庄内併行期で2軒確認されている。後期では宿根西遺跡5軒と集中している。

#### 出土遺物

**遺物**：出土遺物で主体となるのは土器類、次いで石器類である。ここでは特徴のある遺物を出土した住居跡

を列挙する。

**後期:** 牟尻台遺跡7号住居址: ミニチュア・土製勾玉、芹が谷四丁目遺跡第1地点第2号住居址・第8号住居址、同遺跡第2地点第8・9号住居址、開耕地遺跡11・45・49号住居址、北側表の上遺跡74号住居: ミニチュア、開耕地遺跡11号住居址: ミニチュア・土製勾玉・管玉、芹が谷四丁目遺跡第1地点第4号住居址: ミニチュア・手埴り、明神台遺跡(B・C・D区)Y4号住居址、仏向遺跡・仏向貝塚10号型穴住居、八幡山遺跡Y15号住居: 小型土器、開耕地遺跡65号住居址: 甗、Na17遺跡YT-2: 甗・勾玉・土玉・有孔円盤、同遺跡YT-3: 甗・勾玉・有孔円盤、開耕地遺跡63号住居址: 手捏ね土器、下田西遺跡Y-1号住居址、舞岡大原遺跡9・10号住居址、笠間中央公園遺跡19号住居址: 埴、同遺跡20号住居址: 埴・ミニチュア、小机醫王山遺跡住居址1: 無須壺、北側表の上遺跡23号住居: 土器蓋?・ミニチュア、宿根東Y7a住居: 台付鉢、明神台北遺跡NY6・19号住居址: 横刃形石器、四枚畑遺跡Y-8号住居址: 軽石、同遺跡Y-9号住居址: 軽石・くぼみ石、同遺跡Y-5号住居址: 軽石・鉄鏝、棒状鉄器、開耕地遺跡3号住居址: 有頭石鏝、Na17遺跡YT-6: 軽石・鉄鏝・勾玉、八幡山Y10・Y18・Y19・Y20号住居: 鉄斧、北側表の上遺跡83号住居: 刀子・釘、同遺跡108号住居: 刀子または太刀片、明神台遺跡A地区A-6号・A-9号・A-23号住居址、明神台北遺跡NY12号住居址、仏向遺跡・仏向貝塚22号型穴住居、開耕地遺跡24・43・46号住居址、Na15遺跡YT-4・5住居、Na17遺跡YT-4住居、北側表の上遺跡: 土製勾玉、Na17遺跡YT-6住居: 軽石・鉄鏝・土製勾玉、明神台北遺跡NY11号住居址: 磨製石鏝・土製勾玉、舞岡大原遺跡1号住居址、北側表の上遺跡: 土玉、北側貝塚南遺跡: 土器片鏝、四枚畑遺跡Y-11号住居址、開耕地遺跡12号住居址: 土製円盤、釈迦堂遺跡2地区3号住居址: 有孔土製円盤、仏向遺跡・仏向貝塚8号型穴住居: 土製勾玉・土鏝、開耕地遺跡17・97号住居跡紡錘車、北側貝塚南遺跡: 剥片徳掻具?・土製円盤・土器片鏝、北側表の上遺跡27号住居: 土製勾玉・ボタン上製品、明神台北遺跡NY14号住居址、仏向遺跡・仏向貝塚23号型穴住居: ガラス玉、権田原遺跡BY15: 勾玉

**庄内併行期:** 牟尻台遺跡10号住居址: 埴、下飯田林遺跡20号住居址・北側表の上遺跡66・88・89号住居址: ミニチュア土器、北側表の上遺跡2a号住居: 小型土器・紡錘車、同遺跡3号住居: 小型土器、同遺跡19号住居: 舟形土製品、同遺跡90号住居: 手埴形土器、同遺跡22・61号住居: 甗、同遺跡92・99号住居址: 紡錘車、同遺跡8号住居: 鉄滓、下飯田遺跡10・12・19・21号住居址: 軽石、明神台北遺跡NY7号住居址: 銅鏝・土製勾玉、同遺跡NY15号住居址: 土製勾玉・ガラス玉、仏向遺跡・仏向貝塚15号型穴住居: 土製勾玉、北川貝塚南遺跡3・5号住居: 土製円盤、同遺跡4号住居: 土器片鏝、北側表の上遺跡6a住居: 土製品・土玉、同遺跡7号住居: 土製勾玉、同遺跡22号住居: 土製丸玉

## まとめ

横浜市内における弥生時代後期および庄内併行期の住居について、集計データをもとに定量分析を行った。その結果を踏まえ、傾向をまとめておく。

- ・住居の帰属時期は後期の割合が高く、庄内併行期には減少する。
- ・方形指数は後期では20～50°未満前後に集中して分布する。庄内併行期では少ないものの40～70°未満と後期よりも高めの傾向を示す。
- ・主軸方位の傾向は、後期・庄内併行期ともに北西を主軸とするものが多い、後期では20～80°、庄内併行期では40～70°に集中する。

- ・主柱穴の本数は、後期・庄内併行期のいずれも4本が主流である。
- ・後期・庄内併行期を通じて、鶴見川水系に多く住居が分布する。
- ・炉跡は後期・庄内併行期を通じて地床炉が大半を占める。後期では1軒に複数の炉跡を有する住居が77軒、庄内併行期では11件存在する。後期では1軒の住居に2～7基と幅があるが、庄内併行期では2基もしくは3基となる。前回行った川崎市の集成と同様に、朝光寺原式土器を伴う住居（平面形態が隅丸（長）方形で複数基の炉を有する点）と東京湾沿岸系土器を伴う住居（平面形態が隅丸または隅丸（長）方形が多く、単基の炉を有する点）の違いが指摘されているが、今回も上記の特徴を反映しているであろう。
- ・住居の拡張は後期・庄内併行期で数軒の事例が確認されており、そのうち2回以上の拡張が行われている住居が存在する。
- ・焼失住居は後期および庄内併行期に、確認されている。明神台北遺跡、E5遺跡、北川貝塚、No.17遺跡、八幡山遺跡、北側表の上遺跡では一つの遺跡から2～9軒見つかっている。庄内併行期では北側表の上遺跡において集中して見つかっている。
- ・後期における出土遺物で特徴的なものとして、ミニチュア土器、手焙形土器、埴、甔、剥片徳柄具・有頭石錘、横刃型石器、軽石、土製紡錘車、土製勾玉、土玉、土製円盤、土錘、ボタン状土製品、鉄斧、鉄鏃、刀子、釘、棒状鉄器、ガラス玉、勾玉、管玉が挙げられる。庄内併行期では、軽石、鉄斧、銅鏃、土製勾玉、土玉、土製円盤、土器片錘、ガラス玉が挙げられる。

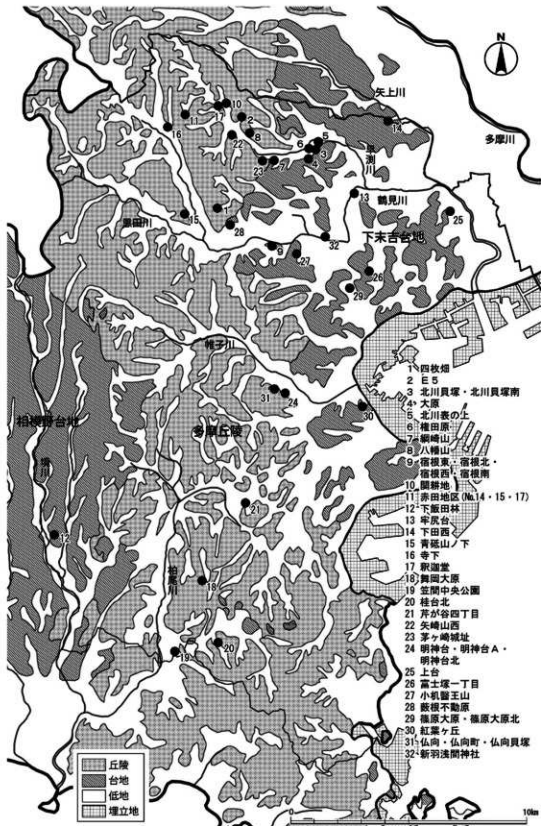
## おわりに

今回は横浜市における竪穴住居の集成と分析を行った。今後も神奈川県内における竪穴住居のデータベースの作成作業を継続する。県内各地域または市町村ごとでの分析を行ったのち、過去に行った集成のデータを含めて総合的な分析・比較を行う予定である。

なお、今回横浜市の集成を行うにあたり、小机医王山遺跡について株式会社博通の宮田眞氏に情報提供いただいた。末筆ながら記して感謝申し上げます。

## 参考文献

- 弥生時代研究プロジェクトチーム 1994 「弥生時代竪穴住居の基礎的研究(1)」『神奈川の考古学の諸問題』 神奈川の考古学第4集 神奈川県立埋蔵文化財センター
- 弥生時代研究プロジェクトチーム 1995 「弥生時代竪穴住居の基礎的研究(2)」『神奈川の考古学の諸問題』 神奈川の考古学第5集 神奈川県立埋蔵文化財センター



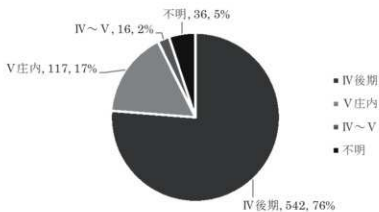
第1図 横浜市内対象遺跡分布図

弥生時代後期竪穴住居の研究（3）

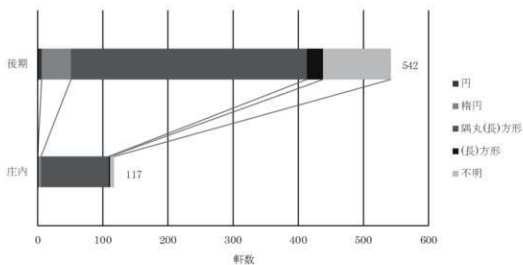
第1表 横浜市内における弥生時代の竪穴住居検出道路一覧表

No.	遺跡名	軒数	刊行団体	刊行年	出典
<b>横浜市</b>					
1	西牧畑	13	財団法人横浜市ふるさと歴史財団・横浜市教育委員会	2003	『四枚畑遺跡・川和向原遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告32
2	E5	40	財団法人横浜市ふるさと歴史財団・横浜市教育委員会	2001	『E5遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告27
3	北川貝塚	51	財団法人横浜市ふるさと歴史財団・横浜市教育委員会	2007	『北川貝塚』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告39
	北川貝塚南	9	財団法人横浜市ふるさと歴史財団	1997	『豊地の上遺跡・西谷戸の上遺跡・北川貝塚南遺跡』
4	大原	44	財団法人横浜市ふるさと歴史財団・横浜市教育委員会	2011	『大原遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告44
5	北川表の上	90	財団法人横浜市ふるさと歴史財団・横浜市教育委員会	2009	『北川表の上遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告42
6	権田原	11	財団法人横浜市ふるさと歴史財団・横浜市教育委員会	2014	『権田原遺跡』弥生時代後期～古墳時代前期編』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告47
7	綱崎山	3	財団法人横浜市ふるさと歴史財団・横浜市教育委員会	2004	『綱崎山遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告36
8	八幡山	31	財団法人横浜市ふるさと歴史財団・横浜市教育委員会	2002	『八幡山遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告31
	宿根東	8	大成エンジニアリング	2012	『宿根東遺跡-小机町2番1地点-』
9	宿根北	23	宿根北遺跡発掘調査団	1997	『宿根北遺跡発掘調査報告書』
	宿根西	7	宿根西遺跡発掘調査団	1999	『宿根西遺跡発掘調査報告書』
	宿根南	2	宿根南遺跡発掘調査団	1999	『宿根南遺跡発掘調査報告書』
10	開耕地	49	福福寺北遺跡発掘調査団	1997	『福福寺北遺跡群 開耕地遺跡』
11	赤田地区	23	日本農業史研究所	1998	『横浜市青葉区赤田地区遺跡群発掘Ⅱ』
12	下飯田林	20	財団法人横浜市ふるさと歴史財団	1997	『下飯田林・中ノ宮・草木遺跡発掘調査報告』
	宇尻台	38	宇尻台遺跡調査団	1991	『横浜市港北区宇尻台遺跡埋蔵文化財本調査概要』
13	宇尻台	8	財団法人横浜市ふるさと歴史財団	1999	『宇尻台遺跡発掘調査報告』
	宇尻台	2	財団法人横浜市ふるさと歴史財団	2003	『宇尻台遺跡(防火水槽設置地点)発掘調査報告』
14	下田西	2	下田西遺跡発掘調査団	2002	『下田西遺跡発掘調査報告書』
15	青砥山ノ下	1	山ノ下遺跡発掘調査団	2002	『青砥山ノ下遺跡』
16	寺下	5	日本農業史研究所	2003	『寺下遺跡』
17	釈迦堂	5	日本農業史研究所	2003	『釈迦堂遺跡2地区』
18	舞岡大原	13	財団法人横浜市ふるさと歴史財団	2004	『西見谷西遺跡・北川貝塚南遺跡舞岡大原遺跡発掘調査報告』
19	笠間中央公園	13	財団法人横浜市ふるさと歴史財団	2003	『笠間中央公園遺跡発掘調査報告』
20	桂台北	2	桂台北遺跡発掘調査団	2004	『桂台北遺跡発掘調査報告書』
21	芹が谷四丁目	34	株式会社鑑古堂	2006	『芹が谷四丁目遺跡-第1・2地点-』
22	矢崎山西	17	山武考古学研究所	2004	『矢崎山西遺跡』
23	茅ヶ崎城址	1	財団法人横浜市ふるさと歴史財団	2006	『茅ヶ崎城址埋蔵文化財本発掘調査報告』
	明神台	15	財団法人かながわ考古学財団	2006	『明神台遺跡・明神台北遺跡』かながわ考古学財団調査報告192
24	明神台A地区	22	財団法人横浜市ふるさと歴史財団	2006	『明神台遺跡A地区本発掘調査報告』
	明神台北	24	財団法人かながわ考古学財団	2006	『明神台遺跡・明神台北遺跡』かながわ考古学財団調査報告192
25	上台	3	玉川文化財研究所	2007	『上台遺跡(上末吉一丁目954番1所在)発掘調査報告書』
26	富士塚一丁目	1	玉川文化財研究所	2008	『富士塚一丁目遺跡発掘調査報告書』
27	小机鷹王山	3	小机鷹王山遺跡発掘調査団	1997	『小机鷹王山遺跡発掘調査報告書』
28	萩根不動原	1	萩根不動原遺跡発掘調査団	2007	『萩根不動原遺跡発掘調査報告書』
29	藤原大原	1	財団法人かながわ考古学財団	2004	『藤原大原遺跡』かながわ考古学財団調査報告178
	藤原大原北	1	(有)吾妻考古学研究所	2007	『藤原大原北遺跡』
30	紅葉ヶ丘	1	財団法人かながわ考古学財団	2005	『紅葉ヶ丘遺跡』かながわ考古学財団調査報告179
	仏向	4	株式会社鑑古堂	2012	『仏向遺跡』
31	仏向・仏向貝塚	29	財団法人かながわ考古学財団	2012	『仏向貝塚・仏向遺跡・仏向町遺跡』かながわ考古学財団調査報告279
32	新羽茂間神社	5	公益財団法人かながわ考古学財団	2013	『新羽茂間神社遺跡』かながわ考古学財団調査報告293

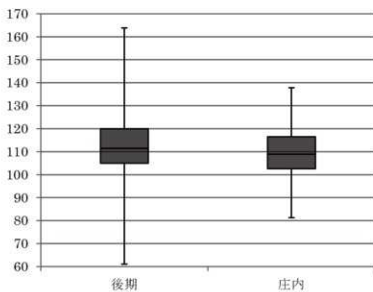
弥生時代研究プロジェクトチーム



第2図 時期別住居軒数

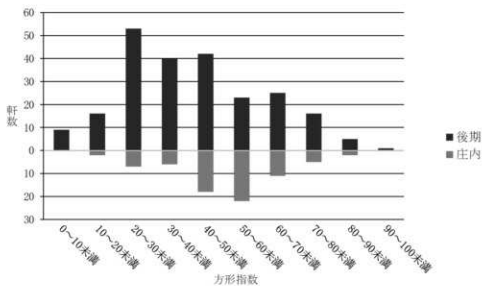


第3図 住居平面形態

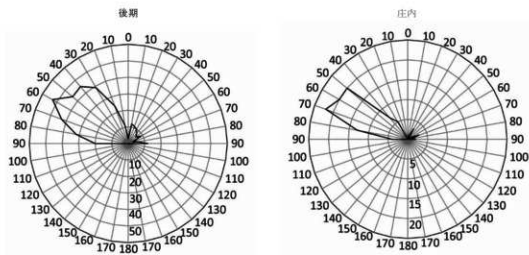


第4図 長短率

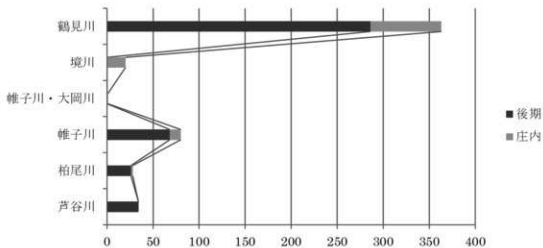
弥生時代後期聚穴住居の研究（3）



第5図 方形指数分布



第6図 主軸方位分布



第7図 水系別住居軒数

第3表 軒跡形態

後期	種別	軒数	確認数/確認総数 (%)	確認数/住居総軒数 (%)
	地床軒	338	93.4	62.4
	枕石軒	16	4.4	3.0
	枕粘土軒	7	1.9	1.3
	粘土板軒	1	0.3	0.2
	小計	362	100.0	66.8

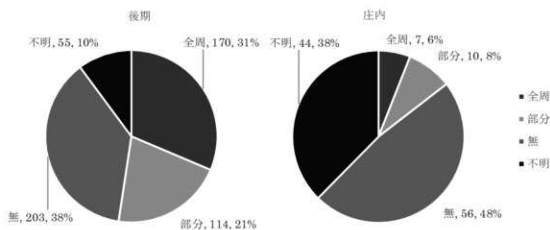
庄内	種別	軒数	確認数/確認総数 (%)	確認数/住居総軒数 (%)
	地床軒	84	90.3	71.8
	枕石軒	8	8.6	6.8
	その他	1	1.1	0.9
	小計	93	100.0	79.5

第4表 主柱穴本数

後期	主柱穴数	軒数	確認数/確認総数 (%)	確認数/住居総軒数 (%)
	1本	4	1.4	0.7
	2本	6	2.2	1.1
	3本	1	0.4	0.2
	4本	275	98.9	50.7
	5本	1	0.4	0.2
	6本	2	0.7	0.4
	小計	278	100.0	

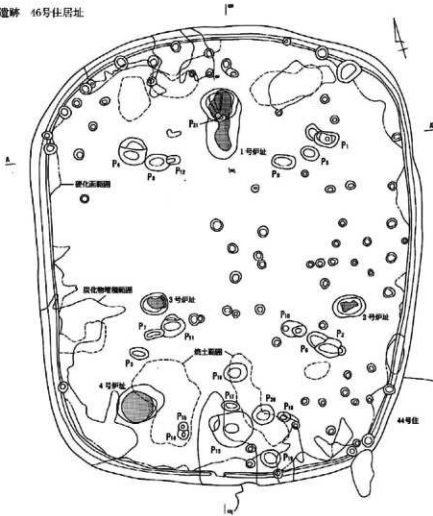
庄内	主柱穴数	軒数	割合 (%)	確認数/住居総軒数 (%)
	1本	5	4.6	4.3
	3本	1	0.9	0.9
	4本	103	94.5	88.0
	小計	109	100.0	



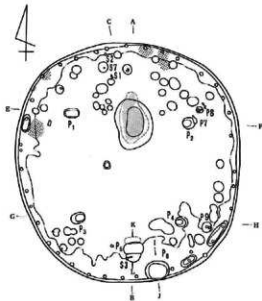
第8図 周溝の有無



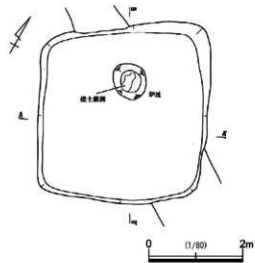
開耕地道跡 66号住居址



巴枚畑遺跡 Y-3号住居址

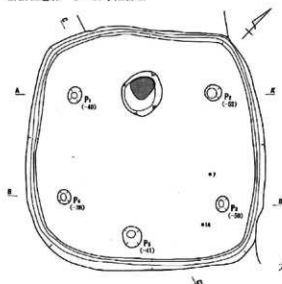


宿根西遺跡 Y-1号住居址

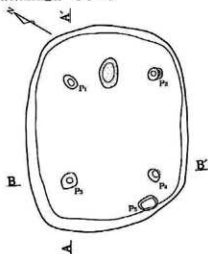


第9図 竪穴住居跡平面図(1)

宿根北遺跡 Y-16号住居址

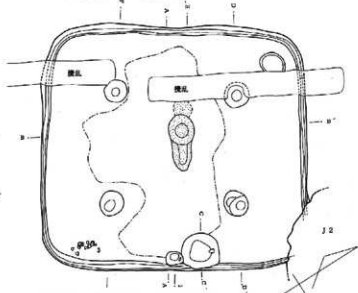
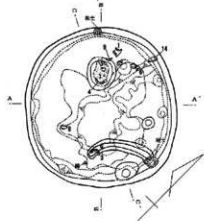


赤田地区遺跡群No.14遺跡 YT-3

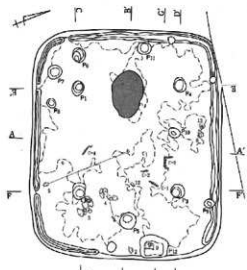


大原遺跡 Y16号住居址

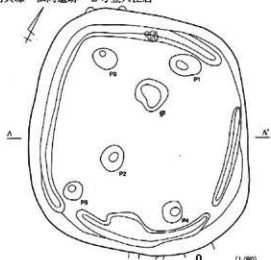
大原遺跡 Y33号住居址



明神台遺跡 Y10号住居

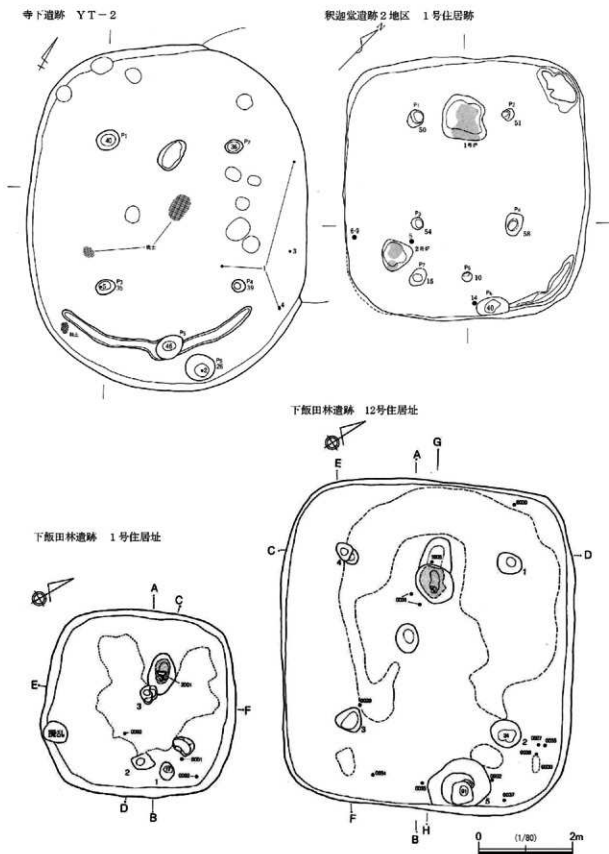


仏向貝塚・仏向遺跡 2号竪穴住居



第10図 竪穴住居跡平面図(2)





第11圖 竪穴住居跡平面図 (3)

## 神奈川県における古代の仏教関連遺物（2）

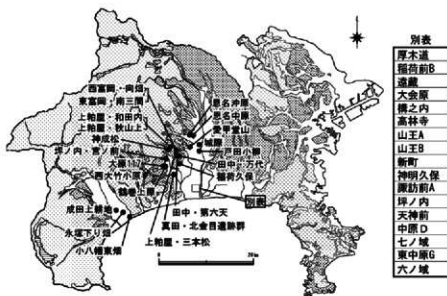
奈良・平安時代研究プロジェクトチーム

### はじめに

奈良・平安時代研究プロジェクトチームでは、昨年度より仏教関連遺物の集成を行う。神奈川県内では2000年に「考古学から古代を考える会」による『古代仏教系遺物集成・関東』において集成がなされている。その後、県内各地で寺院関連遺跡や仏教関連遺物の出土が確認されており、資料の蓄積が見られる。そこで2000年度以降の仏教関連遺物の集成を行い、出土する地域、出土する遺構などの傾向と特徴を調べるとともに、それ以前の資料との比較検討・補完を目的とする。昨年度は相模川以東を集成した。今年度は、相模川以西の集成を行い、県内の集成は完了となる。

### 例言

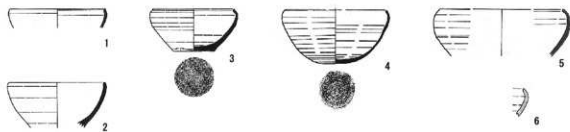
- ・ 図版の縮尺は1/6を基本としているが、小仏像、銅鏡、銅腕（銅腕）、佐波理匙、銅製品鈴は1/3とした。
- ・ 遺物の集成内容は『古代仏教系遺物集成・関東』に従った。
- ・ 墨書土器は「寺」、「佛」、「卍」、「宝珠文」を抜いた。
- ・ 図版は器種・器形ごとに集成している。
- ・ 器種・器形は観察表に基づいて集成しているが、記載がなくとも判断できるものは含めている。
- ・ 遺物名、遺構名、報告書名などは各報告書に従った。
- ・ 図版のキャプションに付した番号は研究紀要23からの通し番号である。
- ・ 奈良・平安時代以外の遺構から出土した遺物の出土位置は遺構外とした。



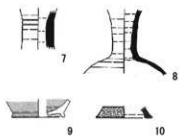
第1図 仏教関連遺物出土遺跡（相模川以西）

神奈川県における古代の仏教関連遺物（2）

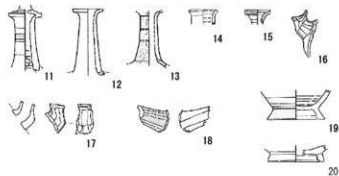
●仏鉢型土器



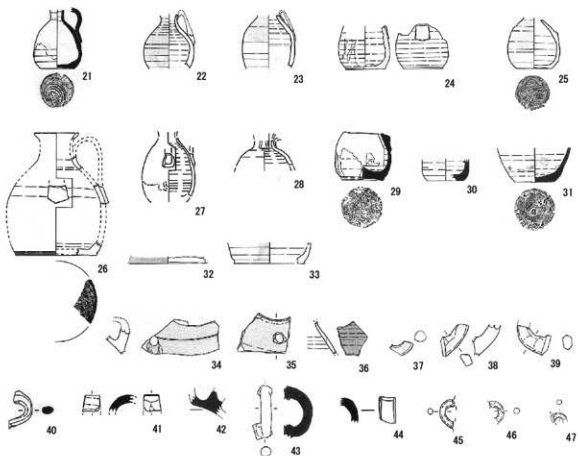
●浄瓶



●水注・水瓶

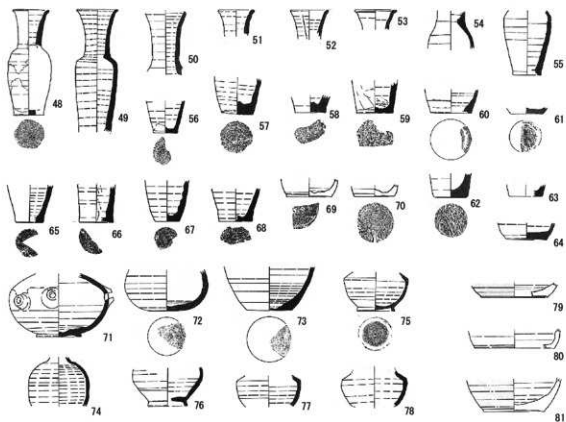


●手付き瓶

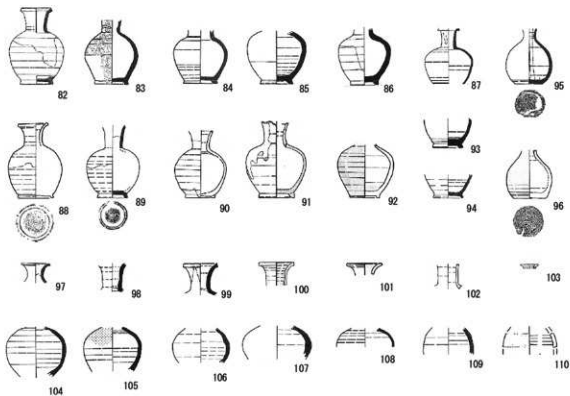


第2図 仏教関連遺物（6）

●壺G・壺

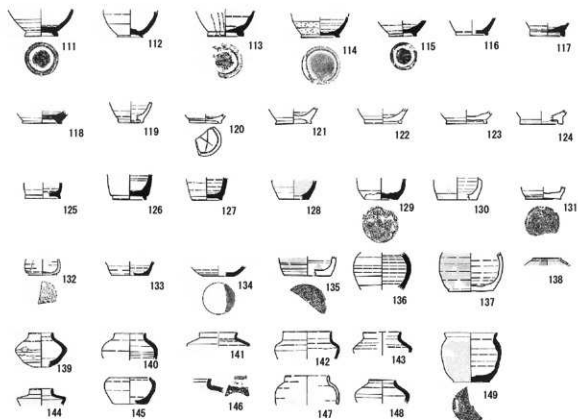


●小型壺・小型瓶

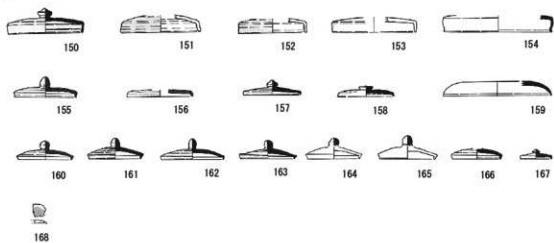


第3図 仏教関連遺物(7)

神奈川県における古代の仏教関連遺物（2）



●蓋

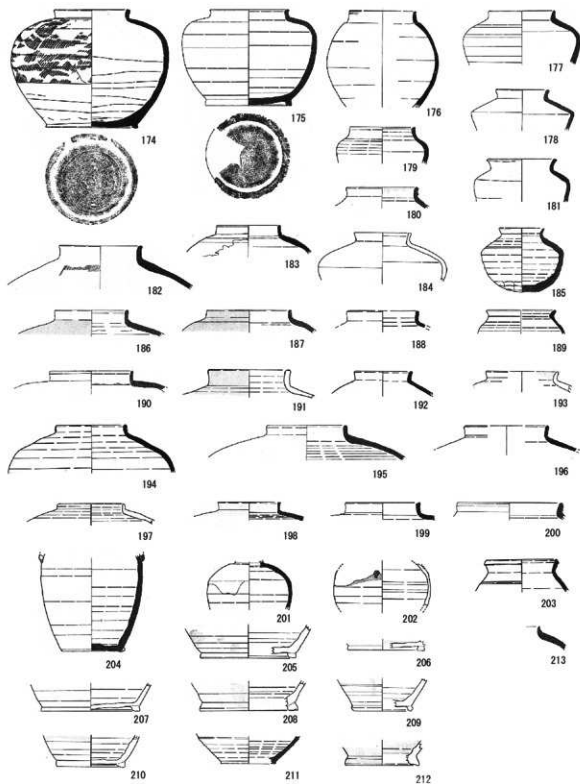


●獣足



第4図 仏教関連遺物（8）

●短頸壺



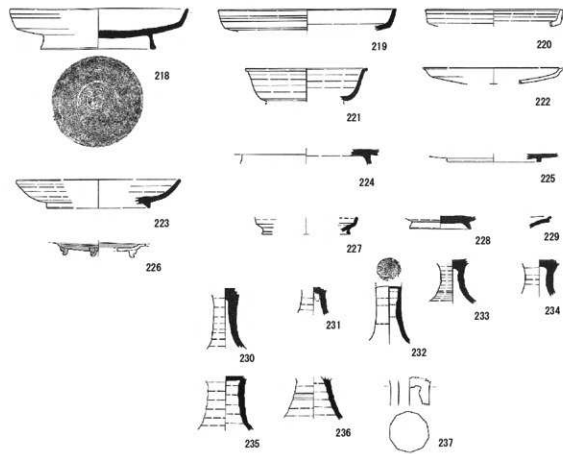
第5図 仏教関連遺物(9)



●唾壺



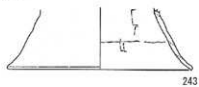
●高盤・盤



●香炉

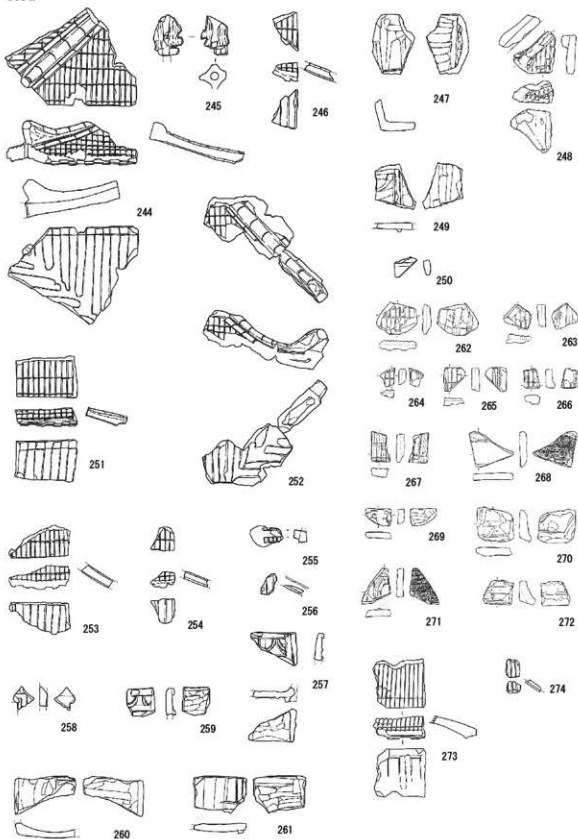


●火舎



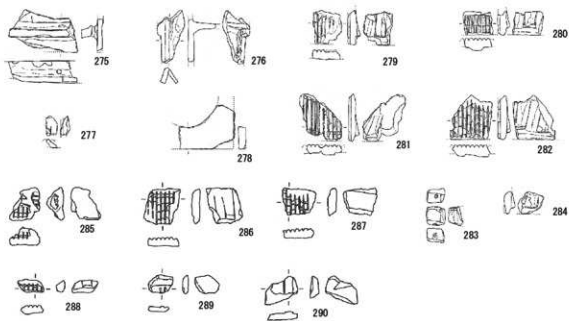
第6図 仏教関連遺物（10）

●瓦塔

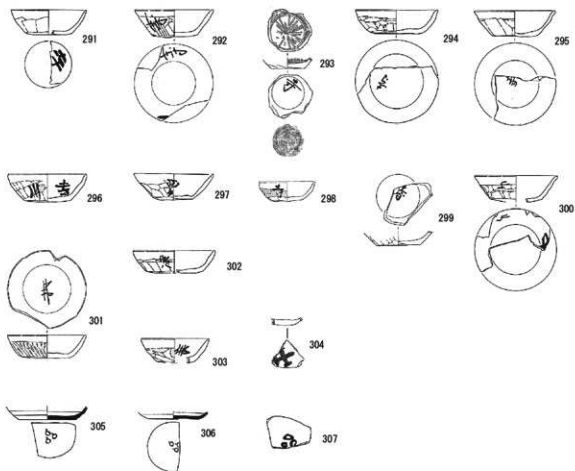


第7図 仏教関連遺物 (11)

神奈川県における古代の仏教関連遺物（2）

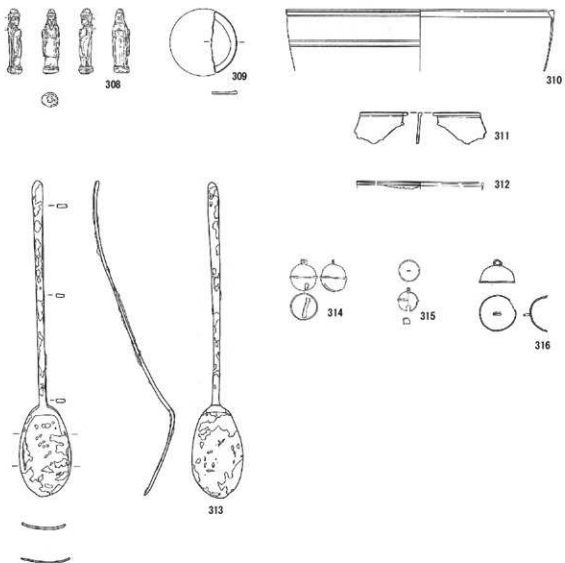


● 写經土器



第8図 仏教関連遺物（12）

●仏像・僧・器・銭



第9図 仏教関連遺物 (13)

第1表 仏教関連遺物一覧

## ●仏鉢型土器

図版№	器種・器形	道跡名	所在地	出土した遺構	参考文献
1	須恵器鉄鉢	愛甲堂山道跡	厚木市	3号住居址	迫和之・三ツ橋正夫2001『愛甲堂山道跡』愛甲原小橋遺跡発掘調査団
2	須恵器鉢	真田・北金日道跡	平塚市	35A・CGS1001	若林勝司・川端清倫他2010『平塚市真田・北金日道跡群発掘調査報告書7』第2分冊 平塚市真田・北金日道跡調査会
3	須恵器鉢 (鉄鉢)	新町道跡第5地点		1号溝状遺構	北平朗久2000『新町道跡 5地点発掘調査報告書』新町道跡調査団
4	須恵器鉢	天神前道跡 第16地点		S107	吉岡秀範2012『天神前道跡第16地点』日本歴史学研究所報告第78冊(株)日本歴史学研究所
5	須恵器鉢 (鉄鉢形)	坪ノ内道跡		NH3号土坑	柏木善治・依田亮一他2009『湘南新道開通道跡Ⅳ』かながわ考古学財団調査報告243 財団法人かながわ考古学財団
6	灰釉陶器鉢?	構之内道跡第5地点 A地区		遺構外	菅沼圭介・上原正人他2010『構之内道跡発掘調査報告書第5地点A地区』平塚市道跡調査会

## ●水注・水瓶

図版№	器種・器形	道跡名	所在地	出土した遺構	参考文献
7	須恵器水瓶	坪ノ内道跡第5地点	平塚市	S103	中嶋由紀子・上原正人2013『坪ノ内道跡 第5地点』平塚市埋蔵文化財シリーズ46 平塚市道跡調査会
8				SE01	
9	緑釉陶器瓶 (水注?)	大会原道跡	厚木市	遺構外	依田亮一・飯塚美保・川端清倫他2007『湘南新道開通道跡Ⅰ』かながわ考古学財団調査報告208 財団法人かながわ考古学財団
10	灰釉陶器水瓶	永塚下ノ畑道跡		H1号溝状遺構	齋木秀雄・藤久頼子・田尾誠敏2002『下ノ畑道跡・永塚下ノ畑道跡』鎌倉道跡調査会・下ノ畑道跡発掘調査団

## ●浄瓶

図版№	器種・器形	道跡名	所在地	出土した遺構	参考文献
11	灰釉陶瓶	真田・北金日道跡群 大久保道跡第3地点	平塚市	H-1土坑	中村哲也・伊藤貴宏他2009『平塚市真田・北金日道跡群 大久保道跡 第3地点発掘調査報告書』玉川文化財研究所
12	灰釉陶器水瓶	思名中原道跡 第3地点	厚木市	S105	林原利明・西本正憲・麻生順司2010『思名片岸道跡第2地点 思名中原道跡第7地点 林原道跡第4地点 長谷清水道跡第3地点 思名中原道跡第3地点 発掘調査報告書』厚木市教育委員会
13	灰釉陶器浄瓶	天神前道跡	平塚市	確認面までの出土 遺物	菊川英政2009『天神前道跡(Na.204) 発掘調査報告書第15地点』株式会社森藤建設
14	浄瓶もしくは 多口瓶注口	神明久保道跡		遺構外	近野正幸・加藤千恵子2001『神明久保道跡』かながわ考古学財団調査報告書102 財団法人かながわ考古学財団
15	灰釉陶器浄瓶	神明久保道跡 第5地点		H-10号壑穴建物	菅沼圭介・栗山雄輔他2003『神明久保道跡 第5地点』平塚市埋蔵文化財シリーズ38 平塚市道跡調査会
16	灰釉陶器浄瓶	神明久保道跡 第5地点		S104壑穴住居址	菅沼圭介・佐藤昌彦他2008『新町道跡発掘調査報告書』平塚市道跡調査会
17	灰釉陶器浄瓶	新町道跡		S101壑穴住居址	菅沼圭介・佐藤昌彦他2008『新町道跡発掘調査報告書』平塚市道跡調査会
18	灰釉陶器浄瓶	六ノ城道跡		遺構外	依田亮一・高橋香・飯塚美保他2009『湘南新道開通道跡Ⅱ』財団法人かながわ考古学財団調査報告242 財団法人かながわ考古学財団
19	灰釉陶器浄瓶注 口			遺構外	依田亮一・高橋香・飯塚美保他2009『湘南新道開通道跡Ⅱ』財団法人かながわ考古学財団調査報告242 財団法人かながわ考古学財団
20	灰釉陶器浄瓶	大会原道跡		遺構外	

## ●手付き瓶

図版№	器種・器形	道跡名	所在地	出土した遺構	参考文献	
21	灰釉陶器 手付瓶	真田・北金日道跡	平塚市	S5R2遺構外	若林勝司・福田健司他2013『平塚市真田・北金日道跡群発掘調査報告書10』第2分冊 平塚市真田・北金日道跡調査会	
22	灰釉陶器 手付小瓶	六ノ城道跡		遺構外	依田亮一・高橋香・飯塚美保他2009『湘南新道開通道跡Ⅱ』財団法人かながわ考古学財団調査報告242 財団法人かながわ考古学財団	
23	灰釉陶器 手付小瓶	構之内道跡第5地点 A地区		NH2号溝状遺構	依田亮一・高橋香・飯塚美保他2009『湘南新道開通道跡Ⅱ』財団法人かながわ考古学財団調査報告242 財団法人かながわ考古学財団	
24	灰釉陶器 手付瓶			SD68溝状遺構	菅沼圭介・上原正人他2010『構之内道跡発掘調査報告書第5地点A地区』平塚市道跡調査会	
25	灰釉陶器 手付瓶	六ノ城道跡	伊勢原市	NH7号住居	依田亮一・高橋香・飯塚美保他2009『湘南新道開通道跡Ⅱ』財団法人かながわ考古学財団調査報告242 財団法人かながわ考古学財団	
26	緑釉陶器 把手付瓶	神成松第5地点		H17号土坑	野尻義敬・相川 業他2014『神成松第5地点』神奈川県埋蔵文化財調査報告書23 株式会社バスコ	
27	灰釉陶器 把手付瓶	西富岡・向畑道跡 第2地点		S101	水野順敬・吉岡幸範2010『西富岡・向畑道跡 第2地点』株日本歴史学研究所	
28	灰釉陶器 把手付短頸瓶	真田・北金日道跡		48X・S1010	若林勝司・川端清倫他2010『平塚市真田・北金日道跡群発掘調査報告書8』第2分冊 平塚市真田・北金日道跡調査会	
29	須恵器瓶	大会原道跡		平塚市	NH4号溝状遺構	依田亮一・高橋香・飯塚美保他2009『湘南新道開通道跡Ⅱ』財団法人かながわ考古学財団調査報告242 財団法人かながわ考古学財団
30	須恵器瓶	大会原道跡			NH4号溝状遺構	依田亮一・高橋香・飯塚美保他2009『湘南新道開通道跡Ⅱ』財団法人かながわ考古学財団調査報告242 財団法人かながわ考古学財団

神奈川県における古代の仏教関連遺物（2）

図版No.	器種・器形	遺跡名	所在地	出土した遺構	参考文献		
31	須恵器瓶	真田・北金日遺跡	平塚市	55A1ES10020	若林勝司・福田健司他2013『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書10』第3分冊 平塚市真田・北金日遺跡調査会		
32	灰輪陶器 手付瓶	六ノ城遺跡		NB7号住居			
33				遺構外			
34				NB2号段切状遺構			
35	灰輪陶器 把手付長頸瓶	六ノ城遺跡		遺構外		依田亮一・高橋香・飯塚美保他2009『湘南新道開通遺跡Ⅱ』財団法人かながわ考古学財団調査報告242 財団法人かながわ考古学財団	
36	緑輪陶器手付瓶			遺構外			
37	灰輪陶器手付瓶						NB2号溝状遺構
38							
39	33A1ES1006			西合英夫・秋山重美他2003『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書4』平塚市真田・北金日遺跡調査会			
40	灰輪手付瓶						58B1ESK021
41	灰輪陶器瓶 (把手)	真田・北金日遺跡		55A1C遺構外		若林勝司・福田健司他2013『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書10』第3分冊 平塚市真田・北金日遺跡調査会	
42	須恵器瓶 (把手付)	西富岡・向畑遺跡 第2地点		55A1C遺構外		若林勝司・福田健司他2013『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書10』第3分冊 平塚市真田・北金日遺跡調査会	
43	灰輪陶器瓶 (把手)			59B1ES10036		若林勝司・福田健司他2013『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書10』第3分冊 平塚市真田・北金日遺跡調査会	
44	灰輪陶器 把手付瓶	天神前遺跡 第16地点		遺構外		若林勝司・福田健司他2013『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書10』第3分冊 平塚市真田・北金日遺跡調査会	
46・47	灰輪陶器把手			伊勢原市		切土整地層	水野順敏・吉岡秀範2010『西富岡・向畑遺跡第2地点』藤日本業史実研究所
						吉岡秀範2012『天神前遺跡第16地点』日本業史実研究所報告第78冊（株）日本業史実研究所	

●遺G・壺

図版No.	器種・器形	遺跡名	所在地	出土した遺構	参考文献		
48	須恵器壺	七ノ城遺跡第8地点	平塚市	H501	伊丹 敬・柳川清彦他2014『七ノ城遺跡第8地点発掘調査報告書』神奈川県埋蔵文化財発掘報告書26株式会社アーク・フィールドワークシステム		
49	須恵器壺	真田・北金日遺跡		59B1ESB0002		若林勝司・福田健司他2013『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書10』第3分冊 平塚市真田・北金日遺跡調査会	
50	須恵器壺G	六ノ城遺跡		NB9号土坑		依田亮一・高橋香・飯塚美保他2009『湘南新道開通遺跡Ⅱ』財団法人かながわ考古学財団調査報告242 財団法人かながわ考古学財団	
51				遺構外			
52				遺構外			
53				NB8号住居			
54	須恵器壺(壺G)	稲荷前B遺跡第5地点		SD09溝状遺構		大野 悠・栗山雄輝2005『稲荷前B遺跡第5地点』平塚市埋蔵文化財センター40平塚市遺跡調査会	
55	須恵器壺 長頸壺(壺G)	諏訪前A遺跡		第1次試掘調査 第9トレンチ		神奈川県教育委員会2004『神奈川県埋蔵文化財調査報告46』	
56	壺G	坪ノ内遺跡第5地点		P10		中嶋山紀子・上原正人2013『坪ノ内遺跡 第5地点』平塚市埋蔵文化財センター46 平塚市遺跡調査会	
57	須恵器壺G	大会原遺跡		NB6号井戸		依田亮一・高橋香・飯塚美保他2009『湘南新道開通遺跡Ⅱ』財団法人かながわ考古学財団調査報告242 財団法人かながわ考古学財団	
58				NB7号住居			
59	須恵器壺G	神明久保遺跡 第11地点		包含層		中村哲也・秋山重美2013『神明久保遺跡第11地点発掘調査報告書』玉川文化財研究所	
60	灰輪陶器壺	真田・北金日遺跡		26A・BIC遺構外		若林勝司・中島由紀子他2006『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書5』第2分冊 平塚市真田・北金日遺跡調査会	
61	灰輪陶器瓶	真田・北金日遺跡		55B1C遺構外		若林勝司・福田健司他2013『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書10』第2分冊 平塚市真田・北金日遺跡調査会	
62	須恵器壺G	六ノ城遺跡		NB11号住居		依田亮一・高橋香・飯塚美保他2009『湘南新道開通遺跡Ⅱ』財団法人かながわ考古学財団調査報告242 財団法人かながわ考古学財団	
63	須恵器壺	真田・北金日遺跡		53A～C1ESB006		若林勝司・大野 悠他2012『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書9』第3分冊 平塚市真田・北金日遺跡調査会	
64	須恵器壺	真田・北金日遺跡		44ESF0004		若林勝司・川端清倫他2010『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書7』第4分冊 平塚市真田・北金日遺跡調査会	
65・66・68	須恵器壺G	六ノ城遺跡		大会原遺跡		遺構外	依田亮一・高橋香・飯塚美保他2009『湘南新道開通遺跡Ⅱ』財団法人かながわ考古学財団調査報告242 財団法人かながわ考古学財団
67							
69							
70	灰輪陶器小瓶 灰輪陶器瓶	六ノ城・大会原遺跡					
71	須恵器多口壺	真田・北金日遺跡	111ESC001	若林勝司・川端清倫・関根唯実2001『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書2第2分冊』平塚市真田・北金日遺跡調査会			
72	須恵器壺	真田・北金日遺跡	18(A～D)1ESD002	若林勝司・中島由紀子他2006『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書5』第2分冊 平塚市真田・北金日遺跡調査会			
73	須恵器壺	真田・北金日遺跡	59B1ESB0002	若林勝司・福田健司他2013『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書10』第3分冊 平塚市真田・北金日遺跡調査会			

図版№	器種・器形	遺跡名	所在地	出土した遺構	参考文献	
74	須恵器壺	六ノ城遺跡	平塚市	NM24号壑穴住居	柏木善治・須藤賢夫2007『『新南新道間連絡遺跡Ⅰ』かながわ考古学財団調査報告210 財団法人かながわ考古学財団』	
75	須恵器瓶	真田・北金日遺跡		8C区SI1004	若林勝司・福田健司他2013『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書10』第3分冊 平塚市真田・北金日遺跡調査会	
76	須恵器瓶	神明久保遺跡第8地点		SI20号壑穴住居址	菅沼圭介・栗山雄輝他2003『神明久保遺跡第8地点』平塚市埋蔵文化財シリーズ38平塚市遺跡調査会	
77	須恵器壺	真田・北金日遺跡		8C区SI1020	若林勝司・中島由紀子・川端清倫他2003『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書3』第3分冊 平塚市真田・北金日遺跡調査会	
78	須恵器瓶	神明久保遺跡第8地点		SI30壑穴住居址	菅沼圭介・栗山雄輝他2003『神明久保遺跡第8地点』平塚市埋蔵文化財シリーズ38平塚市遺跡調査会	
79-81	灰軸陶器手付瓶	大会原遺跡		遺構外	依田亮一・高橋香・飯塚美保他2009『新南新道間連絡遺跡Ⅱ』財団法人かながわ考古学財団調査報告242 財団法人かながわ考古学財団』	
80		六ノ城遺跡			NB号溝状遺構	

## ●小型壺・小型瓶

図版№	器種・器形	遺跡名	所在地	出土した遺構	参考文献
82	須恵器小型壺	山王遺跡第5地点	平塚市	1号井戸址	榎木弘巳2003『山王遺跡第5地点』平塚市埋蔵文化財調査報告第16集 平塚市教育委員会
83	須恵器壺	西富岡・向嶺遺跡Ⅰ	伊勢原市	H25号壑穴状遺構	諏訪原直子・岡徳・菊川泉他2014『西富岡・向嶺遺跡Ⅰ』神奈川考古学財団調査報告書298 公益財団法人かながわ考古学財団』
84	須恵器小型瓶	田中・第六天遺跡第4地点 発掘調査報告書		4号住居址	伊藤貴史・立花実2016『田中・第六天遺跡 第4地点 発掘調査報告書』平成27年度都市計画調査高田中笠理埋蔵文化財調査報告 伊勢原市
85	須恵器長頸瓶	真田・北金日遺跡	平塚市	31区遺構外	河合英夫・秋山重美他2003『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書4』平塚市真田・北金日遺跡調査会
86	須恵器長頸瓶	山王B遺跡		SI14	大野 悟・栗山雄輝2001『山王遺跡』平塚市文化財シリーズ35 平塚市教育委員会
87	須恵器長頸瓶	真田・北金日遺跡	60C区SI1001		若林勝司・福田健司他2013『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書10』第4分冊 平塚市真田・北金日遺跡調査会
88	灰軸長頸瓶	鶴巻上原遺跡0702地点	栗野市	2号溝状遺構	齋木秀雄・島天嗣子・三ツ橋正夫2011『鶴巻上原遺跡0702地点発掘調査報告書』鎌倉遺跡調査会報告書第66集
89	灰軸陶器瓶小型長頸壺	真田・北金日遺跡	平塚市	56C区SI0034	若林勝司・福田健司他2013『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書10』第1分冊 平塚市真田・北金日遺跡調査会
90	灰軸陶器長頸瓶	真田・北金日遺跡		22C区SI025	河合英夫・秋山重美他2003『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書4』平塚市真田・北金日遺跡調査会
91	灰軸陶器長頸瓶	神明久保遺跡第8地点		SI20号壑穴住居址	菅沼圭介・栗山雄輝他2003『神明久保遺跡第8地点』平塚市埋蔵文化財シリーズ38平塚市遺跡調査会
92	灰軸陶器小型長頸瓶	六ノ城遺跡		NB号井戸	依田亮一・高橋香・飯塚美保他2009『新南新道間連絡遺跡Ⅱ』財団法人かながわ考古学財団調査報告242 財団法人かながわ考古学財団』
93	須恵器小型壺	諏訪原A遺跡		溝状遺構	神奈川県教育委員会『神奈川県埋蔵文化財調査報告46』
94	須恵器小型壺	六ノ城遺跡		遺構外	依田亮一・高橋香・飯塚美保他2009『新南新道間連絡遺跡Ⅱ』財団法人かながわ考古学財団調査報告242 財団法人かながわ考古学財団』
95	灰軸陶器瓶	真田・北金日遺跡		6C区SI182	若林勝司・中島由紀子・川端清倫他2003『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書3』第1分冊 平塚市真田・北金日遺跡調査会
96	灰軸陶器小瓶	六ノ城遺跡		NM24号住居	依田亮一・高橋香・飯塚美保他2009『新南新道間連絡遺跡Ⅱ』財団法人かながわ考古学財団調査報告242 財団法人かながわ考古学財団』
97	須恵器壺(小型壺)	真田・北金日遺跡	12C区SI2004	若林勝司・川端清倫他2008『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書6』第1分冊 平塚市真田・北金日遺跡調査会	
98	須恵器長頸瓶	真田・北金日遺跡	58B区SI032	若林勝司・大野 悟他2012『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書9』第3分冊 平塚市真田・北金日遺跡調査会	
99	灰軸陶器長頸瓶	平塚市真田・北金日遺跡	34A～D区SI028	若林勝司・川端清倫他2010『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書7』第3分冊平塚市真田・北金日遺跡調査会	
100	須恵器小型長頸壺	大会原遺跡	NM6号住居	依田亮一・高橋香・飯塚美保他2009『新南新道間連絡遺跡Ⅱ』財団法人かながわ考古学財団調査報告242 財団法人かながわ考古学財団』	
101	灰軸陶器小瓶	六ノ城遺跡	遺構外	依田亮一・高橋香・飯塚美保他2009『新南新道間連絡遺跡Ⅱ』財団法人かながわ考古学財団調査報告242 財団法人かながわ考古学財団』	

神奈川県における古代の仏教関連遺物（2）

図版No.	器種・器形	遺跡名	所在地	出土した遺構	参考文献
102	灰輪陶器瓶	山王B遺跡第6地点		S106	菅沼圭介・上原正人他2012『山王B遺跡第5・6地点』平塚市埋蔵文化財シリーズ45 平塚市遺跡調査会
103	緑輪陶器小瓶	大会原遺跡		N86号井戸	依田亮一・高橋香・飯塚美保他2009『湘南新道関連遺跡Ⅱ』財団法人かながわ考古学財団調査報告書242 財団法人かながわ考古学財団
104	須恵器長頸瓶	真田・北金日遺跡		23区S1010	河合英夫・秋山重美他2003『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書4』平塚市真田・北金日遺跡調査会
105	須恵器小型長頸壺	諏訪前A遺跡		第1次試掘調査第2トレンチ	神奈川県教育委員会2014『神奈川県埋蔵文化財調査報告46』
106	須恵器小型長頸瓶	六ノ城遺跡		遺構外	依田亮一・高橋香・飯塚美保他2009『湘南新道関連遺跡Ⅱ』財団法人かながわ考古学財団調査報告書242 財団法人かながわ考古学財団
107	須恵器小型壺	六ノ城遺跡		N82号溝状遺構	依田亮一・高橋香・飯塚美保他2009『湘南新道関連遺跡Ⅱ』財団法人かながわ考古学財団調査報告書242 財団法人かながわ考古学財団
108	灰輪陶器瓶	真田・北金日遺跡		50B1区SE0002	若林勝司・川端清倫他2013『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書10』第3分冊 平塚市真田・北金日遺跡調査会
109	須恵器壺G	六ノ城遺跡		NH18号土坑	依田亮一・高橋香・飯塚美保他2009『湘南新道関連遺跡Ⅱ』財団法人かながわ考古学財団調査報告書242 財団法人かながわ考古学財団
110	緑輪陶器小型壺	西富岡・向畑遺跡第2地点	伊勢原市	切土整地層	水野明敏・吉岡孝純他2010『西富岡・向畑遺跡第2地点』神日本歴史学研究会
111	須恵器瓶	真田・北金日遺跡		55A1区S10006	若林勝司・川端清倫他2013『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書10』第1分冊 平塚市真田・北金日遺跡調査会
112	灰輪陶器瓶	真田・北金日遺跡	平塚市	17C区遺構外	若林勝司・中島由紀子他2006『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書5』第1分冊 平塚市真田・北金日遺跡調査会
113	灰輪陶器瓶	真田・北金日遺跡		61区S1043	若林勝司・川端清倫・関根唯也2001『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書2第1』2分冊 平塚市真田・北金日遺跡調査会
114	須恵器小型壺	大原117遺跡2010033地点	葉野市	2号型穴建物跡	柳川清彦・高村博明・市川正史他2011『大原117遺跡2010033地点発掘調査報告書』（株）アーク・フィールドワークシステム
115	灰輪陶器壺	真田・北金日遺跡		35B-D区遺構外	若林勝司・川端清倫他2010『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書7』第5分冊 平塚市真田・北金日遺跡調査会
116-117	須恵器瓶	六ノ城遺跡		遺構外	
118	須恵器小型長頸瓶	六ノ城遺跡		遺構外	
119	灰輪陶器小型長頸瓶	大会原遺跡		遺構外	
120	灰輪陶器小型長頸壺	大会原遺跡		N82号住居	依田亮一・高橋香・飯塚美保他2009『湘南新道関連遺跡Ⅱ』財団法人かながわ考古学財団調査報告書242 財団法人かながわ考古学財団
121	灰輪陶器小型長頸瓶	六ノ城・大会原遺跡		遺構外	
122	灰輪陶器小型長頸瓶	六ノ城遺跡		N89号土坑	
123	灰輪陶器小型長頸瓶	六ノ城・大会原遺跡		遺構外	
124	灰輪陶器小型長頸瓶	六ノ城・大会原遺跡		遺構外	
125	須恵器瓶	六ノ城遺跡		N88号住居	依田亮一・飯塚美保・川端実佳子他2007『湘南新道関連遺跡Ⅰ』かながわ考古学財団調査報告書208 財団法人かながわ考古学財団
126	須恵器小型壺	諏訪前A遺跡		溝状遺構	神奈川県教育委員会『神奈川県埋蔵文化財調査報告46』
127	須恵器瓶	六ノ城遺跡	平塚市	N89号住居	依田亮一・飯塚美保・川端実佳子他2007『湘南新道関連遺跡Ⅰ』かながわ考古学財団調査報告書208 財団法人かながわ考古学財団
128	須恵器瓶	六ノ城遺跡		遺構外	依田亮一・高橋香・飯塚美保他2009『湘南新道関連遺跡Ⅱ』財団法人かながわ考古学財団調査報告書242 財団法人かながわ考古学財団
129	灰輪陶器壺	真田・北金日遺跡		61区遺構外	若林勝司・川端清倫・関根唯也2001『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書2第1』2分冊 平塚市真田・北金日遺跡調査会
130	灰輪陶器小瓶	六ノ城遺跡		遺構外	依田亮一・高橋香・飯塚美保他2009『湘南新道関連遺跡Ⅱ』財団法人かながわ考古学財団調査報告書242 財団法人かながわ考古学財団
131	灰輪陶器小瓶	六ノ城遺跡		遺構外	
132	灰輪陶器小瓶	溝之内遺跡第5地点A地区		遺構外	菅沼圭介・上原正人他2010『溝之内遺跡発掘調査報告書第5地点A地区』平塚市遺跡調査会
133	須恵器瓶	大会原遺跡		遺構外	依田亮一・高橋香・飯塚美保他2009『湘南新道関連遺跡Ⅱ』財団法人かながわ考古学財団調査報告書242 財団法人かながわ考古学財団
134	須恵器瓶	真田・北金日遺跡		26C-D区S11014	若林勝司・川端清倫他2008『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書6』第1分冊 平塚市真田・北金日遺跡調査会



図版№	器種・器形	遺跡名	所在地	出土した遺構	参考文献
135	灰釉陶器長小瓶	大会原遺跡	平塚市	遺構外	依田亮一・高橋香・飯塚美保他2009『湘南新道開通遺跡Ⅱ』財団法人かながわ考古学財団調査報告242 財団法人かながわ考古学財団
136	須恵器短頸蓋	真田・北金日遺跡		5061区遺構外	若林勝司・福田健司他2013『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書10』第3分冊 平塚市真田・北金日遺跡調査会
137	灰釉陶器小瓶	六ノ城遺跡		遺構外	柏木善治・依田亮一他2009『湘南新道開通遺跡Ⅳ』かながわ考古学財団調査報告243 財団法人かながわ考古学財団
138	奈良三彩小瓶			ME43号土坑	依田亮一・高橋香・飯塚美保他2009『湘南新道開通遺跡Ⅱ』財団法人かながわ考古学財団調査報告242 財団法人かながわ考古学財団
139	須恵器蓋	真田・北金日遺跡		30C区遺構外	若林勝司・川崎清倫他2008『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書6』第3分冊 平塚市真田・北金日遺跡調査会
140	須恵器小型短頸蓋	六ノ城遺跡		遺構外	依田亮一・高橋香・飯塚美保他2009『湘南新道開通遺跡Ⅱ』財団法人かながわ考古学財団調査報告242 財団法人かながわ考古学財団
141	須恵器小型短頸蓋	上粕屋・和田内遺跡第7次調査		伊勢原市	中村智也・伊藤貴宏他2017『上粕屋・和田内遺跡第7次調査』神奈川県文化財発掘調査報告書53 株式会社玉川文化財研究所
142	須恵器埋??	田中・方代遺跡			遺構外
143	須恵器蓋	神明久保遺跡第8地点		S306不明遺構	菅沼圭介・栗山雄輝他2003『神明久保遺跡第8地点』平塚市埋蔵文化財シリーズ38平塚市遺跡調査会
144	須恵器短頸蓋	真田・北金日遺跡		5044区遺構外	若林勝司・福田健司他2013『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書10』第3分冊 平塚市真田・北金日遺跡調査会
145	須恵器小型短頸蓋	六ノ城遺跡	遺構外	依田亮一・高橋香・飯塚美保他2009『湘南新道開通遺跡Ⅱ』財団法人かながわ考古学財団調査報告242 財団法人かながわ考古学財団	
146	須恵器短頸蓋		遺構外	依田亮一・高橋香・飯塚美保他2009『湘南新道開通遺跡Ⅱ』財団法人かながわ考古学財団調査報告242 財団法人かながわ考古学財団	
147	灰釉陶器蓋	神明久保遺跡第8地点	遺構外	菅沼圭介・栗山雄輝他2003『神明久保遺跡第8地点』平塚市埋蔵文化財シリーズ38平塚市遺跡調査会	
148	須恵器短頸蓋	真田・北金日遺跡	30C区遺構外	河合英夫・秋山重美他2003『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書4』平塚市真田・北金日遺跡調査会	
149	須恵器小型短頸蓋	大会原遺跡	遺構外	依田亮一・高橋香・飯塚美保他2009『湘南新道開通遺跡Ⅱ』財団法人かながわ考古学財団調査報告242 財団法人かながわ考古学財団	

## ● Ⅱ

図版№	器種・器形	遺跡名	所在地	出土した遺構	参考文献
150	須恵器蓋(短頸蓋蓋)	六ノ城遺跡	平塚市	NR8号住居	依田亮一・飯塚美保・川嶋実住子他2007『湘南新道開通遺跡Ⅰ』かながわ考古学財団調査報告208 財団法人かながわ考古学財団
151-152	灰釉陶器短頸蓋	六ノ城遺跡		遺構外	依田亮一・高橋香・飯塚美保他2009『湘南新道開通遺跡Ⅱ』財団法人かながわ考古学財団調査報告242 財団法人かながわ考古学財団
153	灰釉陶器瓶	坪ノ内遺跡		遺構外	柏木善治・依田亮一他2009『湘南新道開通遺跡Ⅳ』かながわ考古学財団調査報告243 財団法人かながわ考古学財団
154	須恵器蓋	真田・北金日遺跡		33B-DICS1030	若林勝司・川崎清倫他2010『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書7』第5分冊 平塚市真田・北金日遺跡調査会
155	須恵器蓋	大会原遺跡		N809号住居	依田亮一・高橋香・飯塚美保他2009『湘南新道開通遺跡Ⅱ』財団法人かながわ考古学財団調査報告242 財団法人かながわ考古学財団
156	須恵器蓋(短頸蓋蓋)	真田・北金日遺跡		12C区遺構外	若林勝司・川崎清倫他2008『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書6』第1分冊 平塚市真田・北金日遺跡調査会
157	須恵器蓋	坪ノ内遺跡		NR2号壱穴住居	柏木善治・依田亮一他2009『湘南新道開通遺跡Ⅳ』かながわ考古学財団調査報告243 財団法人かながわ考古学財団
158	須恵器蓋	厚木道遺跡		遺構外	大野哲・栗山雄輝他2002『厚木道遺跡』平塚市埋蔵文化財シリーズ36平塚市遺跡調査会
159	緑釉陶器蓋	真田・北金日遺跡		53A-CICS1011	若林勝司・大野 哲他2012『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書9』第1分冊 平塚市真田・北金日遺跡調査会
160	須恵器蓋	大会原遺跡		NR7住居	依田亮一・飯塚美保・川嶋実住子他2007『湘南新道開通遺跡Ⅰ』かながわ考古学財団調査報告208 財団法人かながわ考古学財団
161~165	須恵器蓋	大会原遺跡	NR3号壱穴住居	柏木善治・須藤智夫2007『湘南新道開通遺跡Ⅲ』かながわ考古学財団調査報告210 財団法人かながわ考古学財団	

神奈川県における古代の仏教関連遺物（2）

図版No.	器種・器形	遺跡名	所在地	出土した遺構	参考文献
166	須恵器蓋	六ノ城遺跡	平塚市	NH8号住居	依田亮一・飯塚美保・川嶋実住子他2007『湘南新道関連遺跡Ⅰ』かながわ考古学財団調査報告208 財団法人かながわ考古学財団
167	灰軸陶器蓋	真田・北金日遺跡		12A区S1063	若林勝司・中島由紀子他2006『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書5』第1分冊 平塚市真田・北金日遺跡調査会
168	奈良三彩蓋	六ノ城遺跡		NH1号住居	依田亮一・高橋香・飯塚美保他2009『湘南新道関連遺跡Ⅱ』財団法人かながわ考古学財団調査報告242 財団法人かながわ考古学財団

● 扉足

図版No.	器種・器形	遺跡名	所在地	出土した遺構	参考文献
169	灰軸陶器短須恵蓋	大会原遺跡	平塚市	遺構外	依田亮一・高橋香・飯塚美保他2009『湘南新道関連遺跡Ⅱ』財団法人かながわ考古学財団調査報告242 財団法人かながわ考古学財団
170	須恵器短須恵蓋			遺構外	依田亮一・高橋香・飯塚美保他2009『湘南新道関連遺跡Ⅱ』財団法人かながわ考古学財団調査報告242 財団法人かながわ考古学財団
171	須恵器蓋 (脚付盤の脚)			遺構外	柏木善治・依田亮一他2009『湘南新道関連遺跡Ⅳ』かながわ考古学財団調査報告243 財団法人かながわ考古学財団
172	不明土製品 (脚部か?)			真田・北金日遺跡	588区S1032
173	須恵器瓶(脚部)	六ノ城遺跡		遺構外	依田亮一・飯塚美保・川嶋実住子他2007『湘南新道関連遺跡Ⅰ』かながわ考古学財団調査報告208 財団法人かながわ考古学財団

● 短須恵

図版No.	器種・器形	遺跡名	所在地	出土した遺構	参考文献
174	須恵器短須恵蓋	真田・北金日遺跡	平塚市	38区S8003	若林勝司・川端清倫他2010『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書8』第1分冊 平塚市真田・北金日遺跡調査会
175				55A区S80029	若林勝司・福田健司他2013『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書10』第1分冊 平塚市真田・北金日遺跡調査会
176	須恵器蓋	六ノ城遺跡		遺構外	川端清倫・栗山雄輝2006『山王遺跡第4地点』平塚市埋蔵文化財シリーズ41 平塚市遺跡調査会
177	須恵器短須恵蓋	真田・北金日遺跡		30C区遺構外	若林勝司・川端清倫他2008『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書6』第2分冊 平塚市真田・北金日遺跡調査会
178	須恵器蓋(小型蓋または短須恵蓋?)	成田上跡地遺跡第1地点・成田諏訪脇遺跡第1地点	小田原市	第33号溝	天野賢一・諏訪園直子・長澤邦夫2001『成田上跡地遺跡第1地点・成田諏訪脇遺跡第1地点』かながわ考古学財団調査報告書271 財団法人かながわ考古学財団
179	須恵器短須恵蓋	悪名沖原遺跡第7地点	厚木市	S103	林原利明・西本正憲・藤生順司2010『悪名片原遺跡第2地点 悪名沖原遺跡第7地点 林南遺跡第4地点 長谷清水遺跡第3地点 悪名中原遺跡第3地点 発掘調査報告書』厚木市教育委員会
180-186	須恵器短須恵蓋	六ノ城遺跡		遺構外	依田亮一・高橋香・飯塚美保他2009『湘南新道関連遺跡Ⅱ』財団法人かながわ考古学財団調査報告242 財団法人かながわ考古学財団
181	須恵器蓋	真田・北金日遺跡		17E区S14007	若林勝司・川端清倫他2010『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書7』第1分冊 平塚市真田・北金日遺跡調査会
182	須恵器短須恵蓋	真田・北金日遺跡		12A区S1063	若林勝司・中島由紀子他2006『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書5』第1分冊 平塚市真田・北金日遺跡調査会
183	須恵器短須恵蓋	稲荷原遺跡第5地点		P92ピット	大野哲・栗山雄輝2005『稲荷原遺跡第5地点』平塚市埋蔵文化財シリーズ40 平塚市遺跡調査会
184	灰軸陶器短須恵蓋	真田・北金日遺跡		22C区遺構外	河合英夫・秋山重美他2003『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書4』平塚市真田・北金日遺跡調査会
185	須恵器蓋	山王遺跡第4地点	平塚市	SE01井戸址	川端清倫・栗山雄輝2006『山王遺跡第4地点』平塚市埋蔵文化財シリーズ41 平塚市遺跡調査会
187	須恵器短須恵蓋	大会原遺跡		遺構外	依田亮一・高橋香・飯塚美保他2009『湘南新道関連遺跡Ⅱ』財団法人かながわ考古学財団調査報告242 財団法人かながわ考古学財団
188	須恵器蓋	天神前遺跡第16地点		遺構外	吉岡考範2013『天神前遺跡第16地点』日本宗教学研究所報告第78冊 日本宗教学研究所
189	須恵器短須恵蓋	中原D遺跡第4地点		14号壑穴住居跡	北平朋久・石川真紀他2014『中野遺跡第4地点発掘調査報告書』神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書18株式会社玉川文化財研究所
190	須恵器短須恵蓋	山王遺跡第5地点		1号壑穴状遺構	押木弘巳2003『山王遺跡第5地点』平塚市埋蔵文化財調査報告第16巻 平塚市教育委員会
191	灰軸陶器短須恵蓋	坪ノ内遺跡		NH6号壑穴住居	柏木善治・依田亮一他2009『湘南新道関連遺跡Ⅳ』かながわ考古学財団調査報告243 財団法人かながわ考古学財団
192-194	須恵器蓋	六ノ城遺跡		遺構外	柏木善治・須藤晋夫他2007『湘南新道関連遺跡Ⅲ』かながわ考古学財団調査報告210 財団法人かながわ考古学財団

図版No.	器種・器形	遺跡名	所在地	出土した遺構	参考文献	
193	灰軸陶器短頸壺	坪ノ内遺跡	平塚市	遺構外	柏木善治・依田亮一他2009『湘南新道関連遺跡Ⅳ』かながわ考古学財団調査報告243 財団法人かながわ考古学財団	
195	灰軸陶器短頸壺	六ノ城遺跡		NI2号溝状遺構	依田亮一・高橋香・飯塚美保他2009『湘南新道関連遺跡Ⅱ』財団法人かながわ考古学財団調査報告242 財団法人かながわ考古学財団	
196	須恵器短頸壺	天神前遺跡(Na204)		雑器面までの出土地点	菊川英政2009『天神前遺跡(Na204)発掘調査報告書第5地点』株式会社森建設	
197	灰軸陶器短頸壺	六ノ城遺跡		NI5号土坑	依田亮一・高橋香・飯塚美保他2009『湘南新道関連遺跡Ⅱ』財団法人かながわ考古学財団調査報告242 財団法人かながわ考古学財団	
198	須恵器短頸壺			遺構外	依田亮一・飯塚美保・川嶋実住子他2007『湘南新道関連遺跡Ⅰ』かながわ考古学財団調査報告208 財団法人かながわ考古学財団	
199				NI6・7号住居	依田亮一・高橋香・飯塚美保他2009『湘南新道関連遺跡Ⅱ』財団法人かながわ考古学財団調査報告242 財団法人かながわ考古学財団	
200	須恵器短頸壺	六ノ城・大会原遺跡		遺構外	依田亮一・高橋香・飯塚美保他2009『湘南新道関連遺跡Ⅱ』財団法人かながわ考古学財団調査報告242 財団法人かながわ考古学財団	
201	須恵器長頸瓶	小八幡東原遺跡第Ⅱ地点		小田原市	5号住居址	秋山重美・前川昭彦・佐々木竜郎2004『小八幡東原遺跡第Ⅱ地点』小田原市文化財調査報告書第124集 玉川文化財研究所
202	須恵器長頸壺	稲荷久保遺跡第Ⅲ地点		伊勢原市	S119住居	渡辺智・吉岡幸純2006『稲荷久保遺跡第Ⅲ地点3・4次調査』日本農業史研究所調査報告68 日本農業史研究所
203	須恵器短頸壺	上粕屋・三本松遺跡第2次調査			6号住居址	田尾誠敏・平島真実・諏訪潤他2001『上粕屋・三本松遺跡第2次調査 発掘調査報告書』伊勢原市内遺跡調査会
204	須恵器短頸壺	高林寺遺跡第16地点	平塚市	5号住居址	中村哲也・伊藤貴宏2008『高林寺遺跡第16地点発掘調査報告書』玉川文化財研究所	
205~207	灰軸陶器短頸壺	六ノ城遺跡		遺構外		
208	灰軸陶器短頸瓶			NI25号住居		
209	灰軸陶器短頸壺			六ノ城・大会原遺跡	遺構外	依田亮一・高橋香・飯塚美保他2009『湘南新道関連遺跡Ⅱ』財団法人かながわ考古学財団調査報告242 財団法人かながわ考古学財団
210	灰軸陶器短頸壺	大会原遺跡		NI4号溝状遺構		
211	須恵器小型短頸壺	六ノ城・大会原遺跡		遺構外		
212	須恵器短頸壺	六ノ城・大会原遺跡		遺構外		
213	灰軸陶器短頸瓶	真田・北金日遺跡		SSICB1遺構外	若林勝司・福田健司他2013『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書10』第2分冊 平塚市真田・北金日遺跡調査会	

●唾壺

図版No.	器種・器形	遺跡名	所在地	出土した遺構	参考文献
214-215	緑釉陶器唾壺	六ノ城遺跡	平塚市	遺構外	依田亮一・高橋香・飯塚美保他2009『湘南新道関連遺跡Ⅱ』財団法人かながわ考古学財団調査報告242 財団法人かながわ考古学財団
216				NI25号惣穴住居	依田亮一・高橋香・飯塚美保他2009『湘南新道関連遺跡Ⅱ』財団法人かながわ考古学財団調査報告242 財団法人かながわ考古学財団
217	須恵器唾壺	水塚下り畑遺跡	小田原市	H1号溝状遺構	富木秀雄・塚久頼子・田尾誠敏2002『下巻我道跡・水塚下り畑遺跡』鎌倉遺跡調査会・下巻我道跡発掘調査会

●高足・鉢

図版No.	器種・器形	遺跡名	所在地	出土した遺構	参考文献
218	須恵器鉢	真田・北金日遺跡	平塚市	8CKS11012	若林勝司・中島由紀子・川端清倫他2003『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書3』第3分冊 平塚市真田・北金日遺跡調査会
219				44CKS10015	若林勝司・川端清倫他2010『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書7』第4分冊 平塚市真田・北金日遺跡調査会
220	44CKS20003	若林勝司・川端清倫他2010『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書7』第4分冊 平塚市真田・北金日遺跡調査会			
221	須恵器鉢	六ノ城遺跡		NI2号住居	依田亮一・高橋香・飯塚美保他2009『湘南新道関連遺跡Ⅱ』財団法人かながわ考古学財団調査報告242 財団法人かながわ考古学財団
222	土師器鉢	山王A遺跡第4地		遺構外	川端清倫・栗山雄輝2006『山王A遺跡第4地点』平塚市埋蔵文化財シリーズ41 平塚市遺跡調査会
223	須恵器鉢	坪ノ内・六ノ城遺跡		遺構外	柏木善治・依田亮一他2009『湘南新道関連遺跡Ⅳ』かながわ考古学財団調査報告243 財団法人かながわ考古学財団
224	須恵器高脚?	六ノ城遺跡		遺構外	依田亮一・高橋香・飯塚美保他2009『湘南新道関連遺跡Ⅱ』財団法人かながわ考古学財団調査報告242 財団法人かながわ考古学財団
225	須恵器高台付鉢	真田・北金日遺跡		53A~CKS1012	若林勝司・大野 哲他2012『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書9』第1分冊 平塚市真田・北金日遺跡調査会
226	緑釉陶器三足鉢	六ノ城・大会原遺跡		遺構外の遺構	依田亮一・高橋香・飯塚美保他2009『湘南新道関連遺跡Ⅱ』財団法人かながわ考古学財団調査報告242 財団法人かながわ考古学財団
227	須恵器盤方	山王A遺跡第4地		遺構外	川端清倫・栗山雄輝2006『山王A遺跡第4地点』平塚市埋蔵文化財シリーズ41 平塚市遺跡調査会
228	須恵器鉢	六ノ城遺跡	遺構外	依田亮一・高橋香・飯塚美保他2009『湘南新道関連遺跡Ⅱ』財団法人かながわ考古学財団調査報告242 財団法人かながわ考古学財団	

神奈川県における古代の仏教関連遺物（2）

図版№	器種・器形	遺跡名	所在地	出土した遺構	参考文献
229	須恵器壺	真田・北金日遺跡	平塚市	44ES10006	若林勝司・川端清倫他2010『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書7』第4分冊 平塚市真田・北金日遺跡調査会
230		六ノ城遺跡		NH9号住居	依田亮一・高橋香・飯塚美保他2009『湘南新道開通遺跡Ⅱ』財団法人かながわ考古学財団調査報告242 財団法人かながわ考古学財団
231	須恵器高椀	六ノ城・大会原遺跡		遺構外	
232	須恵器高杯?	真田・北金日遺跡		38E遺構外	若林勝司・川端清倫他2010『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書8』第1分冊 平塚市真田・北金日遺跡調査会
233	須恵器高杯			遺構外	依田亮一・高橋香・飯塚美保他2009『湘南新道開通遺跡Ⅱ』財団法人かながわ考古学財団調査報告242 財団法人かながわ考古学財団
234	須恵器高杯(高椀の可能性あり)	六ノ城遺跡		NH31号土坑	
235-236	須恵器高杯	構之内遺跡第5地点A地区		遺構外	菅沼圭介・上原正人他2010『構之内遺跡発掘調査報告書第5地点A地区』平塚市遺跡調査会
237	土師器高杯	真田・北金日遺跡	38ES002	若林勝司・川端清倫他2010『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書8』第1分冊 平塚市真田・北金日遺跡調査会	

●青伊

図版№	器種・器形	遺跡名	所在地	出土した遺構	参考文献
238-239	緑釉陶器香印蓋	六ノ城遺跡	平塚市	NH掘出	柏木善治・重藤智夫2007『湘南新道開通遺跡群』かながわ考古学財団調査報告210 財団法人かながわ考古学財団
240				NH21号惣穴住居	
241	緑釉陶器香印蓋	真田・北金日遺跡		18(A~D)遺構外	若林勝司・中島由紀子他2009『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書5』第2分冊 平塚市真田・北金日遺跡調査会
242	緑釉陶器香印蓋?	大会原遺跡		遺構外	依田亮一・高橋香・飯塚美保他2009『湘南新道開通遺跡Ⅱ』財団法人かながわ考古学財団調査報告242 財団法人かながわ考古学財団

●火倉

図版№	器種・器形	遺跡名	所在地	出土した遺構	参考文献
243	土師器火倉	真田・北金日遺跡	平塚市	60CXS1001	若林勝司・福田健司他2013『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書10』第4分冊 平塚市真田・北金日遺跡調査会

●瓦塔

図版№	器種・器形	遺跡名	所在地	出土した遺構	参考文献		
244	土製品瓦塔(屋蓋部)	神明久保遺跡第8地点	平塚市	S120	菅沼圭介・栗山雄輝他2003『神明久保遺跡第8地点』平塚市埋蔵文化財シリーズ38平塚市遺跡調査会		
245	土製品瓦塔(相輪部?)			S138			
246-251 254-256	土製品瓦塔(屋蓋部)			遺構外			
255	土製品瓦塔(屋蓋部?)			S120			
257	土製品瓦塔(斗栱部)			S136			
258				遺構外			
259				S001			
247-260	土製品瓦塔(輪部)			遺構外			
261				SE05			
249	土製品瓦塔(斗栱部)			S135			
250				遺構外			
248	土製品瓦塔			神明久保遺跡第10地点		遺構外	上原正人・中村高志他2006『神明久保第10地点』テイケイトレード株式会社
273	土製品瓦塔			東中期6遺跡		遺構外	菅沼圭介・上原正人2013『東中期6遺跡発掘調査報告書第3地点』第一三共株式会社平塚工場に伴う発掘調査V平塚市遺跡調査会
262-264 ~266	土製品瓦塔(屋蓋部)			神明久保遺跡		遺構外	
263	土製品瓦塔(屋蓋部縦横付否)						
267	土製品瓦塔(屋蓋部軒端部)						
269	土製品瓦塔輪部(斗栱?)						
268-270 ~272	土製品瓦塔(輪部)				近野正幸・加藤千恵子2001『神明久保遺跡』かながわ考古学財団調査報告書102 財団法人かながわ考古学財団		
285~290	土製品瓦塔	坪ノ内・宮ノ前遺跡(Na.16-17)	伊勢原市	3号溝	矢野信悟・宮坂洋一他2000『坪ノ内・宮ノ前遺跡(Na.16-17)』かながわ考古学財団調査報告書77 財団法人かながわ考古学財団		
275-276	土製品瓦塔(輪部)	真田・北金日遺跡	平塚市	SGP6-093	若林勝司・川端清倫他2008『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書6』第1分冊 平塚市真田・北金日遺跡調査会		
277-278	土製品瓦塔(屋蓋部)						

奈良・平安時代研究プロジェクトチーム

図版№	器種・器形	遺跡名	所在地	出土した遺構	参考文献
279	土製品瓦塔 (屋蓋部)	真田・北金日遺跡	平塚市	8G/P623	若林勝司・川端清倫他2008『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書6』第1分冊 平塚市真田・北金日遺跡調査会
280				8G/P642	
281				8G/P645	
282・284				8G遺構外	
283	土製品瓦塔 (軸部?)				

●土器土器

図版№	器種・器形	遺跡名	所在地	出土した遺構	参考文献		
291	『寺』カ土師器環	真田・北金日遺跡	平塚市	58BKS1029	若林勝司・大野 哲他2012『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書9』第3分冊平塚市真田・北金日遺跡調査会		
292	『□寺』土師器環			11IKSC001	若林勝司・川端清倫・関根唯光2001『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書2第2』2分冊平塚市真田・北金日遺跡調査会		
293	『寺』甲斐型土器			18(A~D)遺構外	若林勝司・中島由紀子他2006『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書3』第2分冊平塚市真田・北金日遺跡調査会		
294	『寺』土師器環			126IKSC0001	若林勝司・川端清倫他2010『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書7』第1分冊平塚市真田・北金日遺跡調査会		
295	『寺』土師器環			13IKSE001	若林勝司・中島由紀子・川端清倫他2003『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書3』第2分冊平塚市真田・北金日遺跡調査会		
296	『□寺』土師器環 内面			80KCS12002	若林勝司・中島由紀子・川端清倫他2003『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書3』第3分冊平塚市真田・北金日遺跡調査会		
297	『西寺』カ 土師器環			西大竹小西・西大竹 尾尻遺跡群	葉野市	97A1S108	露出復元2003『西大竹尾尻遺跡群』西大竹尾尻遺跡群発掘調査団
298	『寺』土師器環			真田・北金日遺跡	平塚市	8GKSI6003	若林勝司・川端清倫他2008『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書6』第1分冊平塚市真田・北金日遺跡調査会
299	土師器環墨書 土器『寺』			平塚市真田・北金日 遺跡	平塚市	30A-DKSI1058	若林勝司・川端清倫他2008『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書6』第2分冊平塚市真田・北金日遺跡調査会
300	『出カ』 土師器環					12E区遺構外	若林勝司・川端清倫他2010『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書7』第1分冊平塚市真田・北金日遺跡調査会
301	『佛』土師器環	12AKSI039	若林勝司・中島由紀子他2006『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書3』第1分冊平塚市真田・北金日遺跡調査会				
302	『佛八』土師器環	11IKSC001	若林勝司・川端清倫・関根唯光2001『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書2』第2分冊平塚市真田・北金日遺跡調査会				
303	『佛』土師器環	4IKSC001	若林勝司・川端清倫・関根唯光2001『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書2第2』1分冊平塚市真田・北金日遺跡調査会				
304	『出カ』? 土師器環	6区遺構外	若林勝司・川端清倫・関根唯光2001『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書2第2』2分冊平塚市真田・北金日遺跡調査会				
305	『宝珠カ』須恵器 坪(朱墨書)	稲荷前B遺跡 第5地点	平塚市			P03ピット	大野 哲・栗山雄輝2005『稲荷前B遺跡第5地点』平塚市埋蔵文化財シリーズ40平塚市遺跡調査会
306						S11号壱穴住居址	
307						P07ピット	

●仏像・鏡・鈴

図版№	器種・器形	遺跡名	所在地	出土した遺構	参考文献
308	銅製品 小仏像	六ノ城遺跡	平塚市	遺構外	依田亮一・高橋香・飯塚美保他2009『湘南新道開通遺跡Ⅱ』財団法人かながわ考古学財団調査報告書242 財団法人かながわ考古学財団
309	銅製品 鏡		平塚市		
310	銅製品 銅網	真田・北金日遺跡	平塚市	30A-DKSI1004	若林勝司・川端清倫他2008『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書6』第2分冊 平塚市真田・北金日遺跡調査会
311	銅製品 鏡	六ノ城遺跡	平塚市	遺構外	依田亮一・高橋香・飯塚美保他2009『湘南新道開通遺跡Ⅱ』財団法人かながわ考古学財団調査報告書242 財団法人かながわ考古学財団
312	銅製品 銅網	坪ノ内・宮ノ前遺跡 (No.16・17)	伊勢原市	3号溝	穴戸信博・宮坂洋一他2000『坪ノ内・宮ノ前遺跡(No.16・17)』かながわ考古学財団調査報告書77 財団法人かながわ考古学財団
313	佐政理彫	山EA遺跡第4地	平塚市	S802独立柱建物址	川端清倫・栗山雄輝2006『山EA遺跡第4地点』平塚市埋蔵文化財シリーズ41 平塚市遺跡調査会
314	銅製品 鈴	真田・北金日遺跡	平塚市	126IKSC0001	若林勝司・川端清倫他2010『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書7』第1分冊 平塚市真田・北金日遺跡調査会
315		真田・北金日遺跡	平塚市	4IKSC006	若林勝司・川端清倫・関根唯光2001『平塚市真田・北金日遺跡群発掘調査報告書2』第1分冊 平塚市真田・北金日遺跡調査会
316		六ノ城遺跡	平塚市	NH5号住居 31D	依田亮一・高橋香・飯塚美保他2009『湘南新道開通遺跡Ⅱ』財団法人かながわ考古学財団調査報告書242 財団法人かながわ考古学財団

# 神奈川県 県央地域の中世遺跡（4）

中世研究プロジェクトチーム

## はじめに

本プロジェクトチームでは、県内における中世の中心である鎌倉市、小田原市以外の中世遺跡の集積を続けている。現在も県央部では発掘調査が盛んに行われており、特に伊勢原市では多くの中世遺跡が発見され注目を浴びている。県央部から県西部にかけての地域で中世遺構や遺物の資料の蓄積もここ数年で著しく増加している状況が見受けられる。

県内の中世遺跡の検討を行う過程で、現状を把握するため過去3年間の研究紀要21～23で中世遺跡の集積を行った。今回は、集積の最後として逗子市から三浦半島地域の資料を掲載し、県内の中世遺跡の検討を行うための基礎資料とする。

## 例言

1. 神奈川県内の県央・県西地域については、明確な地域区分があるわけではない。今回は、横須賀市・三浦市・逗子市・葉山町を掲載する。
2. 基礎データの集積には、平成27年3月までに刊行された発掘調査報告書を基本とし、それ以外の書籍については、情報入手可能な範囲でデータに加えることとしている。
3. 集積表の項目はこれまでと同じであり、以下のとおりである。
  - (1) 遺跡名：発掘調査報告書（以下、報告書とする）に記載されている名称を原則とするが、現行の神奈川県埋蔵文化財包蔵地台帳に基づき、文献とは異なる名称を使用した遺跡もある。
  - (2) 所在地：報告書に記載されている住所・番地を記載した。合併による変更は新市町村に含めている。ただし、報告書の記載を優先し、新住所・新地番への変更は行っていない。複数にまたがる場合は、代表と思われる番地を記載した。
  - (3) 遺跡の種別：報告書の抄録に記載された種別を原則とするが、抄録がないものや中世の成果と異なる場合は、内容に応じて変更した。
  - (4) 立地環境：報告書の該当部分を要約した。
  - (5) 遺跡の概要：報告書の調査成果を要約した。
  - (6) 年代：報告書の年代表記を原則とするが、現行の遺物編年により、西暦年代（○世紀）で表記できる場合は（ ）付で記載した遺跡がある。
  - (7) 文献：巻末の参考文献と対応している。
  - (8) 集積した事例（特に、溝や溝状遺構）の中には、覆土の特徴（宝永火山灰を含まない等）や大室期以降の瀬戸・美濃製品（器種の消長期間が長く、破片からは時期の特定困難）が出土したことにより、中世として報告されたものがある。中世以外の時期も含んでいると推測されるが、集積の対象としている。

（宮坂淳一）

第1表 横須賀市・三浦市・逗子市・葉山町における中世遺跡一覧表

横須賀市	遺跡名	所在地	遺跡の種類	立地環境	遺跡の概要	年代	文献
	大穴部原塚	大穴部町1-5	やぐら	山腹	やぐら2基、副塚仏を出土。	中世	1
	住吉遺跡	衣笠町74	城郭	丘陵上	地下式灰の床面から炭化米・粟状の種子が出土。	中世	2
	鶴居上ノ台遺跡	鶴居2丁目	集落	台地上	地下式灰8基出土。	中世末	3
	上ノ台遺跡	長坂小字下の山1227-1他	やぐら	崖頂	やぐら13基、常滑製の磁器器が出土。	中世	4
	衣笠城跡	鶴居2丁目296番地他	集落	台地上	地下式灰を8基出土。	中世	5
	衣笠城跡	衣笠町1161番地	城郭	丘陵	土蔵、平堀、堀切を確認。	中世	6
	佐島やぐら群	佐島562番地他	やぐら	崖頂	やぐら9基。	中世	7
	天神やぐら群	追浜本町1丁目	やぐら	崖頂	やぐら5基。	中世	8
	天神やぐら群	追浜本町1-92-2他	やぐら	崖頂	やぐら5基。	中世	9
	佐島やぐら群	佐島586番地他	やぐら	崖頂	やぐら11基。	中世	9
	藤原遺跡	明神町	古墳	砂丘上	遺物のみ。	中世	10
	伝福寺東遺跡	久里浜9丁目	散佈地	砂丘上	遺物のみ。	中世	11
	栄遺跡	佐原1丁目1033番地	集落	丘陵上	溝を出土。	中世末	12
	長井台地遺跡群	長井4丁目無番地	集落・耕作地	台地上	遺物のみ。	13C後半～16C中	13
	芝下遺跡	太田町2丁目1971-2	集落	丘陵上	掘立柱建物、溝などを出土。古代末～中世初頃のかわらけが出土。	14～16C	14
	八幡神社遺跡群	久里浜2丁目3、16番地	集落	砂地上	掘立柱建物、溝などを出土。	13C後半～15C前半	15
	明神谷ノ遺跡	明神町2187番地外	集落	丘陵斜面	遺物のみ。	中世	16
	瀧願寺	岩戸1丁目4番地	寺院	丘陵上	日本堂跡、瓦敷、瓦葺まりを出土。出土遺物は創建期のもと考えられる。	12C末～14C代	17
	飯野社下遺跡、長沢1号墳	長沢75番地	集落	砂丘上	竪穴状遺構、井戸、溝、土坑などを出土。集落のはずれが、古墳の墳頂部に中世墓あり。	中世	18
	波島神社西遺跡	芦名1-18-37	やぐら	崖頂	やぐら6基、竪穴墓を改良したものあり。	中世	19
	衣笠城跡	衣笠町658-1	城	丘陵上	衣笠城の切岸である可能性が指摘される。	中世	20
	日向遺跡	南藤町1丁目69番地2号	散佈地	谷戸入口	遺物のみ。	中世	21
	石田谷遺跡	森崎町2丁目12番地他	散佈地	谷戸斜面	斜面中腹から石塔類が出土。	中世	22
	亀ヶ崎やぐら群	鶴居3丁目817番地口3	やぐら	尾根斜面	やぐら2基。	中世	23
	中馬堀遺跡	馬堀町4丁目25番地	集落	谷間地	溝状遺構、土坑を出土。	中世	24
	中馬堀遺跡	馬堀町4丁目25	集落	谷間地	溝、土坑などを出土。	中世	25

神奈川県東部の歴史地域の中世遺跡(4)

長浦地区遺跡群第3遺跡	長浦町丁目16-2	やぐら	丘陵斜面	やぐら2基、 遺物のみ。	中世	26
大町谷東遺跡	津久井大町谷116-1	集落	砂丘上		中世	27
吉井・池田地区遺跡群No.427 遺跡	池田町3-48-3他	耕作地	丘陵緩斜面	流土防止の石積み遺構、溝を抽出。耕作の水利関連遺構か。	中世	28
吉井・池田地区遺跡群No.423 遺跡	池田町1-35-4他	集落	丘陵緩斜面	土坑、溝などを抽出。	中世	29
吉井・池田地区遺跡群No.425 遺跡	吉井字上吉井65-1他	集落	丘陵上	遺物のみ。	中世	30
和田山やぐら群	追浜本町丁目	やぐら	崖壁	やぐら4基。	中世	31
宮の谷日塚	馬場町3丁目	日塚	丘陵先端	日塚からみかけが出土。	13C末~14C	32
小原第1遺跡	走水丁目10番20号	包蔵地	台地上	中世の可能性のある溝。	中世	33
小原谷遺跡	鶴居3丁目660番地	集落	低砂丘上	遺物のみ。	中世	34
田戸遺跡	田戸台90番地1	包蔵地	丘陵上	遺物のみ。	中世	35
和田山やぐら群	追浜本町丁目	やぐら	崖壁	やぐら14基。	中世	36
藤原東遺跡	明神町1-15	集落	砂丘上	中世日塚が抽出され、他階層が多数出土。明治7年(1408)の明応東海地震と想われる瓦跡を発見。	12C末~16C初	37
和田山やぐら群	追浜本町丁目23番地1他	やぐら	崖壁	やぐら3基。	中世	38
太田和跡	太田和4丁目213他	館	丘陵上	館に関する遺構は発見されなかった。遺物のみ出土。	13C前半~16C代	39
和田山やぐら群	追浜本町丁目9番地11他	やぐら	崖壁	やぐら7基。	中世	40
大町谷東遺跡	津久井字水町谷75番地他	集落	砂丘上	溝、土坑、ピットを抽出。	15C	41
和田山やぐら群	追浜本町1-19	やぐら	崖壁	やぐら4基。	中世	42
コウロ遺跡	久里浜2丁目	古墳	砂丘上	ピット、土坑を抽出。	12C末~15C代	43
コウロ北遺跡	長沢字コウロ4226-1他	集落	丘陵上	耕作に伴う区画、排水等の溝、墓の可能性のある土坑を抽出。	中世	44
和田山やぐら群	長沢字コウロ4225-1他	集落	丘陵上	墓の可能性のある土坑を抽出。	中世	45
三宅谷遺跡	池田町1-35-4他	やぐら	崖壁	やぐら4基。	中世	46
上吉井北遺跡	吉井字上吉井67-1他	集落	丘陵上	耕作に伴う溝を抽出。	中世	47
上吉井南遺跡	吉井字上吉井17他	集落	丘陵上	土坑等を9基抽出。	16C前半	47
西谷遺跡	池田町2-48-3他	集落	丘陵上	排水施設と考えられる石組み遺構を抽出。	15C末~16C前半	47
大塚台遺跡	池田町2-33-2他	集落	丘陵上	土坑、溝を抽出。	15C前半	48
大船遺跡	池田町4-32-2他	集落	丘陵上	耕作に伴う区画、排水の溝を抽出。	中世	48
和田山やぐら群	追浜本町1-19	やぐら	丘陵中腹	やぐら4基。	中世	49
大町谷東遺跡	津久井113番ほか	集落	砂丘上	溝、遺、ピットなどを抽出。	中世	50



衣笠城跡	衣笠	城垣	丘陵上	平場や切岸の測量調査などを実施。	中世	51
信楽寺遺跡群	大津町3丁目	横穴墓	崖裾	横穴墓を転用した墓か。	中世後期	52
吉井城山	吉井字下吉井755外	城跡	台地上	坂田城北近地で空堀と土堀状遺構が発見された。	中世	53
藤野社下遺跡	長沢字宮ヶ谷戸	集落	砂丘上	竪立柱建物、竪穴状遺構などを検出。	中世	54
	浦郷2丁目33	やぐら	崖裾	やぐら1基。	中世	55
	追浜南町1・2・5	やぐら	崖裾	やぐら8基。	13C後～14C前	56
	和田山やぐら群	やぐら	崖裾	やぐら2基。	中世	57
	追浜本町1-88	やぐら	崖裾	やぐら1基。	15C後	58
	和田山やぐら群	やぐら	崖裾	やぐら1基。	中世	59
	覚栄寺やぐら群	やぐら	崖裾	やぐら1基。	中世	60
	上ノ山A遺跡	散布地	丘陵上	土坑を検出。墓の可能性もある。	中世	61
	長沖829	集落	砂丘上	集落の一部を発見。	12～16C	62
	佐原3丁目1234-1他	城跡	台地縁辺	佐原城に関連すると推測される段切りを検出。	12～16C	63
	佐島2丁目	集落	丘陵上	道路状遺構、溝、土坑を検出。	中世	64
	一本松遺跡	集落	丘陵上	溝を検出。	中世	65
	上ノ山A遺跡	集落	丘陵上	竪立柱建物、土坑を検出。	中世	66
	長坂宮ノ前やぐら群	やぐら	崖裾	火葬骨を内包した合セロカかわらが出土。	16C	67
	北水神社やぐら群	やぐら	崖裾	やぐら1基。	中世	68
	和田山やぐら群	やぐら	崖裾	女室床面に地下式坑を確認。	16C	69
	平六ヶヶやぐら群	やぐら	崖裾	やぐら2基。	中世	70
	正権寺やぐら群	やぐら	崖裾	やぐら6基。	15C初～前葉	71
	家王寺やぐら群	やぐら	崖裾	五輪塔が多数出土し、蔵書器が出土。	14C初～15C	72
	正観寺やぐら群	やぐら	崖裾	やぐら2基。	中世	73
	長居高成遺跡	集落	台地上	道の機能もあつたと推測される溝を検出。	中世	74
	平六ヶヶやぐら群	やぐら	崖裾	やぐら3基。	中世	75
	神明社前遺跡	貝塚	丘陵上	中世貝塚。	14～15C代	76
	日向やぐら群	やぐら	崖裾	やぐら2基。	中世	77
	宗元寺跡	公願町3-107-4, 5, 7	沖積低地	中世末期以降の宗元寺内蔵書事業関連遺物が出土。	中世	78
	宗五寺跡	公願町3-107-9	沖積低地	削平面、溝、瓦器まりを検出。	中世	79
	佐原城跡遺跡	佐原3丁目1236-9	丘陵	遺物のみ。	13～16C	80
	久留和遺跡	秋吉字海老田4363-2	集落	海成段丘上	中世	81
	徳園寺やぐら群	追浜東町1-69-1他	やぐら	やぐら2基。	中世	82

神奈川県歴史地域の中世遺跡(4)

長岡南遺跡	長沢2-81B-1	集落	砂丘上	80
正光寺・自得寺岡田やぐら群	迫85丁目37番5先	やぐら	崖上	81
問答ヶ原遺跡	走水1-10-20防衛大分校地内	散佈地	台地上	82
徳福寺やぐら群	浦羅町3丁目41-10	やぐら	崖上	83
他六ヶヶ原やぐら群	迫浜町2丁目58-1	やぐら	崖上	84
舟久保遺跡	林5丁目1046番2外	田畑	丘陵上	85
八幡神社遺跡	大里部2-11-1	城郭	砂丘上	86
舟久保城跡	小矢部2-9-6	城郭	丘陵上	87
舟久保遺跡	林5丁目2337地	田畑	丘陵上	88
徳福寺やぐら群	浦羅町3丁目49-2	やぐら	崖上	89

遺石

遺跡名	所在地	遺跡の種類	立地環境	遺跡の概要	年代	文献
神武寺親王やぐら	神武寺境内	寺院	尾根上	やぐら2基。	中世	1
神武寺みろく窟	神武寺境内	寺院	崖上	やぐら1基。周辺に12基のやぐらあり。	中世	1
神武寺こんぴら山やぐら群	こんぴら山	やぐら	山腹	やぐら24基。	中世	1
お孫高やぐら群	久木1790	やぐら	山腹	やぐら4基。	中世	2
久木松岡氏墓やぐら群	久木5丁目4	やぐら	崖上	やぐら2基。	中世	2
まんだらとうやぐら群	小坪7丁目	やぐら	山腹	やぐら11基。	中世	3
小坪赤崎部内やぐら	小坪4-16-2	やぐら	崖上	やぐら1基。	中世	3
正覚寺裏やぐら	小坪5丁目2	やぐら	山腹	やぐら2基。	中世	3
住吉やぐら群	小坪5丁目13	やぐら	山腹	やぐら8基。	中世	3
新宿の富士塚	新宿字富士塚2170	塚	砂丘上	かわらけが出土。	室町期	3
持田遺跡	板山5丁目	集落	台地上	遺物のみ。	中世	4
名越遺跡	名越	集落	丘陵上	トレンチ調査で平場、切岸、茶畑跡、石切場を確認。	13C~15C	5
住吉神社	住吉5丁目	城郭	丘陵上	住吉城址の調査調査。平場・切岸を確認。	中世	6
神武寺	沼間	社寺、城郭	丘陵上	神武寺岡田を踏査し、平場などを確認。	中世	7
久木松岡氏墓やぐら群	久木5丁目4番13号	やぐら	崖上	やぐら2基。	中世	8
小坪5丁目やぐら群	小坪5丁目13-17	やぐら	崖上	やぐら7基。	中世	8
沼間やぐら群	沼間2-1427-1	やぐら	崖上	2穴あるが、やぐらから横穴墓か判断が難しい。	中世?	9
久木5丁目やぐら群	久木5丁目	やぐら	崖上	やぐら1基。	中世	10
池子遺跡群(No. 2 地誌)	池子米軍共用地内	集落	丘陵、沖積低地	遺物のみ。	中世	11

池子遺跡群 (No. 1-B地点)	池子米軍共用地内	集落	丘陵、沖積低地	溝、土坑などを検出。	中世	11
池子遺跡群 (No. 1-D地点)	池子米軍共用地内	集落	丘陵、沖積低地	井戸を検出。14~20cの居住地。	13~16C	12
池子遺跡群 (No. 1-C地点)	池子米軍共用地内	集落	丘陵、沖積低地	古代末~中世期の重立柱建物3群、井戸址等の付属施設を検出。	12~16C	13
小野5丁目やぐら群	小野5丁目やぐら群	やぐら	崖裾	やぐら1基。	15C中~16C	14
池子遺跡群 (No. 6地点)	池子米軍共用地内	集落	丘陵、沖積低地	溝状遺構が多数検出され、耕作地として長期利用。	12~16C	15
池子遺跡群 (No. 7東地点)	池子米軍共用地内	集落	丘陵、沖積低地	中世末~近世の遺構・遺物が多く出土し、八坂谷戸の集落(墓域)が明らかになる。	中世	15
池子遺跡群 (No. 7西地点)	池子米軍共用地内	集落	丘陵、沖積低地	東地区に墓地区が加わる。	13~16C	15
池子遺跡群 (No. 15地点)	池子米軍共用地内	集落	丘陵、沖積低地	崖裾のやぐら群と墓を検出。	中世	15
池子遺跡群 (No. 16地点)	池子米軍共用地内	集落	丘陵、沖積低地	やぐら1基。	中世	15
池子遺跡群 (No. 17地点)	池子米軍共用地内	集落	丘陵、沖積低地	やぐら3基。遺物は近世主体。	中世	15
池子遺跡群 (No. 18地点)	池子米軍共用地内	集落	丘陵、沖積低地	やぐら2基。	13~16C	16
池子遺跡群 (No. 8地点)	池子米軍共用地内	集落	丘陵、沖積低地	溝、目河道と重立柱建物を検出。	13~16C	16
池子遺跡群 (No. 9地点)	池子米軍共用地内	集落	丘陵、沖積低地	溝、目河道を検出。	中世	16
池子遺跡群 (No. 10地点)	池子米軍共用地内	集落	丘陵、沖積低地	溝を検出。	中世	16
池子遺跡群 (No. 13・14地点)	池子米軍共用地内	集落	丘陵、沖積低地	やぐら3基。	中世	16
久木4丁目やぐら群	久木4丁目	やぐら	崖裾	やぐら2基。	中世	17
池子遺跡群 (No. 5地点)	池子米軍共用地内	集落	丘陵、沖積低地	重立柱建物、井戸等を検出。古代の立地を継承する小規模集落。	12~16C	18
池子遺跡群 (No. 1-E地点)	池子米軍共用地内	集落	丘陵、沖積低地	池子遺跡群で唯一の中世遺構面を検出し、中世後半を中心とする別敷群を重立柱建物13群の形で検出した。	12~16C	19
池子遺跡群 (No. 12地点)	池子米軍共用地内	集落	丘陵、沖積低地	中世後半、新田回地にかかわり、墓質の遺構が行われた。	15~16C	19
池子遺跡群 (No. 3地点)	池子米軍共用地内	集落	丘陵、沖積低地	やぐら6基。近世遺構とともに中世遺物出土。	中世	20
池子遺跡群 (No. 4地点)	池子米軍共用地内	集落	丘陵、沖積低地	遺物のみ。	12C~16C	20
池子遺跡群 (No. 11地点)	池子米軍共用地内	集落	丘陵、沖積低地	やぐら2基。	中世	20
池子遺跡群 (No. 1-A東地点)	池子米軍共用地内	集落	丘陵、沖積低地	17c前半代の溝で囲まれた建物群。	12~16C	21
池子遺跡群 (No. 1-A南地点)	池子米軍共用地内	集落	丘陵、沖積低地	目河道から15c以降の遺物が出土。	12~16C	21
池子遺跡群 (No. 1地点)	池子米軍共用地内	集落	丘陵、沖積低地	水田面として利用。	12~16C	22
げんじ小谷やぐら群	小野6丁目119、120・6・7	やぐら	崖裾	やぐら6基。	中世	23
常盤谷やぐら群	久木5丁目10・11ほか	やぐら	崖裾	やぐら1基。	中世	24
常盤谷やぐら群	久木5丁目10・11ほか	やぐら	崖裾	やぐら1基。	中世	25
名越跡内大谷戸やぐら群	久木9丁目1834-1他	やぐら	崖裾	やぐら2基、井戸1基検出。	中世	26
正覚寺やぐら群	小野5丁目	やぐら	崖裾	やぐら3基。	13C後~16C前	27

延命寺遺跡	見子4丁目1076番1外	社寺	沖積低地	中世時には集落で、中世の区画を踏襲する。	12C末～16C	28
延命寺遺跡	見子4丁目1082	社寺	河原段丘上	延命寺「大段岡」の地割りと一致する溝を掘出し、	中世	29
名越切通	小坪7丁目1245-1他、久木9丁目1867他	交通、排送、防衛、生産	山陵部	まんだら堂やぐら群周辺の平場を確説。大切岸が中世の久根段な石切場であることを確認。	13C後半～18C	30
延命寺遺跡	見子4-1130-7	社寺	河原段丘上	中世後期の土坑から貝殻等が多量に出土。	16C中～後半	31
沼間南台遺跡	沼間1丁目137-4他	集落・散布地	台地上	遺物のみ。	中世	32
板山うき野遺跡	板山8丁目2038	散布地	沖積地	遺物のみ。	中世	33
在吉城址	小坪5丁目240他	城跡	丘陵上	平場(前輪)から土間、溝、柱穴などを検出。	中世	34
池子遺跡群(池子小学校建設地点)	池子米軍赤井用地内	集落	丘陵、沖積低地	障状遺構、柱列を検出。	12～16C	35
名越切通	小坪7丁目、久木9丁目	やぐら	山陵部	まんだら堂やぐら群と前部の調査。前面などで石敷遺構、道路状遺構、茶畑等を検出。	14C前半～15C後半	36
板山やぐら群	板山8丁目2274-1	やぐら	崖裾	やぐら3基。	中世	37

三浦市

遺跡名	所在地	遺跡の類別	立地環境	遺跡の概要	年代	文献
矢作やぐら群	初音町和田3296	やぐら	崖裾	やぐら3基。	中世	1
松輪大塚やぐら	南下浦町松輪322-7	やぐら	崖裾	やぐら1基、もう1基やぐらの可能性あり。	中世	2
南浦町堀穴群	南浦町	堀穴墓	新田中腹	堀穴墓からかわらけ・火部骨が出土。堀穴墓転用のやぐらか。	16C	3
奉行所跡やぐら群	三崎5丁目4-2・8	やぐら	崖裾	やぐら2基。	中世	4
小綱代やぐら	小綱代1946	やぐら	崖裾	やぐら1基。	中世	5
松輪大塚やぐら群	南下浦町松輪大塚312	やぐら	崖裾	やぐら6基。	中世	6
松輪大塚やぐら	南下浦町松輪宇大塚	やぐら	崖裾	やぐら3基。	中世	7
三崎宮塚やぐら群	三崎5丁目11-5・6	やぐら	崖裾	やぐら4基。	中世	8
海外やぐら群	海外町11番	やぐら	崖裾	やぐら4基。	中世	9
三崎宮塚やぐら群	三崎5丁目10・11	やぐら	崖裾	やぐら4基。	中世	10
小綱代やぐら	小綱代1449・1451	やぐら	崖裾	やぐら2基。	中世	11
和田やぐら群	初音町2638他	やぐら	崖裾	やぐら3基。堀穴墓から土器骨	中世	12
矢作第2やぐら群	初音町和田3007他	やぐら	崖裾	やぐら1基、もう1基やぐらの可能性あり。	中世	13
西野やぐら群	三崎5丁目7-5	やぐら	崖裾	やぐら1基。	中世	14
矢作第3やぐら群	初音町矢作	やぐら	崖裾	やぐら9基。近隣の堀穴墓も利用か。	中世	15
西野やぐら群	三崎5丁目7-1・2	やぐら	崖裾	やぐら3基。	中世	15

和田やぐら群	初音町3275	やぐら	麻屋	7基の横穴のうち、やぐらは2基。	中世	16
間口遺跡	南下浦町松輪	社寺	海浜低地	崖根平場の地蔵した貝殻層からかわらけがまとまって出土。	15C	17
西野やぐら群	三崎5丁目	やぐら	麻屋	やぐら1基。	中世	18
和田やぐら群	初音町3278	やぐら	麻屋	やぐら1基。	中世	19
松輪岡やぐら	松輪618	やぐら	麻屋	やぐら1基。	中世	20
松輪岡口やぐら	松輪614他	やぐら	麻屋	やぐら5基。	中世	21
矢作第4やぐら群	初音町和田3354他	やぐら	麻屋	横穴遺構用のやぐら3基。	中世	22
新井焼跡	小磯代	城館	海岸段丘上	大型独立柱建物など主要な遺構は三浦氏の新井城に伴うものと考えられる。	15C末～16C後	23
歌舞島やぐら群	白石町2805・1・3・5・8・13	やぐら	麻屋	やぐら4基。	中世	24
大芝原遺跡	南下浦町上宮田3274-1	散石地	砂丘上	遺物のみ。	14C後～15C後	25
海防築地部遺土塁	南下浦町上宮田3294	宮御	砂丘上	土塁のトレンチでかわらけ出土。土塁は近世の陣屋に関連。	15C前～中	26
白山神社遺跡	南下浦町新名字中里286	やぐら	麻屋	やぐら1基。	中世	27
金田仙神やぐら群	南下浦町1998	やぐら	麻屋	やぐら2基。	中世	28
間口またやぐら群	南下浦町松輪199	やぐら	麻屋	やぐら内部から多数の石葺が出土。火葬骨に文字が遺載。	14C後～17C	29
矢作第2やぐら群	初音町和田3324～3326	やぐら	麻屋	納骨穴から火葬骨が出土。	中世	30
釜田遺跡	初音町	集落	尾根上	遺跡状遺構を抽出。	中世	31
かんだ加遺跡	初音町	集落	尾根上	堅穴状遺構、溝状遺構などを抽出。	中世	31
西野やぐら群	三崎5丁目121	やぐら	麻屋	やぐら2基。	中世	32
白須西遺跡	三崎町語蔵字車籠51896-1外	集落	海浜低地	溝を9条検出。	中世	33

## 粟山町

遺跡名	所在地	遺跡の類別	立地環境	遺跡の概要	年代	文献
後山遺跡	木古冠字後山	集落	丘陵斜面	土坑器群を抽出。中世埋蔵品と考えられる。	中世	1
間門遺跡	上山口字北砂2143-1他	集落	谷地上	地下式灰を抽出。	16～17C	2
木の下の遺跡	堀内804	社寺	段丘上	蔵骨器を含む火葬墓・土灰層を抽出した。	12～14C	3
竹の谷戸やぐら	政柄131-2	やぐら	麻屋	やぐら1基。	14～15C	4
旗立山やぐら群	堀内40、41-1	やぐら	麻屋	やぐら2基。	中世	5

【参考文献】

横須賀市

- 1 赤星直忠 1980『横須賀市大矢部遺址』横須賀考古学会研究調査報告4 横須賀市考古学会
- 2 小出義治他 1981『住吉遺跡発掘調査報告書』神奈川県土木部・住吉遺跡調査団
- 3 岡本勇・塚田順正・中村勲・山田昌久ほか 1981『鴨居上ノ台遺跡』横須賀市文化財調査報告書第8集 横須賀市教育委員会
- 4 赤星直忠 1982『横須賀市長坂やぐら群の調査』長坂やぐら群発掘調査団
- 5 うえのだい刊行委員会 1982『うえのだい』横須賀考古学会
- 6 塚田明治他 1982『衣笠城跡・後山遺跡』日本道路公団・横浜横須賀道路埋蔵文化財発掘調査団
- 7 横須賀市急傾斜地区埋蔵文化財発掘調査団 1985『横須賀市佐島やぐら群の調査』
- 8 横須賀市急傾斜地区埋蔵文化財発掘調査団 1986『横須賀市天神やぐら群の調査』
- 9 横須賀市急傾斜地区埋蔵文化財発掘調査団 1986『横須賀市天神やぐら群、佐島やぐら群の調査』
- 10 大塚真弘・渡部律子他 1987『藤原』横須賀市文化財調査報告書第13集 横須賀市教育委員会
- 11 大塚真弘他 1988『伝福寺裏遺跡』横須賀市文化財調査報告書第16集 横須賀市教育委員会
- 12 中村勲他 1989『佐原東遺跡』泉道跡調査団
- 13 稲村繁・佐藤明生・中三川昇 1990『長井台地遺跡群』横須賀市文化財調査報告書第20集 横須賀市教育委員会
- 14 関塚英一・山本洋子 1990『芝下遺跡』横須賀市No.19遺跡(芝下遺跡)発掘調査団
- 15 稲村繁 1991『八幡神社遺跡群』横須賀市文化財調査報告書第21集 横須賀市教育委員会
- 16 中三川昇 1991『明神谷戸遺跡Ⅱ』横須賀市文化財調査報告書第22集 横須賀市教育委員会
- 17 小出義治・服部清道・三木弘 1992『岩戸瀧園寺』横須賀市文化財調査報告書第25集 横須賀市教育委員会
- 18 小出義治・大塚宣雄 1992『熊野社下遺跡・長沢1号墳』埋蔵文化財発掘調査概報集Ⅰ』横須賀市文化財調査報告書第26集 横須賀市教育委員会
- 19 大塚宣雄 1992『淡島神社西遺跡』埋蔵文化財発掘調査概報集Ⅰ』横須賀市文化財調査報告書第26集 横須賀市教育委員会
- 20 赤星直忠 1992『衣笠城跡』埋蔵文化財発掘調査概報集Ⅰ』横須賀市文化財調査報告書第26集 横須賀市教育委員会
- 21 川瀬智晴 1992『日向遺跡』埋蔵文化財発掘調査概報集Ⅰ』横須賀市文化財調査報告書第26集 横須賀市教育委員会
- 22 中三川昇 1992『石田谷遺跡』埋蔵文化財発掘調査概報集Ⅰ』横須賀市文化財調査報告書第26集 横須賀市教育委員会
- 23 中三川昇 1992『亀ヶ崎やぐら群』埋蔵文化財発掘調査概報集Ⅰ』横須賀市文化財調査報告書第26集 横須賀市教育委員会
- 24 稲村繁 1992『中馬場遺跡』埋蔵文化財発掘調査概報集Ⅰ』横須賀市文化財調査報告書第26集 横須賀市教育委員会
- 25 稲村繁 1992『中馬場遺跡』横須賀市埋蔵文化財調査報告書第1集 横須賀市教育委員会
- 26 相原俊夫 1993『長浦地区遺跡群第3遺跡』埋蔵文化財発掘調査概報集Ⅱ』横須賀市文化財調査報告書第27集 横須賀市教育委員会
- 27 大塚宣雄 1993『大町谷東遺跡』埋蔵文化財発掘調査概報集Ⅱ』横須賀市文化財調査報告書第27集 横須賀市教育委員会
- 28 大塚宣雄 1993『吉井・池田地区遺跡群No.427遺跡』埋蔵文化財発掘調査概報集Ⅱ』横須賀市文化財調査報告書第27集 横須賀市教育委員会
- 29 大塚宣雄 1993『吉井・池田地区遺跡群No.423遺跡』埋蔵文化財発掘調査概報集Ⅱ』横須賀市文化財調査報告書第27集 横須賀市教育委員会
- 30 大塚宣雄 1993『吉井・池田地区遺跡群No.423遺跡』埋蔵文化財発掘調査概報集Ⅱ』横須賀市文化財調査報告書第27集 横須賀市教育委員会
- 31 急傾斜地区埋蔵文化財調査団 1993『横須賀市「和田山やぐら群」の調査』
- 32 野内秀明・白井教 1993『横須賀市「宮の谷貝塚」の調査』急傾斜地区埋蔵文化財調査団
- 33 佐藤明生 1994『小原第1遺跡』横須賀市埋蔵文化財調査報告書第2集 横須賀市教育委員会
- 34 中三川昇・剣持輝久 1994『小荷谷遺跡』横須賀市埋蔵文化財調査報告書第3集 横須賀市教育委員会
- 35 野内秀明 1994『田戸遺跡』横須賀市埋蔵文化財調査報告書第4集 横須賀市教育委員会
- 36 三ツ橋和正・三ツ橋勝・三ツ橋正夫 1994『和田山やぐら群の第2次調査』急傾斜地区埋蔵文化財調査団
- 37 中三川昇・野内秀明 1995『藤原東遺跡』横須賀市埋蔵文化財調査報告書第5集 横須賀市教育委員会
- 38 小暮慶明・軽部一也 1995『和田山やぐら群の第3次調査』急傾斜地区埋蔵文化財調査団

- 39 佐藤明生 1996『太田和館跡』埋蔵文化財発掘調査概報集Ⅳ』横須賀市文化財調査報告書第30集 横須賀市教育委員会
- 40 急傾斜地区埋蔵文化財調査団 1996『和田山やぐら群の第4次調査』
- 41 伊東秀吉・大坪宜雄他 1996『大町谷東遺跡 B地点』大町谷東遺跡調査団
- 42 草柳卓二 1996『和田山やぐら群発掘調査概報』横須賀市埋蔵文化財緊急調査団
- 43 中三川昇・佐藤明生 1997『八幡神社遺跡Ⅱ』横須賀市文化財調査報告書第31集 横須賀市教育委員会
- 44 玉口時雄・大坪宜雄他 1997『横須賀リサーチパーク計画基盤整備事業地内埋蔵文化財発掘調査』横須賀リサーチパーク計画基盤整備事業地内埋蔵文化財発掘調査団
- 45 玉口時雄・大坪宜雄他 1997『横須賀リサーチパーク計画基盤整備事業地内埋蔵文化財発掘調査』横須賀リサーチパーク計画基盤整備事業地内埋蔵文化財発掘調査団
- 46 降矢順子・三ツ橋勝 1997『和田山やぐら群の第5次調査』和田山やぐら群遺跡調査団
- 47 北爪一行他 1997『吉井・池田地区遺跡群Ⅰ』横須賀市吉井・池田地区埋蔵文化財発掘調査団
- 48 北爪一行他 1997『吉井・池田地区遺跡群Ⅱ』横須賀市吉井・池田地区埋蔵文化財発掘調査団
- 49 野内秀明 1998『和田山やぐら群』横須賀市文化財調査報告書第32集 横須賀市教育委員会
- 50 中三川昇 1998『大町谷東遺跡』横須賀市文化財調査報告書第32集 横須賀市教育委員会
- 51 川上久夫・軽部一 1998『衣裳城跡 尾崎南地区遺跡』衣裳城跡尾崎南地区遺跡調査団
- 52 信楽寺横穴墓群調査団 1998『天津町信楽寺横穴墓群の調査』
- 53 野内秀明・舘持輝久・鈴木啓介 1999『吉井城山』横須賀市文化財調査報告書第34集 横須賀市教育委員会
- 54 三木弘・北爪一行他 1999『長沢1号墳・熊野社下遺跡』長沢1号墳・熊野社下遺跡調査団
- 55 佐藤明生 2000『榎戸やぐら群』横須賀市文化財調査報告書第35集 横須賀市教育委員会
- 56 村上吉正・柳川清彦 2000『雑谷やぐら群遺跡』かながわ考古学財団調査報告84
- 57 村上吉正・柳川清彦 2000『和田山やぐら群遺跡』かながわ考古学財団調査報告85
- 58 宮坂淳一・鈴木庸一郎 2001『和田山やぐら群遺跡Ⅱ』かながわ考古学財団調査報告119
- 59 宮坂淳一・鈴木庸一郎 2001『覚堂寺やぐら群遺跡』かながわ考古学財団調査報告120
- 60 中三川昇・堤仙区・上木進二 2002『佐島の丘遺跡群』横須賀市文化財調査報告書第37集 横須賀市教育委員会
- 61 宮坂淳一・植山英史 2002『関西西遺跡』かながわ考古学財団調査報告126
- 62 上田薫・木村吉行 2002『佐原城跡遺跡』かながわ考古学財団調査報告130
- 63 横山太郎他 2003『佐島の丘遺跡群発掘調査報告書』佐島の丘埋蔵文化財発掘調査団
- 64 宮坂淳一・鈴木庸一郎 2003『長坂宮ノ前やぐら群』かながわ考古学財団調査報告144
- 65 宮坂淳一・井間文明 2003『北水やぐら群』かながわ考古学財団調査報告147
- 66 宮坂淳一・井間文明・宍戸信悟 2003『和田山やぐら群Ⅲ』かながわ考古学財団調査報告148
- 67 宍戸信悟・櫻井真貴 2003『平六ヶ入やぐら群』かながわ考古学財団調査報告159
- 68 井間文明 2004『正尊寺やぐら群』かながわ考古学財団調査報告173
- 69 宍戸信悟・谷正秋 2004『葉王寺やぐら群』かながわ考古学財団調査報告176
- 70 鈴木庸一郎 2004『正観寺やぐら群』かながわ考古学財団調査報告177
- 71 麻生順司・小山裕之 2005『打木原遺跡・長井高原遺跡発掘調査報告書』株式会社玉川文化財研究所
- 72 井間文明 2005『平六ヶ入やぐら群Ⅱ』かながわ考古学財団調査報告193
- 73 中三川昇 2006『神明社前遺跡発掘調査報告Ⅰ』横須賀市文化財調査報告書第42集 横須賀市教育委員会
- 74 新聞基史・田代都夫・浜野浩美 2006『日向やぐら群』かながわ考古学財団調査報告203
- 75 中三川昇 2007『宗元寺跡・D地点埋蔵文化財確認調査報告』横須賀市文化財調査報告書第44集 横須賀市教育委員会
- 76 中三川昇 2008『宗元寺跡』埋蔵文化財発掘調査概報集ⅩⅥ』横須賀市文化財調査報告書第45集 横須賀市教育委員会
- 77 齊藤真一・宮井香 2008『佐原城跡遺跡Ⅱ』かながわ考古学財団調査報告228
- 78 中三川昇 2009『久留和遺跡D地点発掘調査報告書』横須賀市文化財調査報告書第46集 横須賀市教育委員会
- 79 横山太郎 2009『徳間寺やぐら群』埋蔵文化財発掘調査概報集ⅩⅧ』横須賀市文化財調査報告書第46集 横須賀市教育委員会
- 80 山田仁和 2010『長岡南遺跡』埋蔵文化財発掘調査概報集ⅩⅧ』横須賀市文化財調査報告書第47集 横須賀市教育委員会
- 81 松葉崇・三ツ橋勝 2010『正光寺・自得寺周辺やぐら群』かながわ考古学財団調査報告255

神奈川県県央地域の中世遺跡(4)

- 82 渡辺外・菊川豪・櫻井真貴 2011『問答ヶ原遺跡』かながわ考古学財団調査報告書265
- 83 柏木善治・栗原伸好 2012『独園寺やぐら群』かながわ考古学財団調査報告書283
- 84 小山裕之・前川昭彦・富永樹之 2012『平六ヶ入やぐら群III』神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書5 株式会社玉川文化財研究所
- 85 小林晴生・前川昭彦・戸田哲也・麻生順司・恩田勇 2014『舟久保遺跡』神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書19 株式会社玉川文化財研究所
- 86 中三川昇也 2015『八幡神社遺跡』横須賀市文化財調査報告書第52集 横須賀市教育委員会
- 87 中三川昇也 2015『埋蔵文化財発掘調査概報集XXI』横須賀市文化財調査報告書第52集 横須賀市教育委員会
- 88 石川真紀・前川昭彦・麻生順司・恩田勇 2016『舟久保遺跡第2次調査』神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書41 株式会社玉川文化財研究所
- 89 河合英夫・小池聡・恩田勇 2016『独園寺やぐら群第3次調査』神奈川県埋蔵文化財発掘調査報告書44 株式会社玉川文化財研究所

逗子市

- 1 逗子市教育委員会 1970『逗子市文化財調査報告書』第1集
- 2 逗子市教育委員会 1972『逗子市文化財調査報告書』第3集
- 3 逗子市教育委員会 1973『逗子市文化財調査報告書』第4集
- 4 逗子市教育委員会 1975『逗子市文化財調査報告書』第6集
- 5 赤星直忠他 1979『逗子市名越遺跡』逗子市教育委員会
- 6 赤星直忠・塚田明治他 1980『逗子市住吉城址』逗子市教育委員会
- 7 赤星直忠・山田享史・塚田明治 1984『逗子市文化財調査報告書』第12集 逗子市教育委員会
- 8 軽部一・降矢順子・佐藤仁彦 1996『逗子市久木松岡氏やぐら群、逗子市小坪5丁目やぐら群の調査』急傾斜地区埋蔵文化財調査団
- 9 急傾斜地区埋蔵文化財調査団 1991『逗子市久木1丁目横穴・沼間やぐら群の調査』
- 10 急傾斜地区埋蔵文化財調査団 1992『逗子市久木5丁目やぐら群、三浦市和田やぐら群の第4次調査』
- 11 樹洲規彰・山本暁久・高村公之・吉田映子 1994『池子遺跡群I』神奈川県埋蔵文化財センター調査報告27
- 12 樹洲規彰・高村公之 1995『池子遺跡群II』かながわ考古学財団調査報告3
- 13 樹洲規彰・新聞基史・谷口肇・山本暁久 1996『池子遺跡群III』かながわ考古学財団調査報告11
- 14 佐藤仁彦・降矢順子・軽部一 1997『神奈川県逗子市小坪5丁目やぐら群の第2次調査』小坪やぐら群遺跡調査団
- 15 山本暁久・谷口肇・植山英史・樹洲規彰 1997『池子遺跡群IV』かながわ考古学財団調査報告26
- 16 植山英史・樹洲規彰 1997『池子遺跡群V』かながわ考古学財団調査報告27
- 17 降矢順子・軽部一 1998『神奈川県逗子市久木4丁目横穴・やぐら群の調査』久木4丁目やぐら群調査団
- 18 樹洲規彰・植山英史 1998『池子遺跡群VI』かながわ考古学財団調査報告36
- 19 樹洲規彰・植山英史 1999『池子遺跡群VII』かながわ考古学財団調査報告43
- 20 長谷川厚・樹洲規彰・新聞基史・依田亮一 1999『池子遺跡群VIII』かながわ考古学財団調査報告44
- 21 山本暁久・谷口肇 1999『池子遺跡群IX』かながわ考古学財団調査報告45
- 22 山本暁久・谷口肇 1999『池子遺跡群X』かながわ考古学財団調査報告46
- 23 樹洲規彰 1999『げんじが谷横穴墓群及びやぐら群』かながわ考古学財団調査報告62
- 24 中田英・樹洲規彰 1999『堂地谷やぐら群』かながわ考古学財団調査報告62
- 25 中田英・栗原伸好・新聞基史 2000『堂地谷やぐら群』かながわ考古学財団調査報告97
- 26 上田薫・植山英史 2001『名越遺跡内やぐら群』かながわ考古学財団調査報告106
- 27 宮坂淳一・鈴木康一郎 2002『正覚寺やぐら群』かながわ考古学財団調査報告132
- 28 松山敬一郎・宗台富貴子 2003『延命寺遺跡発掘調査報告書』東国歴史考古学研究所調査報告第32集 東国歴史考古学研究所
- 29 松山敬一郎 2003『延命寺遺跡 逗子市小学校プール地点発掘調査報告書』延命寺遺跡発掘調査団
- 30 佐藤仁彦・菊池信吾他 2004『史跡名越切通確認調査報告』神奈川県逗子市埋蔵文化財発掘調査報告書4 逗子市教育委員会
- 31 佐藤仁彦・菊池信吾他 2004『埋蔵文化財発掘確認調査報告2 延命寺遺跡発掘調査報告』神奈川県逗子市埋蔵文化財発掘調査報告書3 逗子市教育委員会



- 32 松山敬一郎 2004『沼間南台道跡発掘調査報告書』沼間南台道跡発掘調査団  
 33 阿部友寿・飯塚美保・中田英・柏木善治 2004『板山うつき野道跡』かながわ考古学財団調査報告163  
 34 宮田眞・安藤龍馬・滝澤晶子 2005『住吉城址発掘調査報告書』株式会社博通  
 35 松田光太郎・松葉崇・依田亮一・小増山一良 2011『池子道跡群X I』かながわ考古学財団調査報告263  
 36 佐藤仁彦 2012『史跡名越切通整備事業に伴う発掘調査報告書』逗子市教育委員会  
 37 菊池信吾 2013『板山やぐら群』神奈川県逗子市埋蔵文化財調査報告書』8 逗子市教育委員会

### 三浦市

- 1 三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団 1984『三浦市矢作やぐら群の調査』  
 2 小暮慶明・飯島重一 1984『三浦市松輪大畑やぐらの調査』三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団  
 3 飯島重一・臼井敦 1985『三浦市晴海町横穴群の調査』三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団  
 4 三浦市急傾斜地区埋蔵文化財発掘調査団 1985『三浦市奉行所跡やぐら群の調査』  
 5 三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団 1986『三浦市小網代やぐらの調査』  
 6 三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団 1987『松輪大畑やぐら群の第3次調査』  
 7 三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団 1987『三浦市松輪大畑やぐら群の第2次調査』  
 8 三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団 1987『三浦市三崎宮城やぐら群の調査』  
 9 三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団 1987『三浦市海外やぐら群の調査』  
 10 三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団 1989『三浦市三崎宮城やぐら群の第2次調査』  
 11 三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団 1987『三浦市小網代やぐら群の第2次調査』  
 12 三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団 1989『三浦市和田やぐら群の第3次調査』  
 13 急傾斜地区埋蔵文化財調査団 1990『三浦市矢作第2やぐら群の調査』  
 14 急傾斜地区埋蔵文化財調査団 1990『三浦市二町谷横穴群・西野やぐら群・松輪坪横穴群の調査』  
 15 急傾斜地区埋蔵文化財調査団 1991『三浦市矢作第3やぐら群の調査・西野やぐら群の第2次調査』  
 16 宇内正樹・飯島重一 1994『和田やぐら群の第5次調査』急傾斜地区埋蔵文化財調査団  
 17 野内秀明・降矢順子・飯島重一 1994『間口道跡』急傾斜地区埋蔵文化財調査団  
 18 飯島重一・小暮慶明 1994『西野やぐら群の第3次調査』急傾斜地区埋蔵文化財調査団  
 19 三浦市急傾斜地区埋蔵文化財調査団 1995『三浦市和田やぐら群の第6次調査』  
 20 臼井敦・飯島重一・小暮慶明 1995『松輪間口やぐらの調査』急傾斜地区埋蔵文化財調査団  
 21 急傾斜地区埋蔵文化財調査団 1996『松輪間口やぐら群の第2次調査』  
 22 矢作やぐら群道跡調査団 1997『矢作第4やぐら群の調査』  
 23 東京大学埋蔵文化財調査室 1997『新井城跡』東京大学構内道跡調査研究年報』I  
 24 梶海規彰 1999『歌舞島やぐら群』かながわ考古学財団調査報告62  
 25 中村勉・諸橋千鶴子・須田英一 2000『大芝原道跡』大芝原道跡発掘調査団  
 26 須田英一 2002『海防陣屋関連土塁』三浦市埋蔵文化財調査報告書第8集 三浦市教育委員会  
 27 宮坂淳一・井間文明・穴戸信悟 2003『白山神社前道跡所在やぐら』かながわ考古学財団調査報告146  
 28 穴戸信悟・櫻井真貴 2003『金田仙神やぐら群』かながわ考古学財団調査報告160  
 29 穴戸信悟・谷正秋 2004『間口またやぐら群』かながわ考古学財団調査報告172  
 30 井間文明・新聞基史 2005『矢作第2やぐら群』かながわ考古学財団調査報告188  
 31 長澤邦夫・山田仁和・横山太郎他 2006『神奈川県三浦市三戸地区道跡群発掘調査報告書』三戸地区埋蔵文化財発掘調査団  
 32 井間文明 2007『西野やぐら群』かながわ考古学財団調査報告215  
 33 横山太郎・山田仁和 2011『神奈川県三浦市白旗西道跡発掘調査報告書』有限会社吾妻考古学研究所

### 葉山町

- 1 塚田明治他 1982『衣笠城跡・後山道跡』日本道路公団・横浜横須賀道路埋蔵文化財発掘調査団  
 2 北原實徳・小林和男・山口義一 1994『間門道跡』間門道跡調査団  
 3 北原實徳・福井一也・山下守昭 2002『木の下道跡』木の下道跡調査団  
 4 穴戸信悟・井間文明・宮坂淳一 2003『竹の谷戸やぐら』かながわ考古学財団調査報告145  
 5 鈴木謙一郎・栗原伸好 2004『旗立山やぐら群』かながわ考古学財団調査報告183

# 近世道状遺構の集成（４）

近世研究プロジェクトチーム

## はじめに

本プロジェクトチームでは、昨年度より近世道状遺構の集成を行っている。

県内の遺跡で発見され、報告されている近世の道状遺構のデータを集成し、規模や構築方法等について検討していく予定である。今回は横浜市に所在する長津田遺跡群住撰遺跡・宮之前遺跡・宮之前南遺跡、南原遺跡、原宿町遺跡・原宿五丁目遺跡第Ⅰ地点、馬場綿内谷遺跡を取り上げる。

## 凡 例

- ・遺構名は報告書の記載に基づく。
- ・縮尺は平面図がスペースに収まるような大きさに適宜変えているため、図ごとに示した。
- ・断面図は報告書に複数記載されている例もあるが、一部を記載することにした。

資料No.	遺跡名	遺構名	文献名
60	長津田遺跡群住撰遺跡	SR001	1996年『長津田遺跡群Ⅱ 住撰遺跡』かながわ考古学財団調査報告12
61	長津田遺跡群宮之前遺跡	SR001	1999年『長津田遺跡群Ⅴ 宮之前遺跡』かながわ考古学財団調査報告68
62	長津田遺跡群宮之前南遺跡	SR001	1998年『長津田遺跡群Ⅳ 宮之前南遺跡』かながわ考古学財団調査報告37
63	長津田遺跡群宮之前南遺跡	SR002	1998年『長津田遺跡群Ⅳ 宮之前南遺跡』かながわ考古学財団調査報告37
64	長津田遺跡群宮之前南遺跡	SR003	1998年『長津田遺跡群Ⅳ 宮之前南遺跡』かながわ考古学財団調査報告37
65	長津田遺跡群宮之前南遺跡	SR004	1998年『長津田遺跡群Ⅳ 宮之前南遺跡』かながわ考古学財団調査報告37
66	南原遺跡	道状遺構	2002年『南原遺跡』かながわ考古学財団調査報告129
67	原宿町遺跡	1号道状遺構	2009年『原宿町遺跡・原宿五丁目遺跡第Ⅰ地点』かながわ考古学財団調査報告238
68	原宿町遺跡	2号道状遺構	2009年『原宿町遺跡・原宿五丁目遺跡第Ⅰ地点』かながわ考古学財団調査報告238
69	原宿五丁目遺跡第Ⅰ地点	K1号道状遺構	2009年『原宿町遺跡・原宿五丁目遺跡第Ⅰ地点』かながわ考古学財団調査報告238
70	馬場綿内谷遺跡	K1号道状遺構	2013年『馬場綿内谷遺跡』かながわ考古学財団調査報告295
71	馬場綿内谷遺跡	K2号道状遺構	2013年『馬場綿内谷遺跡』かながわ考古学財団調査報告295
72	馬場綿内谷遺跡	K1～10号硬化面	2013年『馬場綿内谷遺跡』かながわ考古学財団調査報告295

資料No	60	遺跡名	長津田遺跡群住撰遺跡
所在地	横浜市緑区長津田町		
遺構名	SR001		
道幅	0.4～0.5m		
年代	宝永火山灰噴火前後に使用		
備考	溝状に掘り込まれた道、検出長65m、東西両端とも調査区外に延びる、4層の硬化面、北側に平行する溝状遺構（SD002）があるが溝よりも古い		
縮尺	(平面図) 1/500 (断面図) 1/100		

近世道状遺構の集成 (4)

資料No	61	遺跡名	長津田遺跡群宮之前遺跡
所在地	横浜市緑区長津田町		
遺構名	S R O O 1		
道幅	1.34m		
年代	宝永火山灰噴火前から使用		
備考	検出長100.76m、硬化面厚さ8~24cm、溝底から立ち上がりにかけての部位にビットが認められる		
縮尺	(平面図) 1/200 (断面図) 1/200		

資料No	62	遺跡名	長津田遺跡群宮之前南遺跡
所在地	横浜市緑区長津田町		
遺構名	SR001		
道幅	0.2~0.6m		
年代			
備考	溝状に掘り込まれた道、検出長54.2m、一端は調査区外に延びる、南西側に小ピット多数あり、SR002に切られる		
縮尺	(平面図) 1/200 (断面図) 1/60		

近世道状遺構の集成 (4)

資料No.	63	遺跡名	長津田遺跡群 宮之前南遺跡	資料No.	64	遺跡名	長津田遺跡群 宮之前南遺跡
所在地	横浜市緑区長津田町			所在地	横浜市緑区長津田町		
遺構名	SR002			遺名	SR003		
道幅	0.7~1.6m			道幅	最大で0.45m		
年代				年代			
備考	検出長13.8m、西端は調査区外に延びる、礫化面厚さ20cm、SR001を切る			備考	検出長9.1m、2号段切りの段テラスにあり		
縮尺	(平面図) 1/150 (断面図) 1/60			縮尺	(平面図) 1/60		

資料No	65	遺跡名	長津田遺跡群 宮之南南遺跡	資料No	66	遺跡名	南原遺跡
所在地	横浜市緑区長津田町			所在地	横浜市保土ヶ谷区川島町		
遺構名	S R O O 4			遺 名	道状遺構		
道 幅	0.9m			道 幅	2.65m		
年 代				年 代	宝永山噴火以降に構築		
備 考	検出長2.5m、端部のみ検出、西端は調査区外へ延びる			備 考	検出長14.3m、硬化面厚さ3~10cm		
縮 尺	(平面図) 1/60 (断面図) 1/60			縮 尺	(平面図) 1/100 (断面図) 1/100		

近世道状遺構の集成 (4)

資料No	67	遺跡名	原宿町遺跡	資料No	68	遺跡名	原宿町遺跡
所在地	横浜市戸塚区原宿町			所在地	横浜市戸塚区原宿町		
遺構名	1号道状遺構			遺名	2号道状遺構		
道幅	1.9~2.2m			道幅	0.55m		
年代	宝永噴火以前に廃絶			年代			
備考	検出長22m、硬化面厚さ3cm、幅1m・深さ0.1mの側溝を伴う、宝永スコリアで埋まった溝に切られる			備考	検出長4m、北側は調査区外にも伸びている、硬化面厚さ10cm		
縮尺	(平面図) 1/200 (断面図) 1/100			縮尺	(平面図) 1/60 (断面図) 1/60		



資料No.	69	遺跡名	原宿五丁目遺跡第1地点	資料No.	70	遺跡名	馬場縮内谷遺跡
所在地	横浜市戸塚区原宿町			所在地	横浜市鶴見区馬場		
遺構名	K1号道状遺構			遺名	K2号道状遺構		
道幅	0.9m以上			道幅	1.9m前後		
年代	宝永噴火直後まで使用			年代			
備考	溝状に掘り込まれた道、検出長5.3m、一部のみ検出、硬化面2面、硬化面厚さ15~20cm、硬化面最上部に宝永火山灰が堆積			備考	U字状に掘り込まれた溝、検出長20.2m		
縮尺	(平面図) 1/60 (断面図) 1/60			縮尺	(平面図) 1/150 (断面図) 1/60		

近世道状遺構の集成 (4)

資料No	71	遺跡名	馬場跡内容遺跡
所在地	横浜市鶴見区馬場		
遺構名	K 1号溝状遺構		
道幅	18世紀以降に埋まり機能喪失		
年代	K 1 硬化面0.2~0.8m、K 2 硬化面0.2~0.8m、K 3 硬化面0.8~2.8m		
備考	ロームを溝状に掘り込む道、溝に直行するように底部を一定の間隔で長楕円形に掘り込んでいる(波板状凹凸面)、3条の硬化面、検出長K 1 硬化面50m、K 2 硬化面64m、K 3 硬化面91m、硬化面3には幅0.3~0.95m・深さ0.14~0.2mの側溝が付随		
縮尺	(平面図) 1/800 (断面図) 1/80		

資料No	72	遺跡名	馬場納内谷遺跡
所在地	横浜市鶴見区馬場		
遺構名	K1～10号硬化面		
道幅	1号0.5m、2号1.4m、3号2.2m、4号0.3～0.55m、5号0.5m、6号0.2～0.6m、7号0.52m、8号0.4～0.8m、9号0.4～0.8m、10号0.4m		
年代	18世紀以降に埋まり機能損失		
備考	4号・5号・10号は溝状に掘り込まれた道、検出長は1号0.3m・2号0.2m・3号1m・4号30m・6号18.6m・7号15.4m・8号15.2m・9号2.2m・10号5m、10号は調査区外に延びている、硬化面の厚さ4号10～14cm・5号16cm・7号6cm・10号7cm		
縮尺	(平面図) 1/800 (断面図) 1/60		

# ブナ科種子同定方法の開発

相良英樹

## はじめに

日本各地の遺跡から出土するブナ科果実は、その出土量の多さから重要な食糧資源の一つとして捉えられてきた(吉川2009)。しかし、炭化したブナ科果実、とりわけコナラ属(いわゆるドングリ)(註1)は、種まで特定することは難しい。これは、炭化することで同定の根拠となる形態的特徴が変形、または消失するからと言われている(古環境研究所1994)。約4割の遺跡で種まで同定されていない近年の集成結果からも、同定の難しさが見て取れよう(和田2004)。科や属、亜属までの同定に留まる現状は、遺跡周辺の植生や人間の堅果利用や選択を検討する上で解決すべき課題である。特に関東地方のように、台地上に多くの遺跡が立地し、炭化したブナ科果実の出土例が多い地域では、種を絞り込む意義は大きい。

そこで本稿では、ブナ科果実の形態的特徴を改めて見直し、炭化したブナ科種子の新たな同定方法について検討する。そのため、はじめにこれまでの研究成果について整理した上で、ブナ科種子の特徴を抽出し、遺跡から出土した炭化資料と比較することでその有効性を検証したい。

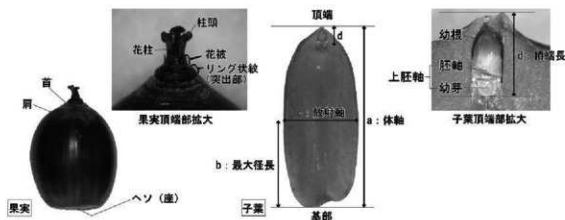
## 1. 先行研究と課題の所在

ブナ科果実の同定に関する知見は少なく、管見では岡本素治と小畑弘己の論考だけである(岡本1979、小畑ほか2003、小畑2011)。

岡本は果皮が剥がれた子葉状態(註2)のイチイガシを同定する根拠について3つ挙げている。1つ目は子葉の離れにくさについてである。通常、果実の中には、閉じた2枚の子葉が収められているが、乾燥や炭化することで変形し、この2枚の子葉が分離する。ところがこの分離の程度は種によって異なり、イチイガシについては分離しない種といわれる(注3)。2つ目は先端部の形状についてである。ブナ科植物の種子は先端部が尖ることが多いが、イチイガシの場合は、ごくわずかな盛り上がりとなって見られる。3つ目は子葉表面に観察される圧痕についてである。子葉表面に皺や圧痕となって現れるものの中でも、子葉基部から側面中央部分にかけて明瞭な溝となって残る中軸の圧痕(第6図8d-1・2, 8i)はイチイガシを特徴づける痕跡であると指摘される。

岡本の研究は、イチイガシの詳細な観察結果に基づいた重要な研究であると言える。しかし、イチイガシについての個別事例の研究であるため、その他の種への言及は少ない。そのため、上述の子葉の先端部の形状、子葉表面の圧痕について、イチイガシ以外の種についても観察を行う必要がある。

小畑弘己は、3属17種のブナ科果実の識別のため、フローチャートを提示した。種分類の識別ポイントは外果皮部分では、果実全体の形状と花柱、座の特徴、子葉の形状と基部付近の窪み(岡本のいう中軸の圧痕)であるという。また、炭化実験による子葉の減少率を求め、出土資料と比較することで識別方法の有効性について検証している。その後、小畑は子葉の形態的特徴およびコナラ・ミズナラの底部に認められる窪みを根拠とした識別方法を用いて、同定を行っている(小畑2012)。この報告にもあるように、小畑の研究は、イチイガシ以外の種についても分析を試みている点において重要である。特にコナラ亜属の子葉基部の窪み



第1図 プナ科種実の各部分名称および計測部位

に注目した点は、その後の研究でも分類する根拠となっており、炭化子葉を識別する際に有効と考えられる(那須・中沢2017)。一方で、種の形態的特徴を決定する際に、10点に満たない試料を用いている点や、一部のアカガシ亜属(ツクバネガシ)を分析対象に含めていない点などは検討の余地がある(小畑2011)。このことから、分析対象に含まれていない種を追加し、試料を増加させた上で、出土した資料と比較検討する。なお、ここでいうプナ科果実とは岡本や小畑の研究成果に用いられているコナラ属・シイ属・マテバシイ属に限定する。

## 2. 研究の方法

本研究ではこれまでの研究史をふまえ、プナ科果実内の子葉について、以下の点に注目して研究を行う。(1) 現生のプナ科果実を採取し、計測する。計測箇所は、a: 頂端から基部までの長さ(以下、体軸)、b: 子葉の最大径の幅(以下、放射軸)、c: 基部から最大径までの長さ(以下、最大径長)、d: 上胚軸(註4)から頂端までの長さ(頂端長)の4箇所とする。なお、前述の計測部位に加え、本論文で用いるプナ科種実の各部分名称もあわせて図示する(第1図)。果実頂端の各部分名称については岡本の論考を参考とした(岡本1973)。(2) それぞれの種を形態的特徴に基づいて分類する。分類する項目は、頂端部と基部の形状、および幼根部分の形状とする。(3) 1と2の観察結果を元に、既報告の考古資料を用いて再同定を試みる。報告書に書かれている分類以上に絞り込めるか検討し、その遺跡の再評価を行う。

現生のプナ科果実は、神奈川県、東京、埼玉、山梨を中心に、一部、大阪、和歌山で採取した(註5)。採集した種類はコナラ属14種(コナラ亜属7種・アカガシ亜属7種)、マテバシイ属2種、シイ属2種の合計3属18種である(第1表)。試料は可能な限り1種につき2本(以上)の木からそれぞれ50個体を目安に採取した。これは、同種においても生育環境の差から、個体差が予想されたためである。採取した試料は十分に乾燥させた後、果実から子葉を取り出し計測・撮影を行った。

## 3. プナ科種子の形態分類

ここでは採取したプナ科種子の観察に基づき、形態分類を行う。その際、ドングリの学術名や分布域の情報と記載順に関しては、平凡社の『日本の野生植物木本1』(佐竹ほか編1989)および『神奈川県植物誌2001』

ブナ科種子同定方法の開発

第1表 ブナ科種子計測値

試料No.	種名	採取地	a: 体軸	b: 最大径長	c: 放射軸	d: 頂端長	試料数
1	ウバメガシ	東京都日野区駒場	11.8-18.3	5.3-9.7	7.7-10.9	2.1-3.5	40
2	ウバメガシ	京都府京都市左京区下鴨半木町	12.3-20.3	5.1-9	7.6-12	2.1-4	32
3	クスギ	東京都八王子市鎌水	15.7-19.1	5.9-9.3	13-17.4	2.1-4	50
4	クスギ	山梨県甲府市下向山町	11.6-16.9	4.3-8.2	13.9-18	2.2-3.7	50
※5	アベマキ	岡山県岡山市北区理大町	15.2-20.5	5.5-10.6	12.6-15.9	3.4-4.9	27
※6	アベマキ	岡山県岡山市北区理大町	14.1-19.8	4.6-9	11.7-20.5	3.5-8	42
7	カシワ	山梨県甲府市下向山町	13.9-16.8	9.9-13.4	5-7.5	2.1-3.6	19
8	カシワ	神奈川県相模原市緑区澤井	18.1-21.9	12.7-15.5	4.8-8	2.5-4.5	30
9	ミズナラ	東京都調布市深大寺元町	17.6-25.1	5.4-10.6	9.5-12.9	3-5.7	36
※10	ミズナラ	熊本県阿蘇市	13.7-18	4-6.2	7.8-12.9	3.3-5.8	44
11	コナラ	東京都八王子市南大沢	12.7-17.4	6.2-8.7	7-11	1.3-2.9	50
12	コナラ	東京都八王子市南大沢	13-17.2	6-8.8	8.8-10.6	1.5-2.8	50
13	コナラ	東京都多摩市落合	19.5-24.3	9.5-11.6	9.3-11.6	1.7-2.9	50
14	ナラガシワ	東京都八王子市西寺方町	20.6-25.4	9-12.7	9.8-13.2	1.1-3.8	50
15	ナラガシワ	京都府京都市左京区下鴨半木町	14-19.8	6.7-9.6	9.1-12.4	1.2-3.1	50
16	イチイガシ	東京都日野区駒場	11.1-13.1	4.7-6.6	8.4-9.6	0.7-1.6	50
17	イチイガシ	京都府京都市左京区下鴨半木町	12.7-14.9	4.6-6.9	9.2-12	0.8-1.6	50
18	アカガシ	東京都港区芝	13.7-17.9	6-8.3	7.7-11.9	1.2-3	50
19	アカガシ	東京都港区芝	14.5-17.9	4.9-9.7	10-12.3	1.9-3.1	50
20	アカガシ	京都府京都市左京区下鴨半木町	11.4-16	5.1-8.3	8-11	1.4-3	50
21	ハナカガシ	和歌山県岩出市東坂本	8.2-14.1	3.5-8.4	7.1-10.6	1.3-3.4	50
22	ハナカガシ	和歌山県岩出市東坂本	10.9-16.5	5.4-9.5	7.7-11.3	1.9-3.2	50
23	ツクバネガシ	神奈川県交野区師岡町	15.4-18.1	4.5-10.9	10.3-12.3	3.1-4.4	50
24	ツクバネガシ	神奈川県交野区師岡町	9.3-19.2	5.9-9.2	5.6-10.7	2.1-4	50
25	ツクバネガシ	京都府京都市左京区下鴨半木町	13.8-18.5	5.8-10	8.3-11.8	2.4-4.4	50
26	アラカシ	神奈川県秦野市柳町	10.2-12.6	3.5-5.5	6.7-10.2	1.3-2.6	50
27	アラカシ	和歌山県岩出市東坂本	9.3-14	4.3-8.6	7.4-11.9	1.4-2.5	50
28	ウラジロガシ	東京都八王子市甘里町	11.2-15.6	4.6-7.3	5.4-9.2	1.1-2.7	38
29	ウラジロガシ	東京都品川区小山台	11.8-16	4.8-7.9	6.4-10.6	1.3-2.3	15
30	ウラジロガシ	東京都町田市下小山田町	12.9-16.1	4.9-8	8.9-11.7	1.4-3	50
31	シラカシ	東京都八王子市鶴田町	12.6-15.6	5.7-8.5	7.8-10.6	1.2-2.3	50
32	シラカシ	東京都八王子市下柚木	13.1-15.4	5.7-8.2	7.1-10.5	1.1-2	50
33	スダジイ	東京都八王子市南大沢	11.8-15.6	4-5.9	6.7-8.8	1-1.8	50
34	スダジイ	東京都八王子市鎌水	11.4-16.8	3.3-5.6	6.4-9.4	0.7-1.3	50
35	ツブラジイ	和歌山県岩出市東坂本	7-9.6	2.1-4	5.2-7.6	0.6-1.2	19
36	ツブラジイ	大阪府吹田市千里	7.1-8.3	2.4-3.7	4.7-7.2	0.6-1.3	20
37	マテバシイ	東京都新宿区西新宿	19.7-22.2	6.3-9.6	8.6-12.1	-	38
38	マテバシイ	東京都日野市神明	13.8-20.1	4.4-6.9	8.5-11.5	0.8-1.5	45
39	シリブカガシ	東京都新宿区内藤町	9.9-12.2	2.9-5.3	6.9-9.8	0.4-1	42
40	シリブカガシ	京都府京都市左京区下鴨半木町	10.1-14.4	3.2-5.7	7.4-9.7	0.4-1.2	50
試料No.	遺構名	出土地点	a: 体軸	b: 最大径長	c: 放射軸	d: 頂端長	資料数
41	北川表の上	40 号住居址	6.7-10.3	3.1-4.9	5.2-8.9	0.3-1.1	32
42	矢掛・久保	2区 19 号住居址	11.1-16.2	4.4-9.1	8.4-11	1.2-3.4	19

※一提供を受けた試料

計測単位 (mm)

(神奈川県植物誌調査会2001)を参考とした。

コナラ属 (*Quercus* L.) コナラ亜属 (Subgen. *Quercus*)

①ウバメガシ (*Quercus phillyraeoides* A. Gray): 本州 (千葉県以西)、四国、九州、琉球に分布する。神奈川県内では三浦半島の海岸近くに自生地があるが、県内の丘陵地にわずかに見られるものは逸出と言われる。果皮から取り出した際に、子葉の多くは2枚に分離していた。子葉外面は縦方向に数条の皺が観察された。頂端部は肩部がほとんど発達せず鋭い。基部あるいは基部に近い側面に窪みが見られる個体が多く観察された。幼根部分は、上胚軸側がやや丸みも持つが、全体の形状は砲弾形である (第5図1a~1f)。

②クスギ (*Quercus acutissima* Carruthers): 本州 (岩手県・山形県以南)・四国・九州・琉球の山地、丘陵地にふつうに見られる。神奈川県内では丹沢や箱根の上部を除き全域にごく普通に見られる。果皮から取り

出した際に、ほとんどの個体は2枚の子葉が合着していた。このため、内面を観察するために、カミソリ等で子葉の合わせ目に沿って分割した。個体によっては完全に固着し、カミソリ等での分割が不可能な個体もあった。子葉外面には縦方向の皺が顕著にみられ、内面には白色粒子が全面に観察された。頂端はわずかな突起が見られ、基部は全体が咬歯状の凹凸のほか、中央部分がわずかに窪む。幼根の先端は丸みを帯び、全体の形状は砲弾形である(第5図2a~2f)。

### ③アベマキ (*Quercus variabilis* Blume)

本州(日本海側は山形県以西、太平洋側は静岡県以西)、四国、九州に分布する。横浜市内には植林された場所があり、逸出の可能性があるとされている。クヌギと同様に多くの個体は2枚の子葉が合着していた。子葉外面には縦方向の皺が顕著にみられ、内面にはクヌギ同様に白色粒子が全面に観察された。頂端には突起が見られ、基部は全体が咬歯状の凹凸のほか、中央部分がわずかに窪む。幼根の先端は丸みを帯び、全体の形状は砲弾形である。幼根部はクヌギと比べひと回り大きい(第5図3a~3f)。

④カシワ (*Quercus dentata* Thunb. ex Murray): 北海道・本州・四国・九州に分布する。神奈川県内では丘陵地から山地ブナ帯まで広く見られるが少ない。果皮から取り出した際に、子葉の多くは2枚に分離していた。子葉外面には縦方向の皺が顕著にみられ、内面は概ね平滑である。頂端はわずかな突起が見られ、基部は抉るような窪みが観察される。幼根の先端は丸みを帯び、全体の形状は砲弾形である(第5図4a~4f)。

⑤ミズナラ (*Quercus crispula* Blume): 国内では北海道・本州・四国・九州に分布する。神奈川県内では丹沢・箱根・小仏山地のブナ帯の下部に普通にみられる。果皮から取り出した際に、子葉の多くは2枚に分離していた。子葉外面には縦方向の皺が顕著にみられ、内面は概ね平滑である。頂端はわずかな突起が見られ、基部には内面に向かって抉るような窪みが観察される。カシワやコナラと比べ、幼根は頂端からやや奥まった所にある。幼根先端は丸みを帯び、全体の形状は砲弾形である(第5図5a~5f)。

⑥コナラ (*Quercus serrata* Thunb. ex Murray): 北海道・本州・四国・九州に分布する。神奈川県内では丹沢の最上部を除いてきわめて普通にみられる。果皮から取り出した際に、子葉の多くは2枚に分離していた。子葉外面には縦方向の皺が顕著にみられ、内面は平滑である。頂端はわずかな突起が見られ、基部には内面に向かって抉るような窪みが見られる。幼根の先端は丸みを帯び、全体の形状は砲弾形である(第5図6a~6f)。

⑦ナラガシワ (*Quercus aliena* Blume): 本州(岩手県・山形県以南)、四国・九州に分布する。神奈川県内では丘陵地から山地にかけて稀に見られる。果皮から取り出した際に、子葉の多くは2枚に分離していた。子葉外面には縦方向の皺が見られ、内面は平滑である。頂端はわずかな突起が観察され、窪みは基部中央から側面下部にかけて顕著である。幼根の先端は丸みを帯び、全体の形状は砲弾形である(第6図7a~7f)。

### コナラ属 (*Quercus* L.) アカガシ亜属 (Subgen. *Cyclobalanopsis*)

⑧イチイガシ (*Quercus gilva* Blume): 本州(関東地方以西の太平洋側)・四国・九州・琉球に分布する。神奈川県内では稀にしかみられない。果実頂端部の花被下にはリング状の紋を持った突出部(以下、リング状突出部)が観察される。このリング状の構造はアカガシ亜属に特徴的に観察されるもので、コナラ亜属には観察されない(岡本1973)。果皮から取り出した際に、すべての個体は2枚の子葉が合着していた。子葉外面は比較的平滑で、内面には中央部を除いて、リング状に白色粒子が観察される。頂端部はほとんど突起が発達しない。基部から側面中央部付近にかけて1条の溝が観察される個体が多いが、2本に分かれた個体もある。幼根は先端に小突起をもつ、かぶ(蕪)形である。コナラ亜属ほど幼根と上胚軸との区分は明確ではない(第6図8a~8i)。

⑨アカガシ (*Quercus acuta* Thunb. ex Murray): 本州 (宮城県・新潟県以南)・四国・九州に分布する。神奈川県内では沖積地と丹沢、箱根の上部を除く地域にやや普通にみられる。果実頂端部の花被下にはリング状突出部が観察される。果皮から取り出した際に、子葉の多くは2枚に分離していた。子葉外面も内面も概ね平滑である。頂端は肩部から急に立ち上がる突起が見られ、基部にはわずかな窪みが観察される。幼根の先端はコナラ亜属と比べ鋭い個体が多く、全体の形状は水滴形である。頂端の突起内に幼根の一部が入り込んでいる (第6図9a~9f)。

⑩ハナガシ (*Quercus hondae* Makino): 四国 (高知県)・九州 (大分県・宮崎県・熊本県・鹿児島県) に分布するが、個体数は少ない。神奈川県内には自生しない。果実頂端部の花被下にはリング状突出部が観察される。果皮から取り出した際に、子葉の多くは2枚に分離していた。子葉外面も内面も概ね平滑である。頂端は肩部から急に立ち上がる突起が見られ、基部にはわずかな窪みが観察される。幼根の先端は鋭く、全体の形状は水滴形である。頂端の突起内に幼根の一部が入り込んでいる (第6図10a~10f)。

⑪ツクバネガシ (*Quercus sessilifolia* Blume): 本州 (宮城県・富山県以西)・四国・九州に分布する。神奈川県内では台地から山地に見られるが、少ない。果実頂端部の花被下にはリング状突出部が観察される。果皮から取り出した際に、子葉の多くは2枚に分離していた。子葉外面も内面も概ね平滑である。頂端は肩部から急に立ち上がる突起が見られ、基部にはわずかな窪みが観察される。幼根の先端は鋭く、全体の形状は水滴形である。頂端の突起内に幼根の一部が入り込む (第6図11a~11f)。

⑫アラカシ (*Quercus glauca* Thunb. ex Murray): 本州 (宮城県・石川県以西)・四国・九州に分布する。神奈川県内では丹沢、箱根の上部と三浦半島を除く地域に普通に見られる。果実頂端部の花被下には木化した肩部にリング状の痕跡が観察される。種皮から取り出した際に、子葉の多くは2枚に分離していた。子葉外面も内面も概ね平滑である。頂端は肩部から急に立ち上がる突起が見られ、基部にはわずかな窪みが観察される。幼根の先端は鋭く、全体の形状は水滴形である。頂端の突起内に幼根の半分程度が入り込む (第7図12a~12f)。

⑬ウラジロガシ (*Quercus salicina* Blume): 本州 (宮城県・新潟県以西)・四国・九州・琉球に分布する。神奈川県内では台地、丘陵地からブナ帯下部まで普通に見られる。果実頂端部の花被下にはリング状突出部が観察される。果皮から取り出した際に、ほとんどの個体は2枚に分離していた。子葉外面も内面も平滑である。頂端は肩部から急に立ち上がる突起があり、基部にはわずかな窪みが観察される。幼根の先端は鋭く、幼芽までを含めた全体の形状は水滴形である。頂端の突起内に幼根の一部が入り込む (第7図13a~13f)。

⑭シラカシ (*Quercus myrsinaefolia* Blume): 本州 (宮城県・新潟県以西)・四国・九州に分布する。神奈川県内では丹沢、箱根の上部を除き全域に普通に見られる。果実頂端部の花被下にはリング状突出部が観察される。果皮から取り出した際に、子葉の多くは2枚に分離していた。子葉外面も内面も概ね平滑である。頂端は肩部から急に立ち上がる突起があり、基部にはわずかな窪みが観察される。幼根の先端は鋭く、全体の形状は水滴形である。頂端の突起部に幼根の1/2から2/3程度が入り込む (第7図14a~14f)。

#### シイ属 (*Castanopsis*)

⑮スダジイ (*Castanopsis sieboldii* Makino): 本州 (福島県・新潟県以西)・四国・九州 (屋久島まで) に分布する。神奈川県内では丹沢、箱根、小仏山地以外には普通に見られる。果皮から取り出した際に、子葉の多くは2枚に分離していた。子葉外面も内面も概ね平滑である。頂端部から幼根が突出する。幼根の先端はやや丸みも帯び、全体の形状は砲弾形である。基部にはほとんど窪みが観察されないが、側部には頂端まで浅い溝が1本観察される。(第7図15a~15f)。



⑩ツブラジイ (*Castanopsis cuspidate* Thunb. ex Murray): 本州 (関東地方以南)・四国・九州 (屋久島まで) に分布する。神奈川県内には自生していない。果皮から取り出した際に、子葉の多くは2枚に分離していた。子葉の外側も内側も概ね平滑である。頂端部から幼根が突出する。幼根は先端に小突起をもつかぶ形である。基部にはほとんど窪みは観察されない。(第7図16a~16f)。

#### マテバシイ属 (*Lithocarpus*)

⑪マテバシイ (*Lithocarpus edulis* (Makino) Nakai; *Pasania edulis* Makino): 自生範囲は不明瞭であるが、元来の自生地は九州および琉球と推定される。神奈川県内では三浦半島に薪炭用として植林されているほか、各地に逸出が見られる。果皮から取り出した際、すべての個体は2枚の子葉が合着していた。子葉外側は縦方向の皺が数条観察されたほか、基部から頂端まで明瞭な溝が1本観察される。内面には全面に白色粒子が観察された。頂端部から幼根が一部突出する。幼根の先端はやや丸みを帯び、全体の形状は砲弾形である (第7図17a~17f)。

⑫シリフカガシ (*Lithocarpus glabra* [Thunb. ex Murray] Nakai; *Pasania glabra* [Thunb. ex Murray] Oerst.): 本州 (近畿地方以西)・四国・九州・琉球に分布する。神奈川県内では植樹等からの逸出が見られる。果皮から取り出した際、すべての個体は2枚の子葉が合着していた。このため、子葉外側は縦方向の皺が観察されたほか、底部から頂端まで明瞭な溝が確認される個体が多い。内面には白色粒子が全面に観察された。頂端部から幼根が一部突出する。幼根の先端はやや丸みを帯び、全体の形状は砲弾形である (第7図18a~18f)。

## 4. 考察

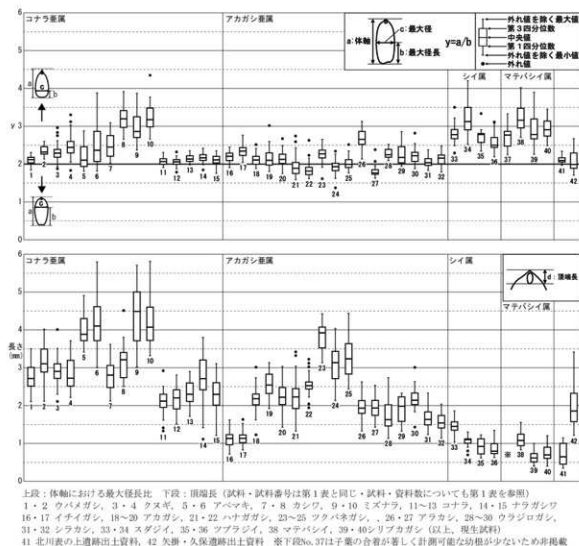
これまで観察した結果から分類に有効な点を抽出し、実際の資料との比較を行いたい。

(1) 先端部および基部の形状: 先端部と基部の観察の結果、大きく3つに分類出来ることが分かった。1つ目は、先端部が首を形成することなく鋭角になる鋭尖形、2つ目はわずかな盛り上がりを見せる微突形、3つ目は首の部分から急な立ち上がりを見せる突形である。基部については、コナラ亜属は明瞭な窪みを持つ個体が多く、アカガシ亜属とマテバシイ属はわずかな窪み、シイ属はほとんど窪みが無い。明瞭な窪みを持つタイプは子葉内面に挟れるような窪み、あるいは基部全体に咬歯状の窪みを持つ種に分類される。

(2) 体軸値と最大径長値の関係: 最大径の位置は種により異なる。そのため、計測結果を基に体軸値における最大径長の割合を示すため、体軸値を最大径長値で除した。この結果、種ごとにある程度まとまりを持つことが明らかとなった (第2図上段)。この箱ひげ図 (註6) では、y値2が中央値を示す。例えば2より数値が上昇すれば、最大径が体軸の中で下方に位置し、いわゆる下膨れの形状であることを意味する。この結果、個体差はあるが、カシワやミズナラ、シイ属、マテバシイ属などは最大径が体軸の下方にあり、ハナガガシはやや上方にあることを示す。また、アラカシは採取した木によって、上方、下方それぞれの値を示すことから、変異が著しいと言える。

(3) 頂端長と幼根の平面形態: 頂端長 (上胚軸から頂端までの長さ) は、個体差はあるが、種ごとに長さが一定であることが判明した (第2図下段)。現生試料の計測結果によると、長さが4.5mmを超える種はアベマキ、ミズナラに限られ、1.0mmを下回る種はイチイガシ、シイ属、マテバシイ属にのみ認められる。

幼根部分 (上胚軸を含む) については平面形態が異なることが認められた。コナラ亜属とスタジイ、マテバシイ属は砲弾形、イチイガシとツブラジイはかぶ形、その他のアカガシ亜属は幼根側が鋭く、上胚軸側が丸い形状であることから、水滴形と判断される。以上の結果から、幼根部分を大きく砲弾形、かぶ形、水滴



第2図 現生試料および出土資料の統計図























































形の3タイプに分類した。

(4) 子葉の合着度合い：2枚の子葉の合着度合いは、岡本が指摘するように、5種に限られることが確かめられた（岡本1979）。5種に共通する点は白色粒子によって2枚の子葉が固着していることである。

上記の観察結果をまとめた分類案が第3図である。この分類図によれば、これまで同定の根拠とされた子葉の長幅比や形態的特徴、側面にある溝状の圧痕に加え、子葉の分離度合い、頂端長、幼根部分の形態分類により種を絞り込むことが可能である。

(5) 考古資料における応用：ここでは、上記の子葉の計測結果と形態分類を元に、神奈川県内の2つの遺跡から出土した資料と比較し、その有効性について検討する。1つは横浜市都筑区に所在する北川表の上遺跡、もう1つは相模原市緑区に所在する矢掛・久保遺跡である（第4図）。

北川表の上遺跡は早瀬川に面した遺跡で、早瀬川流域における弥生時代後期から古墳時代の拠点的な集落と捉えられている。炭化種子が出土した遺構は古墳時代後期（注7）の焼失住居跡で、多くの炭化材、焼土が出土した（財団法人横浜市ふるさと歴史財団2009）。

属・亜属	種	先端部	基部	幼根・上胚軸	子葉	備考
コナラ亜属	ウバメガシ	鋭尖形 	基部から側面に窪み有り 	砲弾形 	○	
	クスギ	微突形 	咬歯状の窪み 	砲弾形 	×	
	アベマキ	突形 	咬歯状の窪み 	砲弾形 	×	
	カシワ	微突形 	内面に挟れるような窪み 	砲弾形 	○	
	ミズナラ	微突形 	内面に挟れるような窪み 	砲弾形 	○	
	コナラ	微突形 	内面に挟れるような窪み 	砲弾形 	○	
	ナラガシワ	微突形 	基部から側面下部にかけて窪み 	砲弾形 	○	
アカガシ亜属	イチイガシ	微突形 	わずかな窪み 	かぶ形 	×	基部から側面中央に溝状の圧痕あり(1あるいは2条)
	アカガシ	突形 	わずかな窪み 	水滴形 	○	
	ハナガシ	突形 	わずかな窪み 	水滴形 	○	
	ツクバネガシ	突形 	わずかな窪み 	水滴形 	○	
	アラカシ	突形 	わずかな窪み 	水滴形 	○	先端部に幼根の1/2程度が入る
	ウラジロガシ	突形 	わずかな窪み 	水滴形 	○	
	シラカシ	突形 	基部から側面にわずかな窪み 	水滴形 	○	先端部に幼根の2/3以上が入る
シイ属	スダジイ	鋭尖形 	ほとんど窪み無し 	砲弾形 	○	先端部から幼根が突出する
	ツブラジイ	鋭尖形 	ほとんど窪み無し 	かぶ形 	○	
マテバシイ属	マテバシイ	突形 	わずかな窪み 	砲弾形 	×	基部から先端まで側面に溝状圧痕あり
	シリブカガシ	鋭尖形 	わずかな窪み 	砲弾形 	×	基部から先端まで側面に溝状圧痕あり

○ = 分離しやすい、× = 分離しにくい

第3図 ブナ科子葉の形態分類

北川表の上遺跡の報告書によれば、コナラ属アカガシ亜属の炭化果実破片が2点、コナラ属の炭化子葉が完形(2枚の子葉が合着した状態を維持した資料)23点、破片71点が出土した。実見した際にはリング状突出部が残存する炭化果実が1点(第8図19a)のほか、計測可能な資料は43点あった。その内、幼根部分が遺存したものは6点である。計測の結果、体軸値における最大径長の割合はコナラ、ナラガシワ、アカガシ亜属に近い値である。(第2図上段)頂端長は最長で1.1mmを測り、現生試料と比べた場合、シイ属・マテバシイ属を除けば、アカガシ亜属ではイチイガシのみが近似値を示す(第2図下段)。第3図に照らし合わせた場合、頂端部分の盛り上がりは微突形を呈し、幼根部分の形状は、先に分類した4タイプの中では、かぶ形に近い形状である(第8図19e-1・2)。子葉単体での完形資料も23点と多く、分離しにくい種と判断出来る。これらのことを考慮した結果、主体を占める種はイチイガシと考えられる。矢掛・久保遺跡は、境川右岸の相模野台地上に立地する奈良・平安時代を主体とする遺跡である。ブナ科種子が出土した遺構は平安時代後期(11世紀)の住居址で、報告書では4点がコナラ属と同定される(相模原市教育委員会1989)。実見した際には未報告資料の中に、リング状突出部が残存する炭化果実が1点(第8図)のほか、計測可能な資料は

19点あった。子葉単体の完形資料は見当たらない。先端部が確認できる資料は多くが突形で、鋭尖形に近い個体もある。底部の窪みはわずかである(20b-1・2, 20c-1・2)。幼根は頂端の突起内に先端のみ入り込み、形態は水滴形に分類される(20d-1)。

矢掛・久保遺跡の資料は、子葉単体での完形資料が無いことから、分離しやすい種であると判断される。また、先端部は概ね突形であり、水滴形の幼根があることから、アカガシ亜属が主体を占めるといえる。頂端長について見ると、アカガシ亜属内ではイチイガシを除く種に近い値を示す(第2図下段)。

更に、幼根の先端部への入り込み割合が半分以下であることから、アラカシやシラカシの可能性は低く、ハナガシも現在の分布地を考慮すると、関東に存在した可能性は低い。以上の点を考慮した結果、幼根の痕跡がある資料については、アカガシ、ツクバネガシ、ウラジロガシの3種に絞り込むことが可能である。

それでは、現在の植生と比較した時、上述の2遺跡から出土した資料はどのような意味を持つのであろうか。北川表の上遺跡から出土した資料が遺跡周辺で採集されたものと考えられるならば、古墳時代の横浜市周辺には、イチイガシを含めたアカガシ亜属が広く分布していたことが窺える。ところが、現在の関東地方にはイチイガシはほとんど分布しない(倉田1971)。遺跡が所在する横浜市にはまったく分布せず、東京都八王子市や神奈川県松田町などにごく稀に分布するだけである(横浜植物会編2003、八王子市史系編集専門部会自然部会編2016、神奈川県教育委員会1987)。矢掛・久保遺跡も現在の周辺の植生は、コナラやクスギが大半を占め、アカガシ亜属ではシラカシやアラカシが優先林を形成している(註8)。遺跡周辺のコナラ属の様相については現代と古墳時代、平安時代では大分異なるのである。

古代の関東においては、イチイガシ材は農具としての利用が盛んであったと言われている(能城ほか2012)。しかし、平安時代以降、生育環境の差から徐々にその数は減少したとの考えがある(百原1997)。古墳時代の北川表の上遺跡でイチイガシが出土し、平安時代後期の矢掛・久保遺跡でアカガシ亜属(アカガシ・ツクバネガシ・ウラジロガシ)が出土した理由は、人為による植生変遷が影響を与えた結果とも考えられる。なぜなら、谷斜面下部などの土壌が厚く湿潤な場所に生育するイチイガシやツクバネガシが、開墾による伐採で減少した一方で、台地斜面上部や山地斜面から尾根にかけて生育するアラカシやウラジロガシ、台地や丘陵上のローム質土壌にも生育するシラカシなどは残り、その後、それらの一部が優先林になったと考えられるからである(百原1997・2004)。

## おわりに

以上、ブナ科種子の現生試料を再分類し、遺跡から出土した資料と比較検討することでその有効性を検証した。その結果、北川表の上遺跡のコナラ属をイチイガシ、矢掛・久保遺跡のコナラ属をアカガシ、ツクバネガシ、ウラジロガシに絞り込んだ同定案を提示することができた。ただし、矢掛・久保遺跡の資料については1種に分類するには至らず、検討の余地が残ったと言える。また、2遺跡の結果が人為によって引き起こされた可能性を検討するには、より多くの出土資料と比較する必要がある。



第4図 遺跡位置図 (S=110万分の1)

## 謝 辞

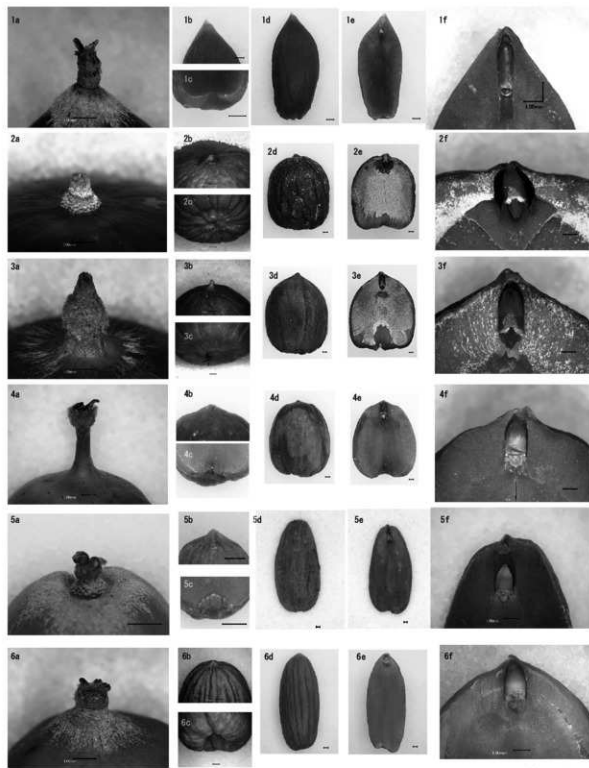
本研究を行うにあたっては、以下の方々にお世話になった。岡山理科大学の那須浩郎氏には現生試料の一部を提供いただき、また議論を通して多大なご助言をいただきました。国立大学法人総合研究大学院大学の本郷一美氏には大学院での器材使用に当たり多くの便宜を図っていただきました。相模原市教育委員会の中川真人氏、公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センターの古屋紀之・山田光洋両氏には資料実見の際に手配していただき、有意義なご意見をいただきました。田端美津枝氏には図版作成に当たり御協力いただきました。都立小山内裏公園管理事務所管理者には公園内の植生についてご教示いただいた。相模原市教育委員会教育局生涯学習部文化財保護課、公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団には資料掲載のご許可をいただいた。以上の方々に篤く御礼申し上げます。

## 【註】

- 1: ドングリはブナ科の中のナラ類やカシ類などナラ属植物の果実の総称である(福田ほか1989)。
- 2: 本来、子葉は種子の一部であるが、ブナ科種子と子葉が同義語として扱われてきた経緯がある(岡本1979)。このため、本論文においてもこれまでの慣例に従い、子葉を種子と同義語として論を進める。
- 3: 岡本によれば5種(クスギ・アベマキ・イチイガシ・マテバシイ・シリブカガシ)に限られる(岡本1979)。
- 4: 上胚軸は、厳密には幼芽の中の茎部分を指すが、境界が明瞭でない場合が多い。このため幼芽と同義語として用いられることがある(2016日本植物学会編)。本論文においても、胚軸と幼芽を含め上胚軸として総称する。
- 5: アベマキとミズナラの一部については岡山理科大学の那須浩郎氏から試料の提供を受けた(第1表参照)。
- 6: 箱ひげ図とはデータのばらつきを表現する統計図で、最小値から数えて、第1四分位数が全体の25パーセント、第3四分位数が全体の75パーセントを意味する(西岡2013)。また、外れ値は第3四分位数+1.5×箱の幅より小さい最大値、第1四分位数-1.5×箱の幅より大きい最小値を表す。
- 7: 住居跡の帰属年代は、報告書では6世紀末から7世紀初頭頃、横浜市歴史博物館で2014年に開催された「大おにぎり展」の図録では6世紀前半と報告されている(横浜市歴史博物館2014)。
- 8: 堀川を挟んで矢掛・久保遺跡のすぐ対岸に所在する都立小山内裏公園では、公園として整備される以前から植生が確認されるアカガシ・照葉はアラカシとシラカシのみである(公園管理事務所管理者のご教示による)。

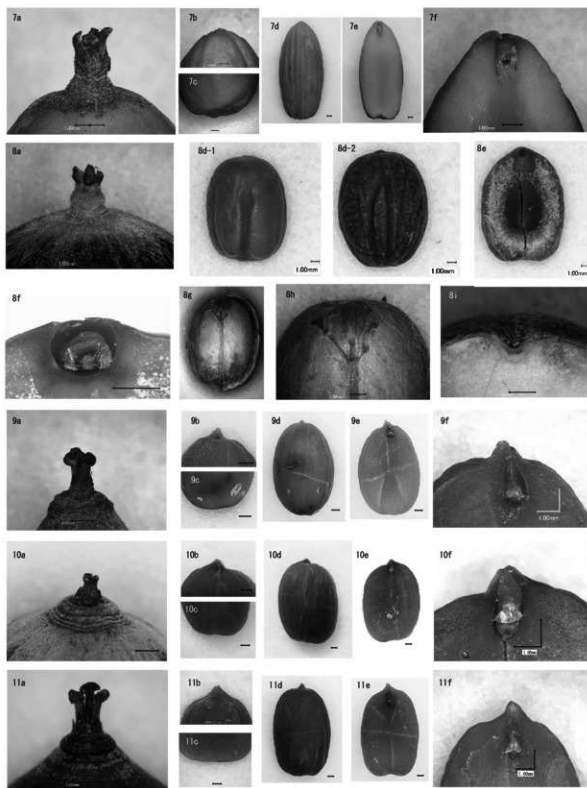
## 【参考文献】

- 岡本素治1973『どングりの話(3)』Nature Study 19巻7号、大阪市立自然史博物館
- 1979『遺跡から出土するイチイガシ』大阪市立自然史博物館研究報告 32、大阪市立自然史博物館
- 小畑弘己2011『東北アジアの古民植物学と縄文農耕』同成社
- 2012『自然科学分析—王子山遺跡の炭化堅果類の同定』『王子山遺跡—山之口小学校校舎新増築改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 都城市文化財調査報告書第107集
- 小畑弘己・坂本紀乃・大坪志子2003『考古学者のためのドングリ識別法』、『考古学研究室創設30周年記念論文集 先史学・考古学論 Ⅳ』。龍田考古会
- 神奈川県教育委員会1987『かながわの名木100選』、神奈川県教育庁文化財保護課
- 神奈川県植物誌調査会2001『神奈川県植物誌2001』、神奈川県立生命の星・地球博物館
- 倉田悟1971『原色日本林業樹木図鑑』第1巻、地球社
- 古蹟研究所1994『自然科学分析(種子同定)』『ノロ遺跡1地点』文化財調査報告書第86集、小都市教育委員会
- 相模原市教育委員会1989『矢掛・久保遺跡の調査、矢掛・久保遺跡調査会
- 佐竹ほか編1989『日本の野生植物本木1』。平凡社
- 高橋秀男・勝山輝男・田中徳久監修2003『横浜の植物』、横浜植物会
- 那須浩郎・中沢道彦2017『小原遺跡出土の植物遺体について』奥信濃文化第29号、飯山市ふるさと館友の会
- 西岡康夫2013『数学チュートリアルやさしく語る確率統計』、オーム社
- 日本植物学会編2016『胚軸』植物学の百科事典、日本植物学会
- 能城雄一・佐々木由香・鈴木三男・村山由美子2012『弥生時代から古墳時代の関東地方におけるイチイガシの木材資源利用』植生史研究 第21巻第1号、日本植生学会
- 八王子市市史編集専門部会自然部会編2016『新八王子市史自然調査報告書八王子市動植物目録』、八王子市市史編さん室
- 堀田謙ほか編1989『世界有用植物事典』
- 百原新1997『弥生時代終末から古墳時代初期の房総半島中部に分布したイチイガシ林』、千葉大園学報第51号
- 2004『自然にみられる特性』『千葉県の自然誌本編 8: 変わりゆく千葉県の自然』県史シリーズ47、千葉県史料研究財団
- 横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター2009『北川表の上遺跡』横浜市埋蔵文化財センター編42、横浜市教育委員会
- 横浜市歴史博物館2014『大おにぎり展—出土資料からみた穀物の歴史—』、横浜市歴史博物館・(公財)横浜市ふるさと歴史財団
- 吉川純子2009『野生食用植物』『縄文時代の考古学3 大地と森の中で—縄文時代の古生部系—』、同成社
- 和田稜三2007『日韓における堅果食文化』、第一書房



スケール：1mm

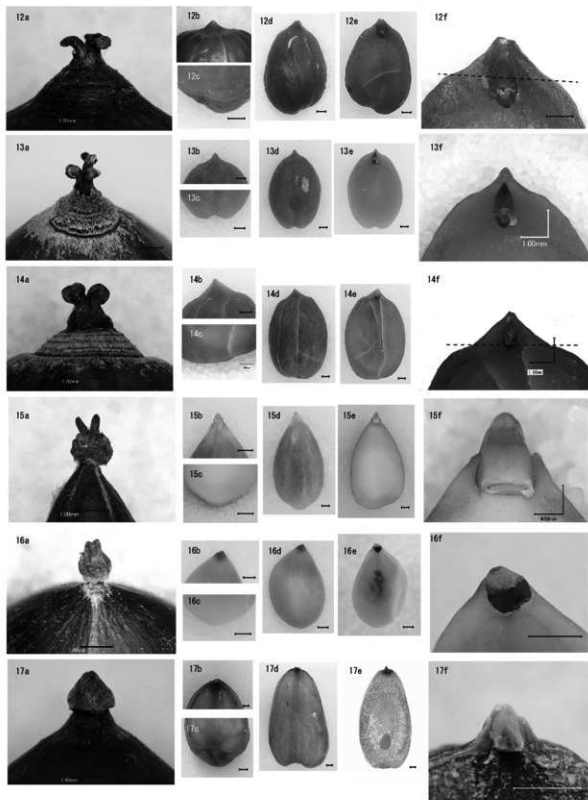
第5図 現生試料(1) 1:ウバメガシ, 2:クスギ, 3:アヤマキ, 4:カシワ, 5:ミズナラ, 6:コナラ, a:花柱  
b:子葉頂端, c:子葉基部, d:子葉外面, e:子葉内面, f:幼根(上胚軸を含む)部分



スケール：1 mm

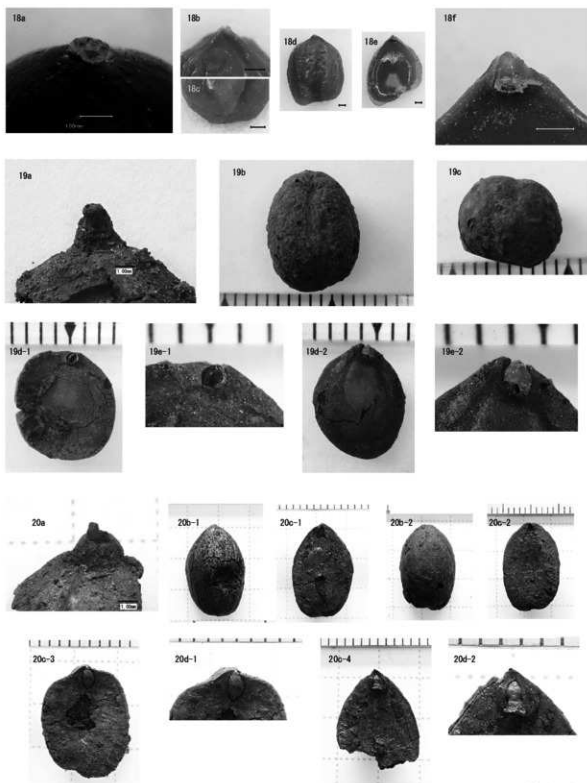
第6図 現生試料(2) 7:ナラガシワ、8:イチイガシ、9:アカガシ、10:ハナガシ、11:ツクハネガシ、a:花柱  
 b:子葉頂端、c:子葉基部、d:子葉外面、e:子葉内面、f:幼根(上胚軸を含む)部分、g:種皮表面の中軸および  
 珠柄部分h:珠柄および退化した胚珠部分、i:子葉中軸(側面溝)部分の横断面

ブナ科種子同定方法の開発



第7図 現生試料(3) 12: アラカシ, 13ウラジログシ, 14: シラカシ, 15: スダジイ, 16: ツブラジイ, 17: マテバシイ,  
 —a: 花柱 b: 子葉頂端, c: 子葉基部, d: 子葉外面, e: 子葉内面, f: 幼根(上胚軸を含む)部分





第8図 現生試料(4)および炭化資料 18: シrubカガシ、-a: 花柱 b: 子葉頂端、c: 子葉基部、d: 子葉外面、e: 子葉内面、f: 幼根(上胚軸を含む)部分 19: 北川表の上道跡出土コナラ属資料-a: リング状突出部、b: 子葉外面、c: 子葉基部、d-1・2: 子葉内面、e-1・2: 幼根部分 20: 矢掛・久保道跡出土コナラ属資料-a: リング状突出部、b-1・2: 子葉外面、c-1~4: 子葉内面、d-1・2: 幼根(上胚軸を含む)部分

研究紀要24

## かながわの考古学

発行日 2019（平成31）年3月25日  
発行 公益財団法人かながわ考古学財団  
〒232-0033 神奈川県横浜市中区中村町3-191-1  
TEL : 045-252-8689 FAX : 045-261-8162  
<http://kaf@kaf.or.jp>  
印刷 アンクベル・ジャパン株式会社